

秋田県文化財調査報告書第71集

才の神遺跡発掘調査報告書

1980・3

秋田県教育委員会

序

由利郡大内町に所在する才の神遺跡は国道105号線バイパス工事に係る遺跡でありました。

そこで県土木部と協議を重ね、遺跡に係る道路部分の事前発掘調査を実施したものです。本報告書はその調査成果をまとめたものです。

調査の結果、縄文時代前期、中期の遺跡が重複していることがわかり、各期の竪穴住居跡などが発見されました。特に縄文時代中期の竪穴住居跡は数が多く、遺跡そのものは大変に広い面積をもつものと推定されるにいたりました。幸い国道は遺跡の北端を通ったことにより、その大部分は道路の南東側に大きく残りました。

しかし、道路が通ったことにより、さらに開発が進むことが予想されますので、地元の大内町教育委員会と連絡をとり、この遺跡の保護には万全を期す必要があろうと考えます。その意味において、今度の調査と本報告書は広く活用されなければならないと思います。

発掘調査にあたっては大内町教育委員会、県立本荘高等学校、同大内分校、由利土木事務所の方々からご協力いただきました。ここに明記して感謝の意を表します。

昭和55年3月

秋田県教育委員会

教育長 畠山芳郎

例　　言

1. 本書は、秋田県教育委員会が昭和54年度に発掘調査を実施した才の神遺跡の調査報告書である。
2. 本書の作成にあたり、以下のように分担して執筆した。

目次の第1章、第2章、第4章、第5章……………富樫 泰時
第3章……………橋本 高史
3. 遺跡の写真撮影は富樫、巖山が行った。遺物の写真撮影は佐藤(和)、鈴木(功)が行った。
4. 本書中の出土遺物の実測図の縮尺は第62図を除いて全て $\frac{1}{20}$ に統一した。出土土器の拓影は $\frac{1}{20}$ に統一した。全体図及び遺構実測図は任意の縮尺であり、それぞれにスケールを付した。方向は全て磁北である。
5. 土色の表記は主に小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帳』を活用した。
6. 土器及び土偶の実測に際しては、秋田県立博物館 庄内昭男氏の協力を得た。
7. 石質の鑑定は、白石建雄氏（秋大講師）のご教示を仰いだ。

目 次

序

第1章 はじめに	1
第1節 発掘調査に至るまで	1
第2節 調査の組織と構成	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
第1節 立地と環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 発掘調査の概要	7
第1節 遺跡の概観	7
1. 遺跡の層序	7
2. 遺構の分布	7
3. 遺物の検出状況	8
第2節 調査の方法	8
第3節 調査の経過	11
第4章 調査の記録	12
第1節 遺構と遺物	12
1. 竪穴住居跡	12
2. 土塙その他	46
第2節 その他の遺物	50
第5章 まとめ	94

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置図	4	第30図 S I—12号出土土器	34
第2図 遺跡の付近図	6	第31図 S I—12号出土石器	34
第3図 層位模式図	7	第32図 S I—15号竪穴住居跡	35
第4図 グリッド模式図	8	第33図 S I—15号出土土器	36
第5図 遺構配図図	9	第34図 S I—15号出土石器	37
第6図 S I—01号竪穴住居跡	12	第35図 S I—16号竪穴住居跡	38
第7図 S I—01号出土土器	13	第36図 S I—16号出土遺物	39
第8図 S I—01号出土石器	14	第37図 II区全体図	40
第9図 S I—02号竪穴住居跡	16	第38図 S I—17号竪穴住居跡	41
第10図 S I—02号出土土器	17	第39図 S I—17号出土土器	42
第11図 S I—02号出土土器	18	第40図 S I—17号出土石器	43
第12図 S I—02号出土石器	19	第41図 S I—23号竪穴住居跡	44
第13図 S I—03号竪穴住居跡	20	第42図 S K—09・13・14号土塙	46
第14図 S I—03号出土土器	20	第43図 S K—20・21号土塙	48
第15図 S I—06号竪穴住居跡	21	第44図 石棒出土地及び出土状態	48
第16図 S I—06号出土土器	21	第45図 土器実測図	52
第17図 S I—06号出土石器	22	第46図 J地区出土土器	53
第18図 S I—07号竪穴住居跡	23	第47図 K地区出土土器	54
第19図 S I—07号出土土器	24	第48図 K地区出土土器	55
第20図 S I—07号出土石器	25	第49図 K地区出土土器	56
第21図 S I—08号竪穴住居跡	26	第50図 K地区出土土器	57
第22図 S I—08号出土土器	27	第51図 K地区出土土器	58
第23図 S I—08号出土石器	27	第52図 K地区出土土器	59
第24図 S I—10号竪穴住居跡	28	第53図 L地区出土土器	60
第25図 S I—10号出土遺物	28	第54図 L地区出土土器	61
第26図 S I—11号竪穴住居跡	30	第55図 L地区出土土器	62
第27図 S I—11号出土土器	31	第56図 M地区出土土器	63
第28図 S I—11号出土石器	32	第57図 N地区出土土器	64
第29図 S I—11号竪穴住居跡	33	第58図 三角形土製品	65

第59図	三角形土製品	66	第73図	石器実測図	80
第60図	三角形土製品	67	第74図	石器実測図	81
第61図	上部断面	68	第75図	石器実測図	82
第62図	石器実測図	69	第76図	石器実測図	83
第63図	石器実測図	70	第77図	石器実測図	84
第64図	石器実測図	71	第78図	石器実測図	85
第65図	石器実測図	72	第79図	石器実測図	86
第66図	石器実測図	73	第80図	石器実測図	87
第67図	石器実測図	74	第81図	石器実測図	88
第68図	石器実測図	75	第82図	II区石器実測図	89
第69図	石器実測図	76	第83図	II区石器実測図	90
第70図	石器実測図	77	第84図	II区石器実測図	91
第71図	石器実測図	78	第85図	II区石器実測図	92
第72図	石器実測図	79			

表 目 次

第1表 遺構内出土石器一覧表………44

第2表 II区出土石器一覧表………93

図 版 目 次

図版1	遺跡遠景・発掘区全景	図版10	S I 12・15竪穴住居跡
図版2	発掘区全景	図版11	S I 16竪穴住居跡
図版3	S I 01竪穴住居跡	図版12	S K 09・13・14土塙
図版4	S I 02竪穴住居跡	図版13	S K 09土塙
図版5	S I 03竪穴住居跡	図版14	S K 14土塙
図版6	S I 06竪穴住居跡	図版15	S K 13土塙
図版7	S I 07竪穴住居跡	図版16	土器・石棒出土状況・石棒出土状況
図版8	S I 10竪穴住居跡	図版17	地層図
図版9	S I 08・11竪穴住居跡	図版18	三角形土製品出土状況・土器出土状況

- | | |
|--------------------|------------------------|
| 図版19 石核・石片出土状況 | 図版32 M・N地区出土土器 |
| 図版20 石核・石片出土状況 | 図版33 土器底部・昭和43年11月出土石棒 |
| 図版21 土器出土状況 | 図版34 三角土製品 |
| 図版22 S I 01出土土器・石器 | 図版35 三角土製品他・石棒 |
| 図版23 S I 02出土土器 | 図版36 土器 |
| 図版24 S I 03・06出土土器 | 図版37 石器 |
| 図版25 S I 07出土土器・石器 | 図版38 石器 |
| 図版26 S I 11出土土器・石器 | 図版39 石器 |
| 図版27 S I 15出土土器・石器 | 図版40 石器 |
| 図版28 J・K地区出土土器 | 図版41 石器 |
| 図版29 K地区出土土器 | 図版42 II地区出土石器 |
| 図版30 K地区出土土器 | 図版43 II地区出土石器 |
| 図版31 L地区出土土器 | |

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至るまで

才の神遺跡は昭和52年に発見された遺跡である。翌53年4月11日付けで大内町教育委員会教育長岡部進一から文化庁長官あて「遺跡発見届」が提出された。これに対して文化庁長官からは昭和53年5月27日付け、委保第5の1471号で「遺跡の発見について（通知）」があり、その保存に十分配慮し、事前発掘調査を実施するよう指示があった。そこで県教育委員会ではその旨を大内町教育委員会及び国道105号線バイパス工事主体者である県土木部道路課あて通知し、道路課と協議に入った。その結果、発掘調査は県教育委員会が主体となって昭和54年春におこなうこと、調査費については県土木部でもつことなどが決定した。

法的には昭和53年7月14日付け、道一126号で秋田県知事小畠勇二郎から文化庁長官あて「発掘通知」が提出された。これに対して、昭和53年9月21日付け、委保第5の2900号で再び事前発掘調査を実施するようにとの指示があった。

以上のような経過を経て、昭和54年春、次のような体制で発掘調査を実施することになったのである。

第2節 調査の組織と構成

調査目的	国道105号線バイパス工事に伴い消滅する才の神遺跡の一部（道路敷部分）を工事に先立って発掘調査し、その記録保存をはかり、埋蔵文化財の保護と活用に資する。
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	高橋泰時、畠山憲司、橋本高史（秋田県教育庁文化課）
調査員	小松正市（町立岩谷小学校教頭）
調査補助員	佐藤和弘、渡部健太郎、高橋俊宏
事務補助員	伊藤澄子
調査協力機関	秋田県由利土木事務所道路課 大内町教育委員会 県立本荘高等学校、同大内分校
調査期間	昭和54年5月7日～8月25日

調査対象面積	3,000 m ²
調査面積	2,000 m ²
発掘調査協力者	伊藤功, 伊藤繁二, 伊藤史明, 伊藤雄治, 小笠原鈔, 小笠原正市, 沢田精一, 佐々木三太郎, 小笠原正志, 佐々木喜一, 小笠原亮治, 沢田シモ沢田サダ, 遠藤文子, 菅野ミサヲ, 藤田ヒサ, 田口リョウ子, 鈴木タエ鈴木キエ, 鈴木サト, 桃井美穂子, 高野ミツ子, 長谷部清吉, 高野久夫佐々木義一, 園部徹, 小笠原重夫, 佐々木正一, 萩藤齊治, 菅野正治郎小笠原良吉
遺物整理協力者	桑原隆, 高橋浩樹, 鈴木秋良, 大石俊雄, 牧野一枝, 小町順子, 小瀬悌子, 天野恵子, 鶴谷左絵子, 佐藤連子, 山崎節子, 神居トシ, 鈴木功, 斎沢孝子, 林ヒサ子, 観訪節子, 石川静, 田松志津子, 熊谷恭子, 高橋忠太郎, 斎藤知子, 及川昭, 佐々木郁子, 東松琢郎, 越智孝子, 花田幹雄

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 立地と環境

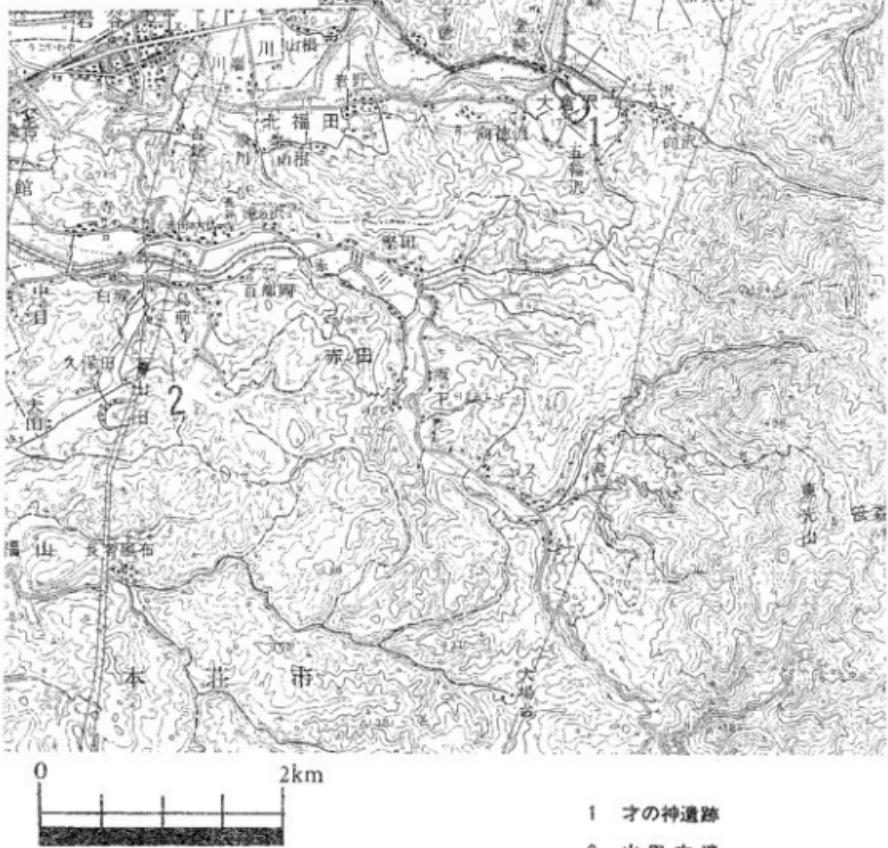
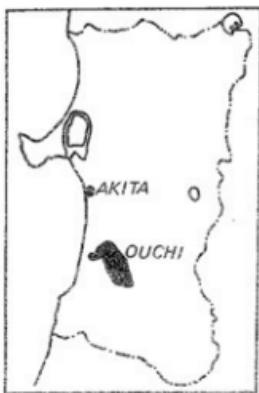
才の神遺跡は秋田県由利郡大内町徳沢字才の神にあり、標高20mの台地上にある。国鉄羽越本線羽後岩谷駅の東方約4kmのところに位置し、遺跡のある台地の西端には秋田県立本荘高等学校大内分校がある。遺跡の西側には国道105号線が走り、分校の前で西に曲り本荘市方面に向っている。この国道に平行して子吉川の一大支流である芋川が流れている。芋川は式内社波宇志別神社が所在する保呂羽山に源を発して西に流れ、大内町小羽広から流れを北にかえ中田代に至り、そこから再び西に流れ、さらに鍋倉から南に流れて本荘市川口で子吉川に注ぐのである。この川はいたる所で蛇行しており、遺跡のある才の神でも、かつては大倉沢、五輪沢を経て向徳沢の北を流れ大きく袋状に蛇行していた。それを1740年（元文5年）頃掘削りをおこなって現在のように遺跡の西側を流れるようになったのである。したがって遺跡のある才の神地区は1740年以前には金崎から東南東に舌状に、ゆるい傾斜をなしてのびていた台地であったのである。縄文時代の地形もこれと大差のないものであったと考えられる。

現在は分校の建っている部分を除き、昭和37年に開田された水田となっている。その用水は昔の地形を物語るように西から東へと流れている。かつて芋川の流れていた遺跡の北側は一段低い水田となっていて、台地の直ぐ北側は大倉沢が流れ芋川に注いでいる。

第2節 歴史的環境

才の神遺跡の発見は昭和52年のことである。秋田県教育委員会は秋田県が推進している出羽丘陵開発に伴う遺跡分布調査を昭和51年から52年まで2ヶ年にわたって実施した。その時大内町地域の調査を依頼された小松正市は、県立本荘高等学校大内分校敷地内の側溝工事の際発見された石棒に注目し、校地北側の畠地を試掘したところ、縄文時代中期のものと思われる土器片を発見したのである。これによって才の神地区は縄文時代中期の遺跡であることが確認されたのである。

遺跡の所在する台地の西端に現在大内分校が建っている。また敷地内に「沖田学校」なる石碑がある。この石碑が沖田学校の所在地を示しているか否かはっきりしないが、「大内町郷土史」（昭和43年1月）によると、沖田学校は明治12年9月29日沖田に開校されたとある。その後何回か名称をかえ、明治33年徳沢字小田野に徳沢尋常小学校として移転するまで沖田にあった。



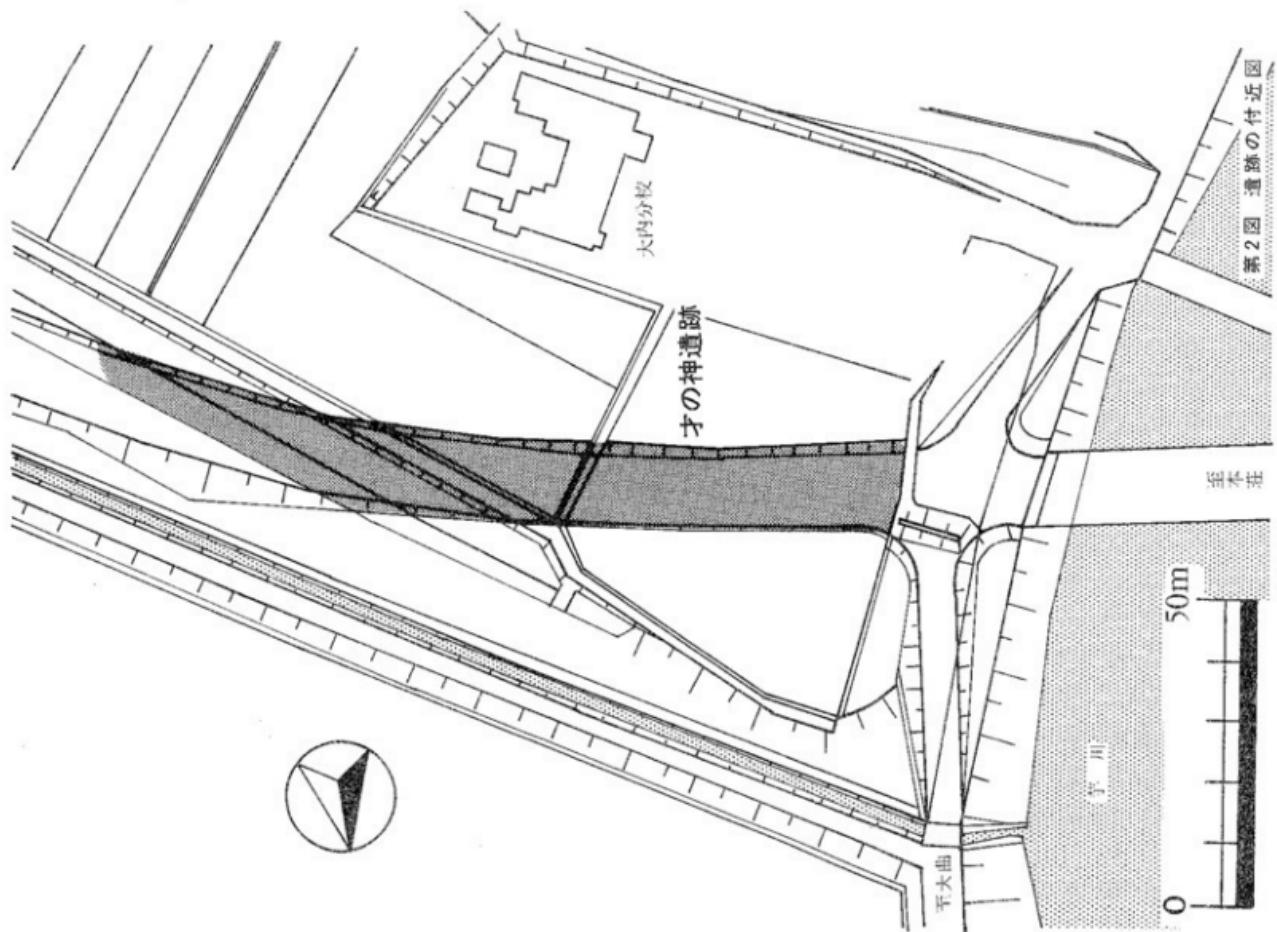
第1図 遺跡の位置図

遺跡の所在する才の神に岩谷町立岩谷小学校徳沢分校が移転したのは昭和28年4月18日である。多分この小学校建設工事の際、土器、石器が発見されたものと推測されるが、その記録や話は聞かない。徳沢分校は昭和35年4月18日で廃校となった。その後この校舎は「昭和35年4月1日、定時制再編成計画により岩谷、下川大内両分校を統合し、大内分校と改称する。校舎は大内町徳沢字才の神71の1の岩谷小学校徳沢分校をあてる。4月17日移転完了。」とあり、現在に至っているのである。この大内分校も昭和55年3月をもって廃校になるとのことである。沖田学校を除くと才の神遺跡に建物が建てられた確かなものはこの校舎のみである。

学校敷地以外の台地は昭和34年までは畠地であった。それより前、1740年（元文5）までの芋川は金崎部落から南東に蛇行し、大台沢、五輪沢、向徳沢部落の前を通って流れていた。したがって現在金崎と分校のある才の神とは芋川で区切られているか、かつては地続きで、金崎の台地は南東に舌状にのびていたのは前節で記述したとおりである。これを1740年～41年（元文5、6）台地を南北に切割りし、芋川の流れを現在のように直線にしたのである。この時の切割りの長さ「95間、上口17間」という。（大内町郷土史）。その後この台地は前述したように畠地として利用されてきたようである。

昭和34年7月、佐々木為重、鈴木喜太郎、遠藤正次等が発起人となり、この台地の開田計画が立てられ、実行された。開田工事は昭和37年5月31日完成し、2町3反の水田ができるのである。（開田記念碑）

発掘調査の結果、遺構、遺物の包含層は深く、それらの保存状態也非常によいことから、開田工事で遺跡は破壊されずに残ったもので、現在も水田下にしっかりと残っているものと思われるるのである。



第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

1. 遺跡の層序

遺跡はUの字形に大きくう回した芋川に囲まれた舌状台地上に位置する。今回の調査対象地域は水田または畠地である。発掘地域内における標準層位は以下の通りである。

第I層	暗褐色土 (10YR 5/6)	表土。 (30cm)
第II層	黒褐色土 (10YR 3/6)	たい肥層。 (10cm)
第III層	褐色土 (10YR 4/6)	非常に柔かい砂混じりの土。 若干の遺物を含む。 (15cm)
第IV層	黒褐色土 (10YR 3/6)	V, VI層に比しよくしまった土。若干の遺物含む。 (15cm)
第V層	暗褐色土 (10YR 5/6)	中期遺物を大量に含む層。(30cm, V'がはいる時は15cm)
第V'層	褐色土 (10YR 4/6)	V層の下半分がこれに変わる箇所もある。土壌のほとんどはこの層の上面まで下げないと検出できない。(15cm)
第VI層	暗褐色土 (10YR 5/6)	前期遺物を含む層。 (20cm)
第VII層	黄褐色土 (10YR 5/6)	地山。強い粘質土。



第3図 層位模式図

2. 遺構の分布

遺構は住居跡11棟、土塙3基が検出されたが、出土遺物からみて縄文時代中期中～後葉のものと思われる。遺構はいずれも第IV層上面にて検出された。しかし、土塙は第V層上面においては極めて不明確で、第V'層上面まで掘り下げる平面形が明確になる状態であった。そのため土塙においてはある程度上面が削られてしまった。

土塙はN地区にみられ、住居跡がM地区以東に主に分布する。今回の調査は遺跡北西部の一部に限る調査であったため、明確ではないが、台地の縁辺部に住居を設け、舌状台地の付け根に近く、標高が高い地点に土塙を配してあると推測される。

住居跡はIV層上面で検出されたが、IV～V'層間の土色が似かよっているため、床面は比較的明確なもの、掘り込み面は正確に把握できない箇所も多かった。

3. 遺物の出土状況

遺物は整理崩で50箱程出土しており、縄文時代の遺跡としては一般的な出土量である。遺物は縄文時代前期と中期のものに大きく分けられるが、前期の遺物は標準層位の第VI層から出土した。また、中期の遺物はIII～V'層中から出土するが、VとV'層から出土のものが大部分である。遺物は住居として使用されたくぼ地に投げ棄てられた状態で、かなりまとまって出土した。

K 7, J 11付近では頁岩の剝片が大量に出土しており、一部の剝片同士は結合できた。石器の製作所と考えられる。

石棒も数個出土しているが、第44図の石棒は地面に斜めに立った状態で出土した。また、土塹内からは擦ったとみられる石が立てられた状態で出土した。

第2節 調査の方法

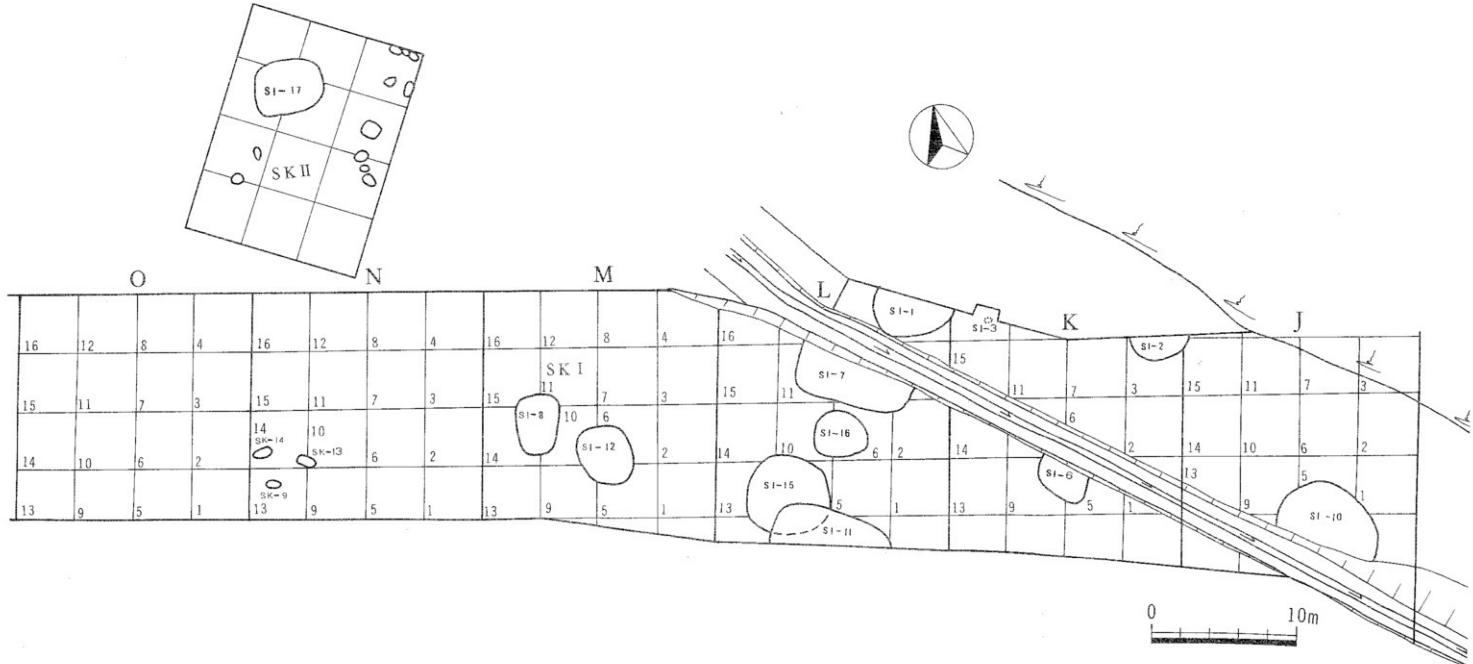
才の神遺跡は国道105号線バイパス工事に伴って発掘調査された遺跡であるが、道路通過予定地にあたる幅約16m×長さ約150m=約2,400m²を対象とした。

予定されている道路が16m幅で、ほぼ東西に直線的に通るので、遺跡ほぼ中央の南端に基準杭を打った。この地点より東西へ16mにあたるところごとに磁北に合わせた南北基線を引き、それぞれ区分した。中央の基準杭から西へ16mまでの地区をM地区とし、以下西へN, O, ……、東へL, K, ……地区とした。それぞれの地区は16m四方になるが、これに4m×4mのグリッドを組み、1～16までの番号を第4図のようにふった。各グリッドの名称は地区名と組み合わせて、M1, N2等と呼ぶことにした。東側で予定されている道路が南へ曲がるため、一部既述の16m幅の南へはみ出るグリッドも出てきたので、これらは各地区的南に隣接させて16m四方の大グリッドを組み、第4図のように4m×4mのグリッドの名称を付した。

発掘調査は以上述べたように4m×4mのグリッド法により随時拡張していく方針をとった。実測は16m毎に打った基準杭をもとに、間尺を用いて、原則として縮尺1/50で行った。土色は『新版標準土色帳』によった。



第4図 グリッド模式図



第5図 造構配図

第3節 調査の経過

才の神遺跡は国道105号線に係る発掘調査として5月7日～6月30日までの間調査を行ったが、調査の全般的経過は次の通りである。

5月7日から、器材の搬入を行い発掘調査の準備を整える一方、8～9日にバックホーにより第I・II層（表土から約30～40cm）を堆土した。

10日から本格的発掘調査を始めたが、16m毎に基準杭を打ち、表土排除後の状態を精査したところ、東側が表土が薄く、土器も多く出土したので、K地区から掘り下げることにした。その結果、14日に住居跡と思われる石匂炉がK16より検出された（のちにS Iとしたもの）ので、東西に拡張することにした。25日に竪穴住居跡を2棟検出し、S I01と02とした。いずれの住居跡も遺物が多く、投げ込まれた状態で分布している。

28日にはJ11グリッドにおいて石器製作所と思われる遺構を発見し、写真撮影、実測等を行った。またこの日に、M、N、O地区で一部まだ打っていなかった基準杭を打ち、西側の精査にはいった。

6月4日からは、土色の変化が少なく平面での遺構確認が困難なため、さらに掘り下げて断面観察で遺構確認に努めた。その結果、標準層位における第VI層は前期遺物の包含層であることがわかった。7日までにS I07までの遺構を検出したが、それらの住居跡内の掘り下げも並行して行った。

15日にV'層まで掘り下げたところ、両端に石を伴った130×80cmの楕円形の掘り込みが確認されたので、これをSK09とした。この周辺はIII層までしか掘り下げていなかったため、北側を掘り下げたところ、29日にSK13と14が検出された。またそれと前後して他地区を掘り下げ新たにS I10～12を検出した。29日までにはそれらを掘り下げ、実測・写真撮影などを行った。30日に残った実測などの補足調査を行い、才の神遺跡の調査をいったん終えた。

8月20日から、家庭移転に伴い、才の神遺跡の北東部約200mを対象として発掘調査を行った。この地区を才の神遺跡II地区と呼ぶこととする。調査は25日まで行われたが、住居跡1（S I17とする）、土塙5、数個のpitが検出された。遺物は前～中期のものが出土した。

第4章 調査の記録

第1節 遺構と遺物

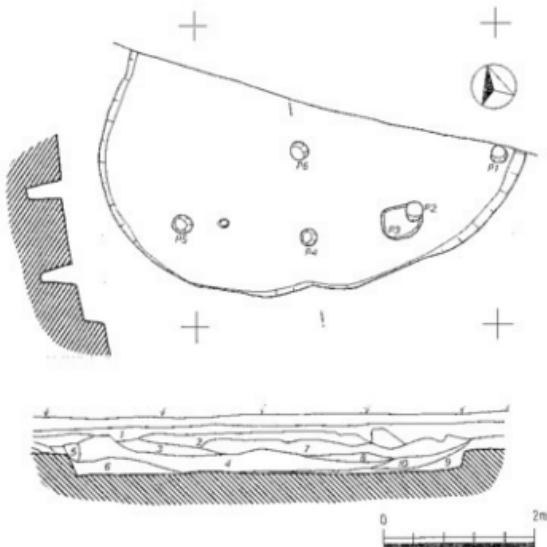
今度の発掘調査は前章で述べたように道路敷の中16m、延長150mという帶状のもので、市広の一本のトレンチといった区域の調査であった。道路は遺跡の西北端、台地の南部を通過するので、竪穴住居跡の存在が予定された。結果は予想通りで、竪穴住居跡11軒（前期1、中期10）、それに土塙などが発見された。完掘できた住居跡は4軒のみで、他は一部道路敷外であったり、水路であったりして完掘できなかつたものである。遺構は第Ⅳ層上面で確認できたが各層間の境界がはつきりせず、褐色の砂まじりの土で、壁の確認は困難であった。したがつて調査は平面で確認できず、断ち割ってその断面の観察によって確かめるといった作業で試みなければならぬ住居跡もあった。

1. 竪穴住居跡

SI-01号竪穴住居跡（第6図、図版3）

発見区 L4、
L8グリッドで確
認された住居跡で、
住居跡の南半分程
発掘。北は道路敷
外であったため発
掘不可能。台地全
体の北端部に位置
している。

平面形、規模
半分の発掘結果か
ら推測すると楕円
形をなすものと推
測できる。発掘し
た部分での長径(E
—W)は5.6mで



第6図 SI-01号竪穴住居跡

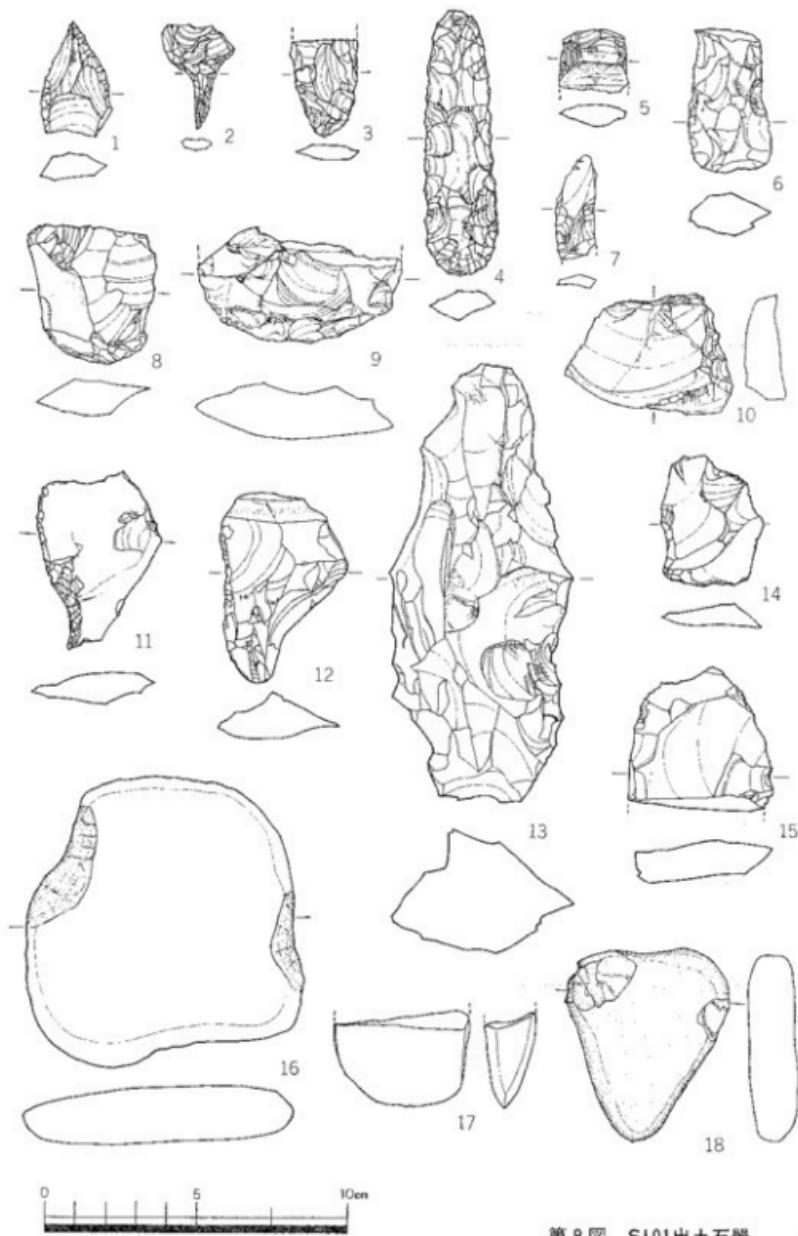
ある。発掘した部分が住居跡全体半分と推測するとこの住居跡の面積は 27 m²である。

柱穴 柱穴と考えられるビットは 5 個ある ($P_1 \cdot P_2 \cdot P_4 \cdot P_5 \cdot P_6$)。いずれも上部の直徑 25cm 前後、底部で 15cm 前後である。それぞれの床面からの深さは P_1 35cm, P_2 47cm, P_4 46cm, P_5 56cm, P_6 48cm である。柱痕跡などは不明。他に P_3 のように深さ 10cm のものもある。

壁、床 壁は西側が高く (床上 30cm)、東側が低い (床上 20cm)、というようにしゃかりした掘り方で、外側に 115° の傾斜をもつ。床は比較的硬く、壁に近づくにしたがって少し高くなっ



第 7 図 S101 出土土器



第8図 SI01出土石器

ている。床面中央部にはロームを敷いた形跡があり一見床が重複しているようにも見えた。他に焼土、焼けた部分など全く見られない。

埋土、遺物の出土状態 住居跡を埋めている土は10層からなる。住居跡の北側の断面観察によると次のようになる。

1. 灰褐色 7.5 YR 2/4 弱粘性（上の耕土と同じ）。
2. 褐色 7.5 YR 4/4 砂少し含む。
3. 褐色 7.5 YR 4/4 木炭含む。
4. 暗褐色 7.5 YR 5/4 木炭多。遺物含む。
5. 褐色 10 YR 4/4 木炭少量含む。
6. 褐色 10 YR 4/4 粘土質。
7. 褐色 10 YR 4/4 砂質少量含む。
8. 暗褐色 10 YR 5/4 木炭、砂少量含む。
9. 鈍褐色 7.5 YR 5/4 砂質
10. 褐色 7.5 YR 4/4 砂質。木炭少し含む。

遺物は3層以下から出土し、4層から多く出土した。遺物は破片が多く完全なものはなかつた。この住居跡外からは出土遺物が少ないとことから、住居が廃棄された後の畠地を利用して土器片その他をすてたものと推測される。

出土遺物（第7・8図 図版22）

埋土から出土した遺物は縄文土器片、石器などがある。しかし住居跡を使用していた当時のもの、すなわち、使用していた状態の遺物はない。土器形はキャリバー状をなす深鉢形のものが主体をなすものと推測される。地文に縄文を施し、口縁部及び胴部に隆帯に粘土紐を貼り付け、その両側を沈線で調整した隆沈文で構成され、口縁部は横位に走り中に渦巻文をもつもの。^{注：P.S.I.}無調整の隆起線文をもつもの（11, 12）などがある。底部に網代（A₁+B₁）のあるものもある。石器は石錐、石錐、石窓、磨製石斧などが出土した。

時期 前記したように住居跡で使われた状態、柱穴などから発見された遺物がなく、この住居跡の時期をすばり決定できるものはないが、埋土で床面に接して出土した土器が上記した遺物である。このことから大木8b式期と推測される。

S I-02号竪穴住居跡（第9図 図版4）

発見区 J 15, K 3 グリッドで確認された住居跡で、住居跡の南半分発掘。北は道路敷外であつたため発掘不可能、台地の崖に近い所に位置している。

平面形、規模 強めの発掘結果から推測すると円形に近い平面形をなすものと推測される。発掘した部分での長径（E-W）は4.2mである。

壁、床 壁は浅く、ロームの掘り込みは東西ともに10cmほどである。しかし東側の地層断面を見るとその上の層まで壁のあることがわかった。その高さは24cmほどあり、外側に125°の傾斜をもつ。床は硬く、中央部から西側にかけて床面が焼けていた。 P_1 は浅く、柱穴とは考えられず他に柱穴らしいものは確認できなかった。炉はもっと北側に存在しているものと思われる。

埋土、遺物の出土状態 住居跡を埋めている土は4層からなる。住居跡の北側壁の断面観察によると次のようになる。

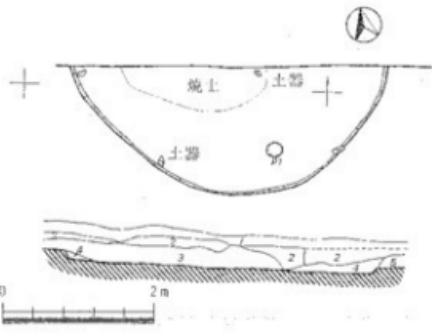
1. 明褐色 7.5 YR 4/2 耕作土。
2. 褐色 7.5 YR 4/4 砂質、遺物少し含む。
3. 暗褐色 7.5 YR 4/6 遺物包含層、木炭含む。
4. 褐色 7.5 YR 4/4
5. 明褐色 7.5 YR 4/6 砂質。

出土遺物 (第10~12図 図版23)

埋土から出土した遺物は縄文土器片、石器などである。この住居跡で使っていたものと判断できる遺物はない。土器は2層、3層から多く出土。第10図1のみが床面から出土したものである。土器は深鉢、キャリバー状をなして深鉢をなすものとがある。地文に縄文を施し、その上に粘土紐を貼り付けた隆起線の両側を沈線で調整した隆沈文のあるものが主体をなし、それで渦巻文などをつくっている。他に沈線で渦巻文を施した第10図9~11、13~15などがある。頬部が無文帯をなすもの(第10図17・20)など。第11図は埋土からまとめて出土したもので44~51までは同一個体である。37のように粘土紐を格子目に貼り付けたものなどがある。地文の縄文は単節のRL、LRである。

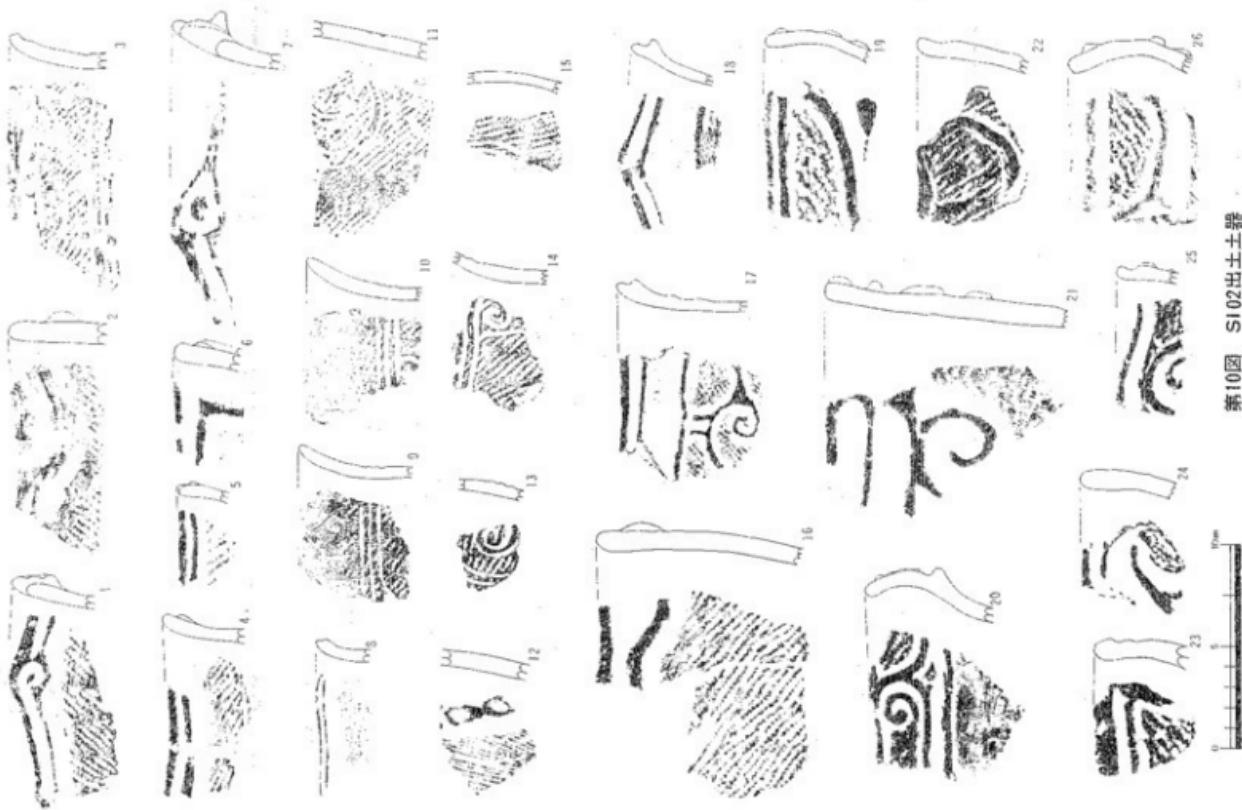
石器は石鏃、搔器、磨石その他がある。石鏃は抉り込みのあるものである。

時期 1号住居跡同様、大木8b式期と推測される。



第9図 SI-02整穴住居跡

第10圖 SI02出土土器





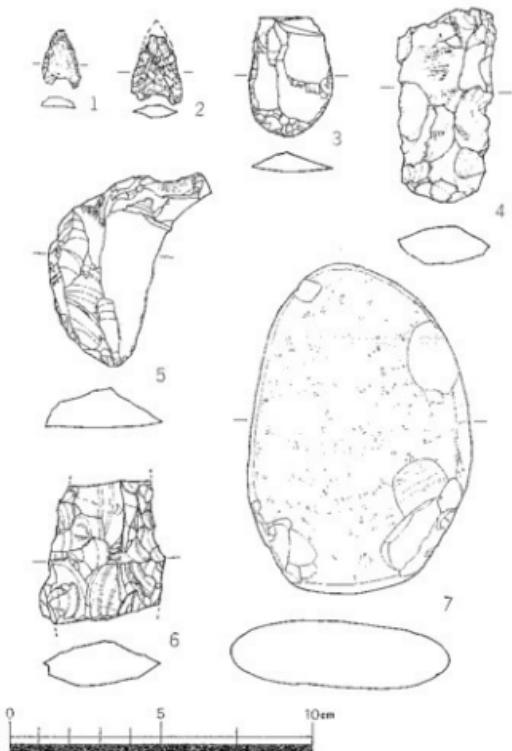
第11図 S102出土土器

S1-03号竪穴住居跡

(第13図 国版5)

発見区 K16グリッドに発見された自然石と土器片を利用した炉跡をもつ住居跡がある。S1-01号住居跡の東側で、当然この03住居跡と重複する位置にあるが、この住居跡は01号より高い所にあり、壁、その他は確認できなかった。

炉 平面形、大きさは炉からは推測不可能である。炉跡は東西に長く、径70cm、南北40cmである。西、南側は自然石で、北、東側は土器片を利用して囲いこんでいる。炉は最初に穴を掘り、その縁辺に自然石、土器片を配置するといった手順でつく



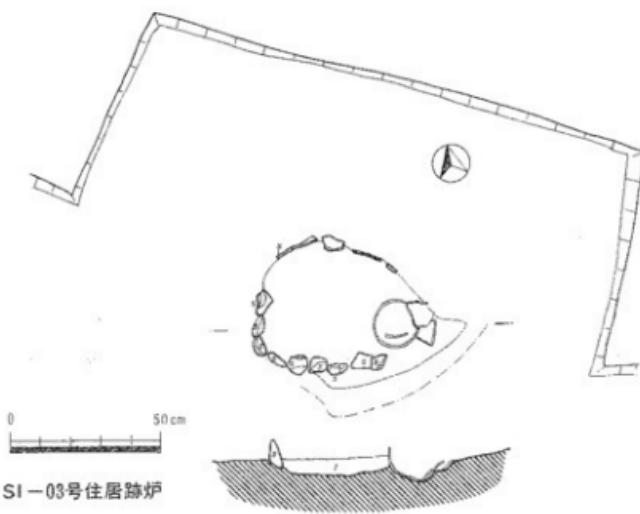
第12図 S102出土石器

られたものであろう。東側にある土器底部は炉を作成するためのものではないと判断される。焼土は5cmほどの厚さで、東南側では炉の外側も焼けている。

出土遺物 (第14図 国版24)

炉を構成する土器片と、炉の中に入っていた土器底部が、この住居跡の出土遺物である。住居跡の埋土からは多くない。炉を構成していた土器は深鉢の土器片で、口縁部に細い隆起線を貼り付け、その上に刺突文を施し、その下に所謂隆沈文を施した土器である。炉に入っていた底部の土器が7である。隆沈文を縦に施したもので渦巻文も施されている。

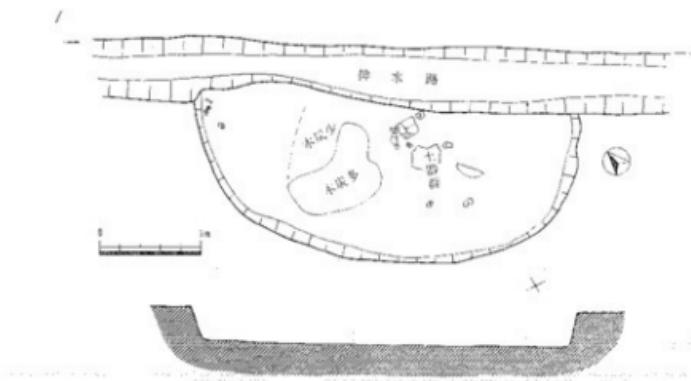
時期 炉を構成する土器であるから、この住居跡が使われていた時期そのものを示していると判断できる。大木8b式期であろう。



第13図 SI-03号住居跡炉



第14図 SI-03出土土器



第15図 SI-06号竖穴住居跡



第16図 SI06出土土器

S I - 06号豈穴住居跡 (第15図 図版6)

発見区 K 5, K 6, K 9, K 10グリッドに確認された住居跡である。北側半分は用水路のため発掘できなかった。

平面形 20程の発掘結果から推測すると梢円形に近い形をなすものと考えられる。発掘した部分での長径 (NW—SE) は3.8mである。

壁、床 壁、床面の状態はすこぶる悪く、床面は木炭が分布していることで確認した。又壁は排水路の断面で確認したものである。柱穴その他は確認できず。床面西側に木炭が多く認められる部分がある。焼土は全くない。壁は高く30cmほどあり、外側に115°ほどの傾斜をもつ。かはもっと北側にあったのか、発掘した範囲内では不明。

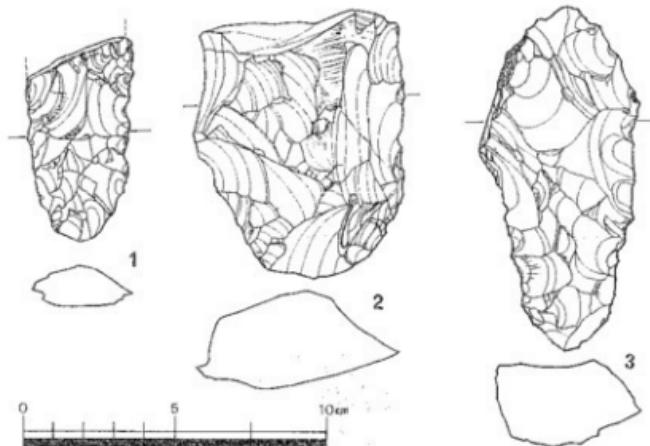
埋土、遺物の出土状態 埋土は黄褐色の砂まじりの層でほとんど細別できず、中に遺物が少しずつまとまりをもって出土する程度である。床面からは自然石などと共に2か所ほどにまとまって出土。

出土遺物 (第16・17図 図版24)

出土遺物は繩文土器片、石器片である。土器はキャリバー形をなす深鉢の土器で、隆沈文では縁部、胴部に渦巻文、三角状の文様が施される。地文の繩文はL Rが多い。13のように隆起線文を格子目で貼り付けたもの、15の梯状工具による文様などもある。石器は少なく、1は鎧状石器の

破片、他
は使用痕
の有るもの
である。

時期
埋土ある
いは床面
から出土
した遺物
は上記し
たとおり
である。
大木Bb式
期。



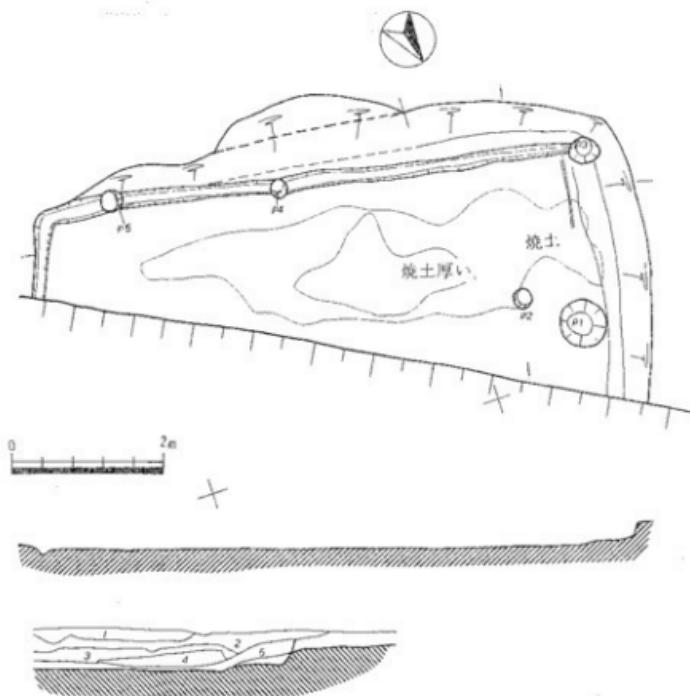
第17図 SI-06出土石器

S I - 07号豎穴住居跡 (第18図 図版7)

発見区 L3, L6, L7, L11, L12グリッドで確認された住居跡で、住居跡の南半分だけ発掘した。北半分は水路の下で発掘できず、S I - 01号住居跡の南側に位置する。

平面形、規模 略程の発掘であるが、平面形は隅丸の長方形であろうと思われる。長径 (E-W) は 8.2 m あり、面積を推定すると約60m²ほどになろう。この住居跡は S I - 10号、S I - 11号などと今回発掘された住居跡の中では大きい方に属す。

壁、床、周溝 壁は東側ではっきりしており、南側でははっきりせず、発掘では少し掘り込んでしまった。最もはっきりわかる西側で外側に115°傾斜している。床面はしっかりしていて固く、ほぼ平で西側壁に近い所で一段高くなる。床面全体に木炭が散布し、南側一面は焼けている。木炭は断面(地層)図5層のように入りこんでいる。周溝は南壁、東壁に沿ってあり、掘り方はU字状である。巾18cm前後、深さ6 cmほどである。西側には全く認められない。



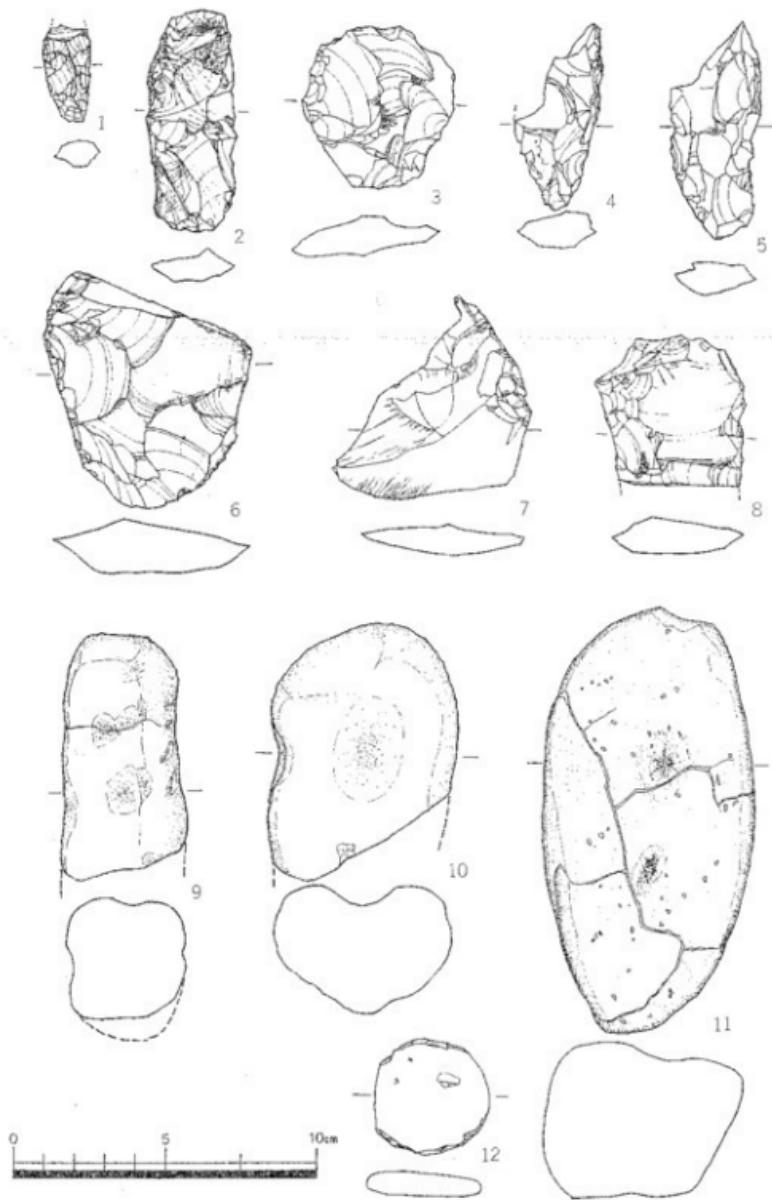
第18図 SI-07号豎穴住居跡

柱穴 柱穴と思われるビットは4本(P_2-P_5)である。深さは P_240 , P_340 , P_444 , P_542 cmである。 P_1 は浅く、深さ10cmほどで別の用途のものである。 P_3-P_5 は周溝の中にあり、南北の周溝に柱穴のあることが予想され、東西には P_2 の位置に対称にあることが予想されるところである。

埋土、遺物の出土状態 住居跡が確認できた面から床面まで5層に細分できる。それは次のとおりである。



第19図 SI07出土土器



第20図 S107出土石器

1. 暗褐色 7.5 YR 4/2 バサバサ、砂少量含む。
2. 褐色 7.5 YR 4/2 砂質、木炭なし、バサバサ。
3. 褐色 7.5 YR 4/2 砂少量含む、木炭まばら。
4. 褐色 7.5 YR 4/2 木炭含（少量）、砂質、弱粘性。
5. 黒褐色 7.5 YR 4/2 木炭含（多量）、遺物含む。

遺物は3層以下から多く出土し、特に木炭を多量に含む5層から多く発見された。第45図1の浅鉢形の土器はこの住居跡の埋土から出土したものである。

出土遺物 (第19・20・45図 図版25)

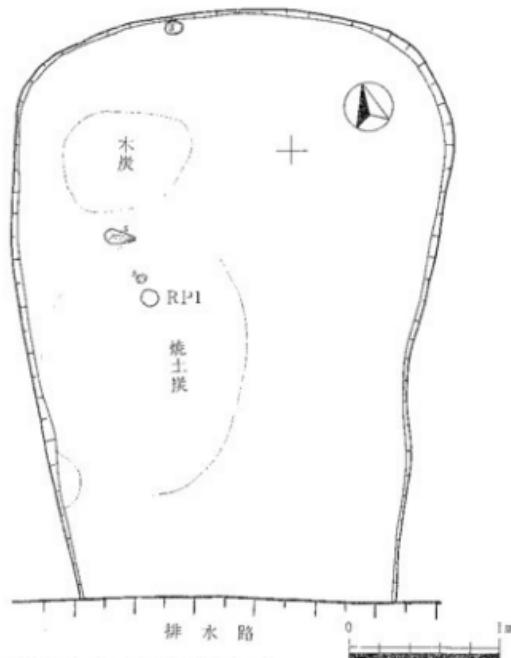
出土遺物は上記浅鉢の他キャリバー状をなす深鉢が多く、他に石器（凹石他）などが発見された。土器は隆沈文を主体としたもので構成され、口縁部に渦巻文をもつもの（1-3, 6）など。これは地文に縄文を施したもので、胴部は12, 15のようなものであろう。他に5, 9のように頭部が無文型になるものもある。石器は第20図1, 4のポイント状のもの、2個の凹みをもつ凹石、石製の円盤状土製品などがある。

時期 住居跡が使用されていた時期の遺物はない。埋土の中から出土したのみである。それから推測すると大木B6式期であろう。

S1-08号竪穴住居跡 (第21図 図版9)

発見区 M10, M11, M14, M15グリッドで確認された住居跡で南側は排水路で壁は不明。今回発見された中期の住居跡の中で最も西側のものである。西側に進むにつれてこの台地は高くなるので、最も高い所に営まれた住居跡である。

平面形、規模 南側壁



第21図 SI-08号竪穴住居跡



第22図 S108出土土器

が不明なので全体の形は不明であるが図のように隅丸の長方形に近い形をなす。南壁が床面の焼土・灰の分布している部分までだとすると、長径（N-S）約3.2m、短径（E-W）2.7mである。それで面積を計算すると9m²弱で小さいものである。

壁、床 壁は浅く北側で8cm、北側の東西で10cmほどである。北側の壁は比較的見極めることができたが、それ以外では大変に困難であった。床面は中央部でしっかりしているが、他はやわらかく、壁同様不明な所が多い。床面西側に木炭及び灰と思われるものが分布している。

柱穴 柱穴その他のピットは全て不明。小型の住居跡なので無いことも考えられる。

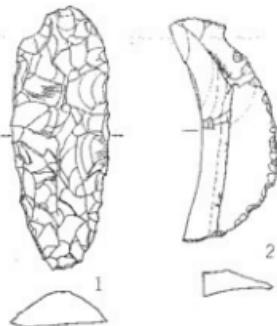
埋土、遺物の出土状態 住居の掘り込みが浅く、又土の関係で境界がはっきりしない程地山の土と似ている。中から遺物がポツリ、ポツリ出土したのみで特別な出土状態を示した遺物はない。

出土遺物（第22・23図）

出土遺物は少ない。縄文土器片及び石器2点あるのみ。1は陰沈文を施した頸部の破片で頸部は無文。他は縄文（LR）を主体としたもので、口縁部に沈線が一本走る（2）。2～4は同一個体である。石器はポイント、それに使用痕のある剝片である。

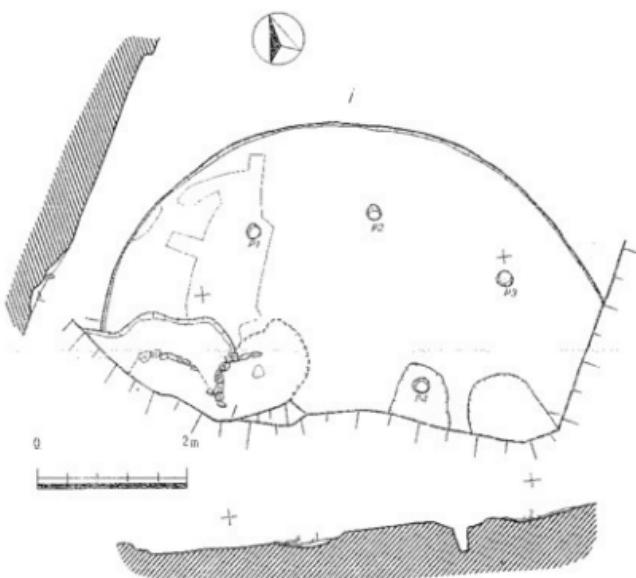
S1-10号竪穴住居跡（第24図 図版8）

発見区 J1, J5, J9, J24, J28, J32グリッドから発見された住居跡で、南側は用水路のため発掘不可能であった。今度調査した中で最も東側から発見されたものである。

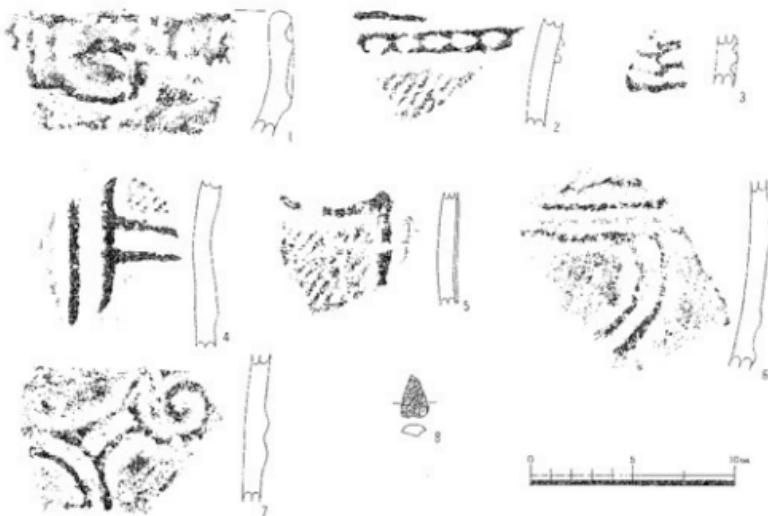


第23図 S108出土石器

平面形、
規模 程度の発掘であるが、その姿から推測すると円形か、橢円形になるであろう。規模は比較的大きい方で、径(E-W)7m前後をなすものと推測される。



第24図 SI-10号竖穴住居跡



第25図 SI-10号出土遺物

壁、床 壁は薄く8cmほどである。床面はがの近くは硬く、他はやわらかい。西側では木炭が散布しており、その形状が気にかかる。床面の使用状態の何かを想起させるようだ。又西側の炉の部分、それと対象する東側の部分に落込みがありいずれも木炭が堆積していた。西側のそれは炉に結びつく凹みと理解されるが、東側のそれは焼土がなく炉である可能性はうすい。

炉 二基発見されたが東側のものが新しく、西側のものは古い。いずれも石圓炉である。この住居跡の炉は前者のものである。炉の位置は住居内の西側壁よりに配置されている。炉のつくり方はS I-03と同様で、最初に穴を掘り、次に自然石を並べるというものである。中に焼土、木炭がつまっていた。

柱穴 柱穴は4個確認された。P₁~P₃は壁より1m前後内側にあり、略々等間隔である。P₄も柱穴と考えられ、中央部にあるものであろう。柱穴のそれぞれの深さは、P₁33cm、P₂39、P₃46、P₄45cmである。

出土遺物（第25図）

キャリバー状をなす深鉢の土器で、地文に繩文（LR）を施し、その上に陰沈文で文様を構成する土器である。石鏡1点出土。

時期 大木8b式期。

S I-11号竪穴住居跡（第26図 図版9）

発見区 L5、L9、L28、L32、L36グリッドで確認された住居跡である。S I-15が直ぐ北西側にあり、重複している。S I-11号が新しい。

平面形、規模 南側が排水路と、道路敷外で完掘できず。発掘結果から推測すると隅丸の長方形をなすものと思われる。東西に長い住居跡と考えられ、長径は7.8mほどである。今度の調査で発見された住居跡では大きい方に属する。

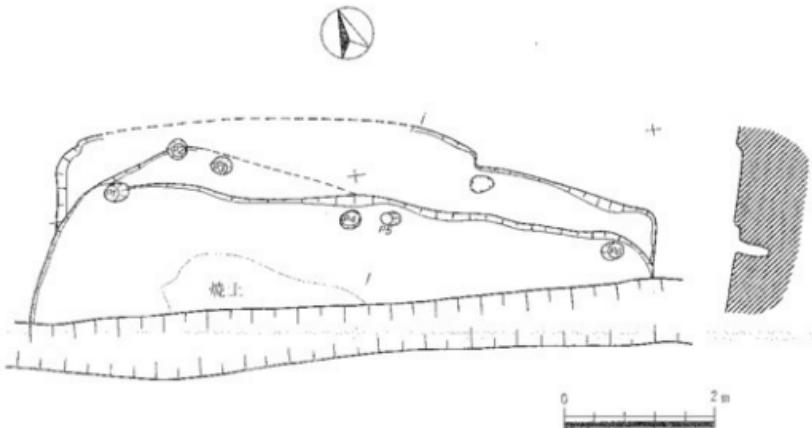
壁、床 壁は重複している関係か、低く10cm前後である。北側に二重にあり、外側のそれも東側で階段上にふくらむ。これらの観察から、ここでは3~4つの住居跡の重複が考えられるが明確ではない。床面はしっかりとおり、中央部に焼土がある。

柱穴 柱穴と考えられるものは4個ある。P₁は41cm、P₂20cm、P₃27cm、P₄50cm、P₅44cm、P₆39cmで、P₁、P₄、P₅、P₆は内側の壁に沿っており、深さも一定しており、柱穴と考えてよいであろう。

遺物の出土状態 遺物は竪穴住居跡の埋土からS I-07と同じような状態で数多く出土した。しかし完全なものはない。

出土遺物（第27・28図 図版26）

埋土から出土した遺物は繩文土器片、石器などである。この住居跡で使っていたと思われる土器はない。土器のほとんどはキャリバー状の深鉢、あるいは深鉢の器形をなし、地文に繩文



第26図 SI-11号竪穴住居跡

を施し、その上に隆沈文で渦巻文などを施したものである。第27図1、5、6は頭部に無文帯をもつ。23、24のように沈線文のもの、27のように地文が櫛目状工具で条線の施してあるものなどがある。底部にスグレ状圧痕のあるものもある(28)。石器は石鏃、ポイント状のもの(第28図2、3、9)、石窓、凹石、擦石などがある。

SI-12号竪穴住居跡 (第29図 図版10)

発見区 M5, M6, M9, M10グリッドで確認された住居跡である。平面では全くわからず排水路の断面で確認できたものである。

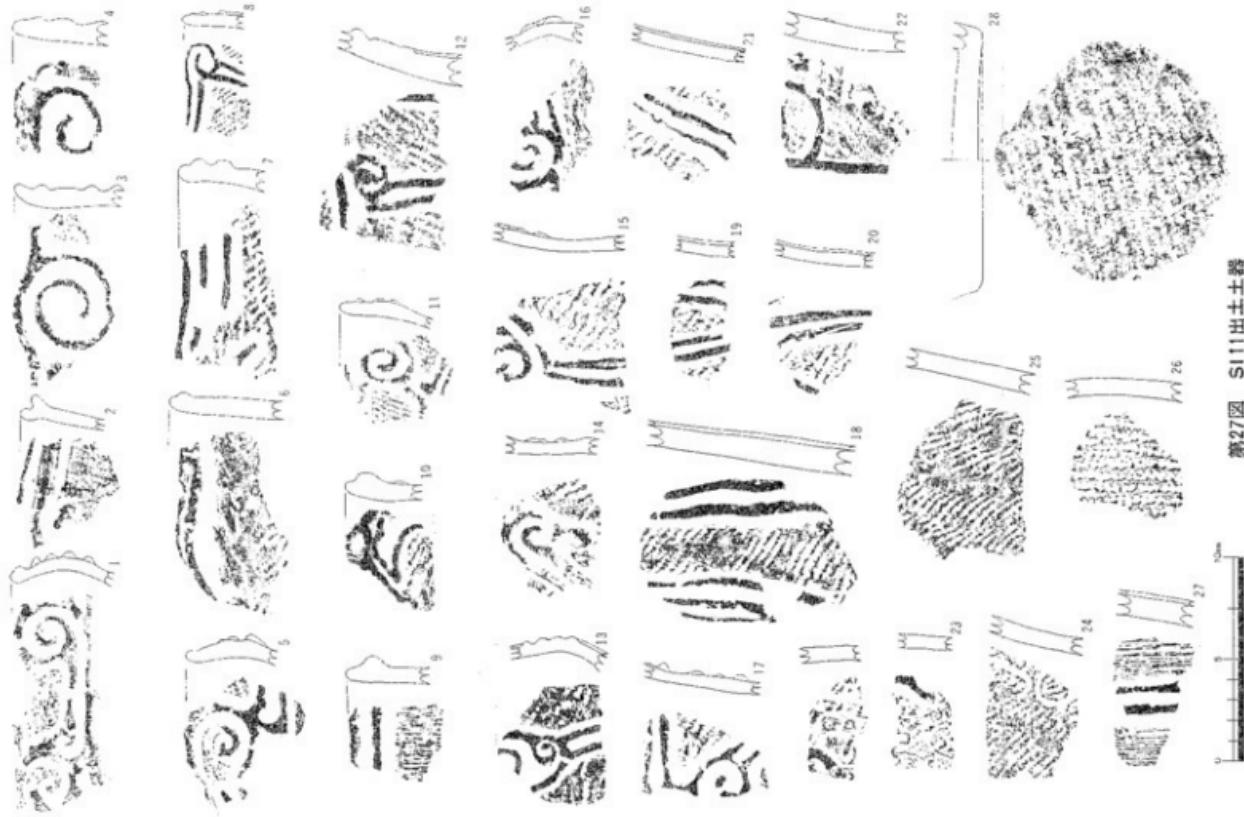
平面形、規模 異角形の住居跡で、長径(E-W) 3.9 m、短径(N-S) 3.3 mで、面積は12m²ほどで小さいものである。

壁、床 壁は断面でやっと確認できる程度であり、それによると西側で30cm、東側で10cm程度ある。床面は西側に傾斜していて、全体がやわらかい。北東側に自然石があり、その周間に焼土があった。

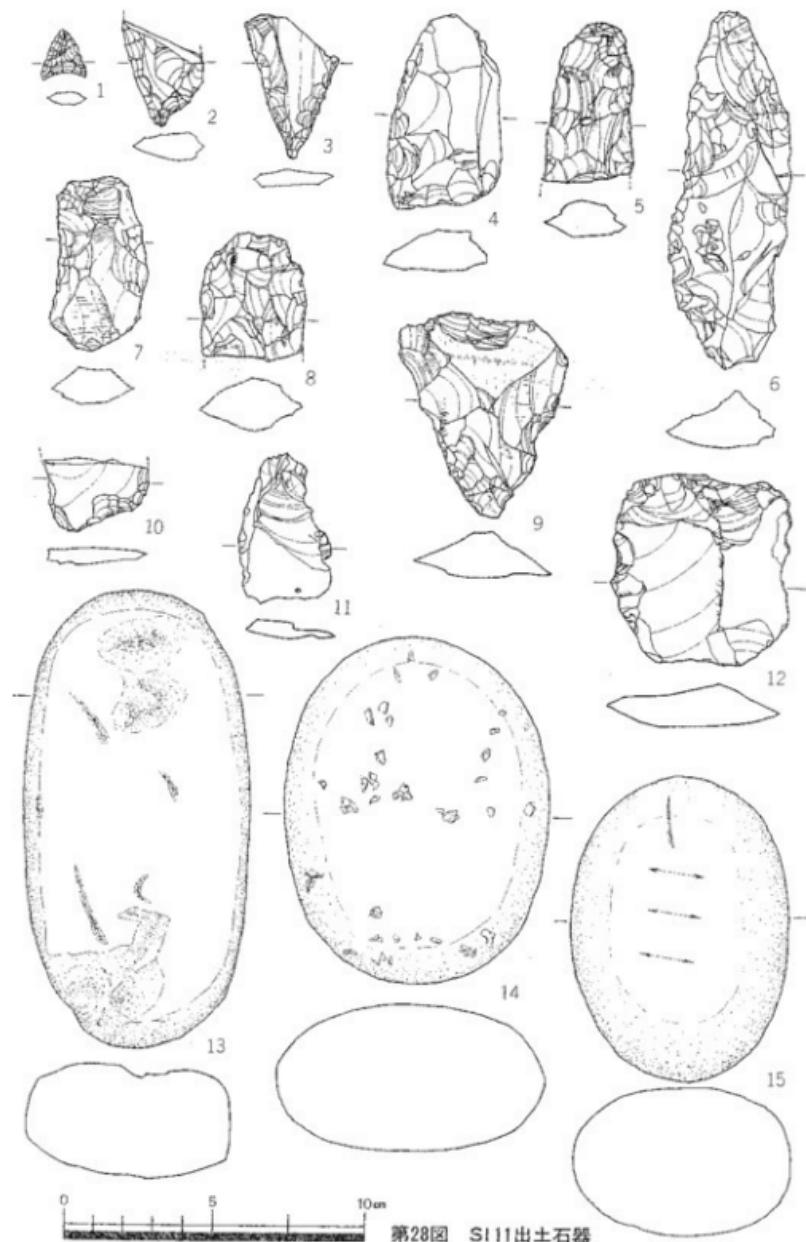
炉 これは住居の中央部にあり、排水路で一部消滅したが、その時の観察と残ったものから判断すると焼土だけの地床炉である。

埋土、遺物の出土状態 埋土は排水路の断面で観察した結果、次のようになる。

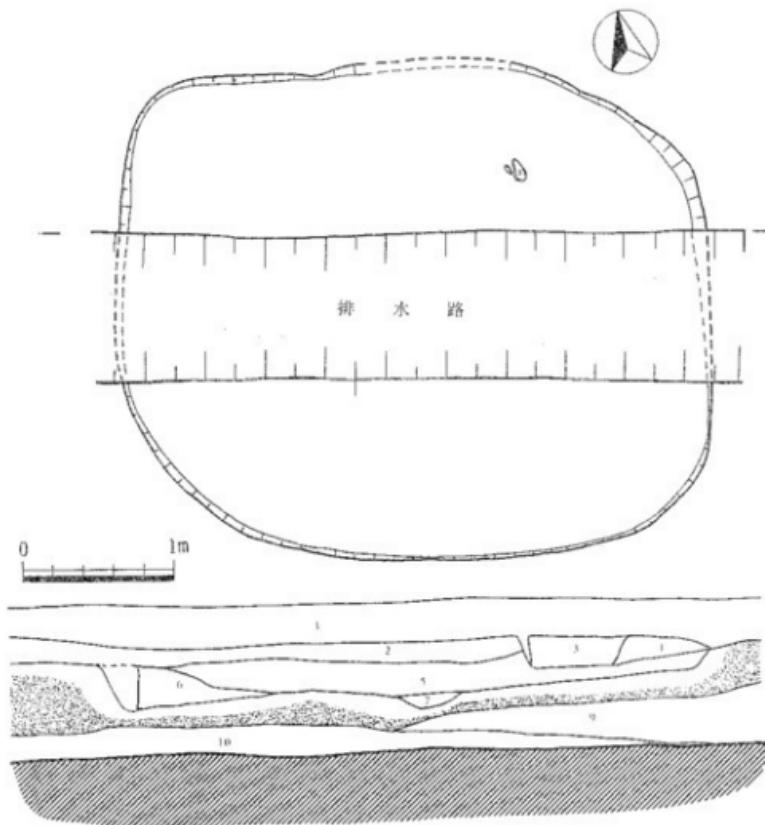
1. 褐色 7.5 YR % やや粘性有り。



第27圖 SII出土土器



第28図 SI 11出土石器



第29図 SI-12号竪穴住居跡

- 2. 棕色 7.5 YR 4/4 木炭・礫少量含む。
- 3. 棕色 7.5 YR 4/4 黏性有り。木炭含む。
- 4. 暗褐色 10 YR 5/6 強粘性。木炭含む。
- 5. 棕色 10 YR 5/6 黏性有り。砂質。
- 6. 明褐色 7.5 YR 4/4 砂質。
- 7. 暗赤褐色 5 YR 4/6 焼土。木炭多量。
- 8. 黄褐色 10 YR 4/6 砂少量含む。
- 9. 暗褐色 10 YR 5/6 強粘性。木炭含む。

10. 黒褐色 7.5 Y R 2/3 強粘性、木炭
・造物・小砾
含む。

このうちの8層を掘り込んで住居跡とした
もので壁、床は8層を示す。

造物はほとんどなく、がの近くから一かた
まり出土したにすぎない。

出土遺物（第30・31図）

土器片数点。石器数点出土したにすぎない。

床面に近い所から出土した土器

を図示したものである。1は口

縁部の破片で無文に沈線が一本

口縁に平行に施し、貼りコブが

ある。2は地文に繩文を施し、

その後で沈線で文様を施してい

る。4は櫛状工具による条線文

の土器である。石器は図示した

4点で、いずれも剥片を利用し

たもので少し使用痕がある。

S1-15号竪穴住居跡（第

32図 図版10）

発見区 L9, L13, L28,

L32グリッドに確認された住居

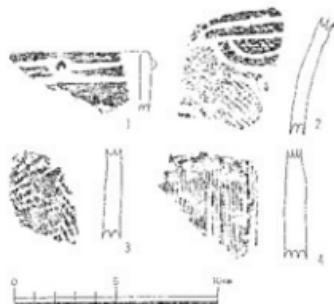
跡である。S1-11と重複して

おり、本住居跡の方が古い。

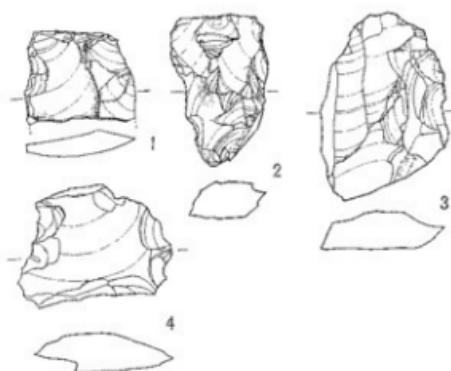
平面形、規模 平面形は変形で、もしかすると5~6角形のものであった可能性がある。北西、南西のコーナーはしっかり角度をつけており、他は丸味をもっている。長径(E-W) 6.3mあり、比較的大きい部類に属す。

壁、床 住居跡が重なっている所もあり、壁は北側でもっともよく残っていて12cm程である。外側に傾斜しておりその角度は120°ほどである。床面は平で硬い。しかし広く焼けており、図示したようにその焼け方に変化がある。北側にゆるい傾斜がある。

埋土 遺物の出土状態 本住居跡が確認できた面からの埋土の観察の結果は次のとおりであ



第30図 S112出土土器



第31図 S112出土石器

る。

1. 焼土

特に著しく、下

は黒く、硬い。

2. 焼土

やや赤いだけ。

3. 褐色

7.5 YR 5%, 砂

質、粘性はあまりない。

遺物は3層の中にはいって出土。

出土遺物

(第33・34図

図版27)

縄文土器と石器

が出土している。

全て深鉢で、キャ

リバー状をなすも

のもある。地文に

縄文を施し、隆沈

文で構成されるも

のが主体をなす。口縁部、胴部に溝巻文の施されるものが多い。3, 8, 20のように櫛状工具による条線文を施し、その上に隆沈文を施したものもある。石器はポイント状のもの、他に剥片に使用痕のあるもの、擦石などである。

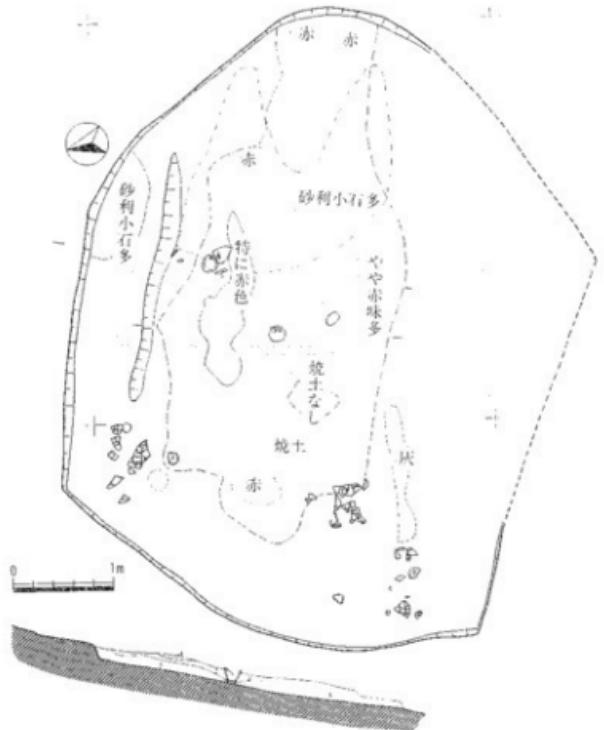
時期 大木8b式期。

その他 住居跡の平面形が変形であるが、これだけの広さをもつていて柱穴らしいものが全く確認できなかった。

S I-16号竪穴住居跡 (第35図 図版11)

発見区 L 6, L10グリッドに発見された住居跡である。北に S I-07, 南に S I-05号住居跡にはさまれたところにある。

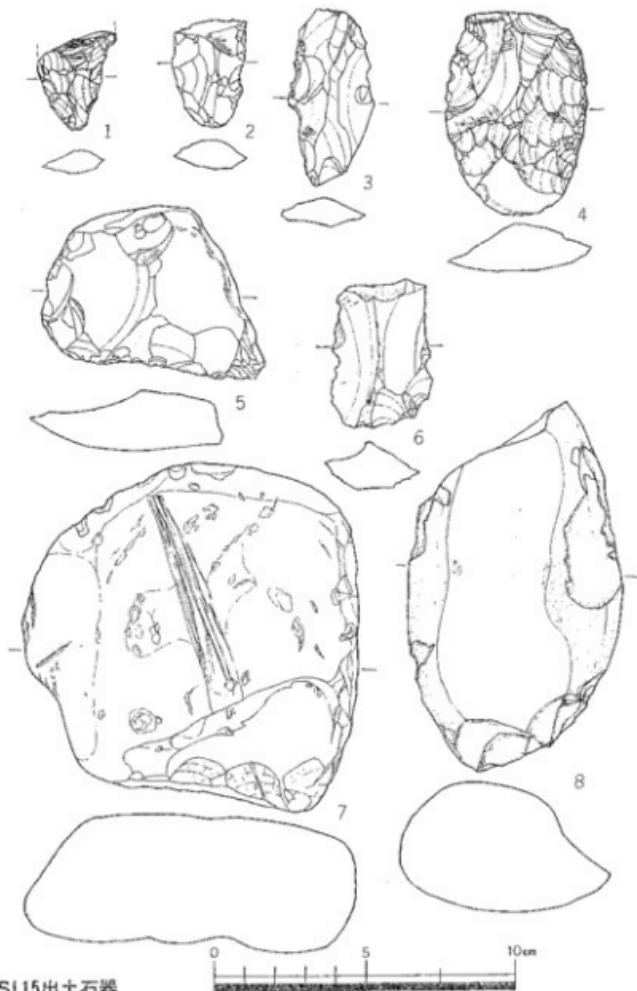
平面形、規模 隅丸の三角形をなし、北側に壁が延びる変形をなす。一辺3.5 m前後をなし、



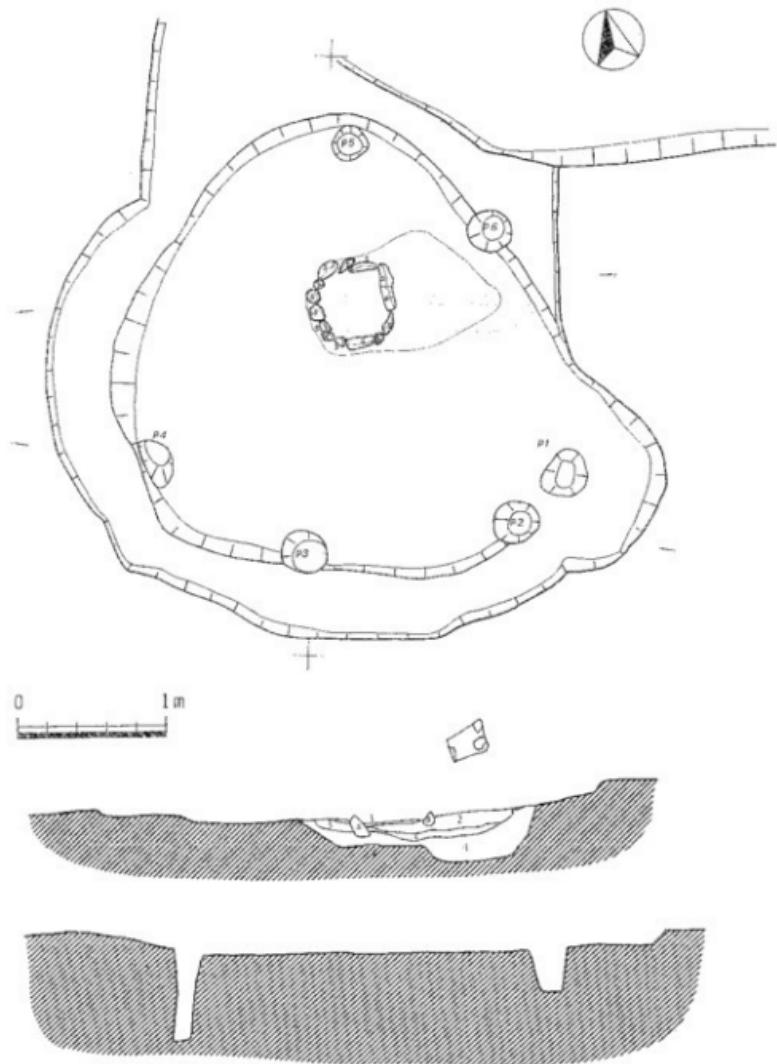
第32図 SI-15号竪穴住居跡

第33圖 S115出土土器

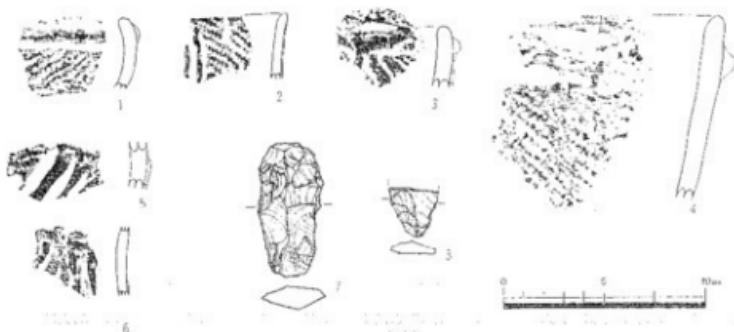




第34図 SI 115出土石器



第35図 SI-16号竪穴住居跡



第36図 SI16出土遺物

小形の住居跡である。

壁、床 壁は確認面からは低く5cm前後である。床面は硬く、しっかりしている。壁より一段高くなっているのは特徴的である。

炉 中央北よりに配置され石開炉である。炉の構築は最初に炉穴を掘り、それに小砂礫を含む土を入れ、さらにその上に粒子の細かい土を入れた後に自然石を並べて石開炉をつくったと考えられる。その様子は炉の断面図で理解できる。

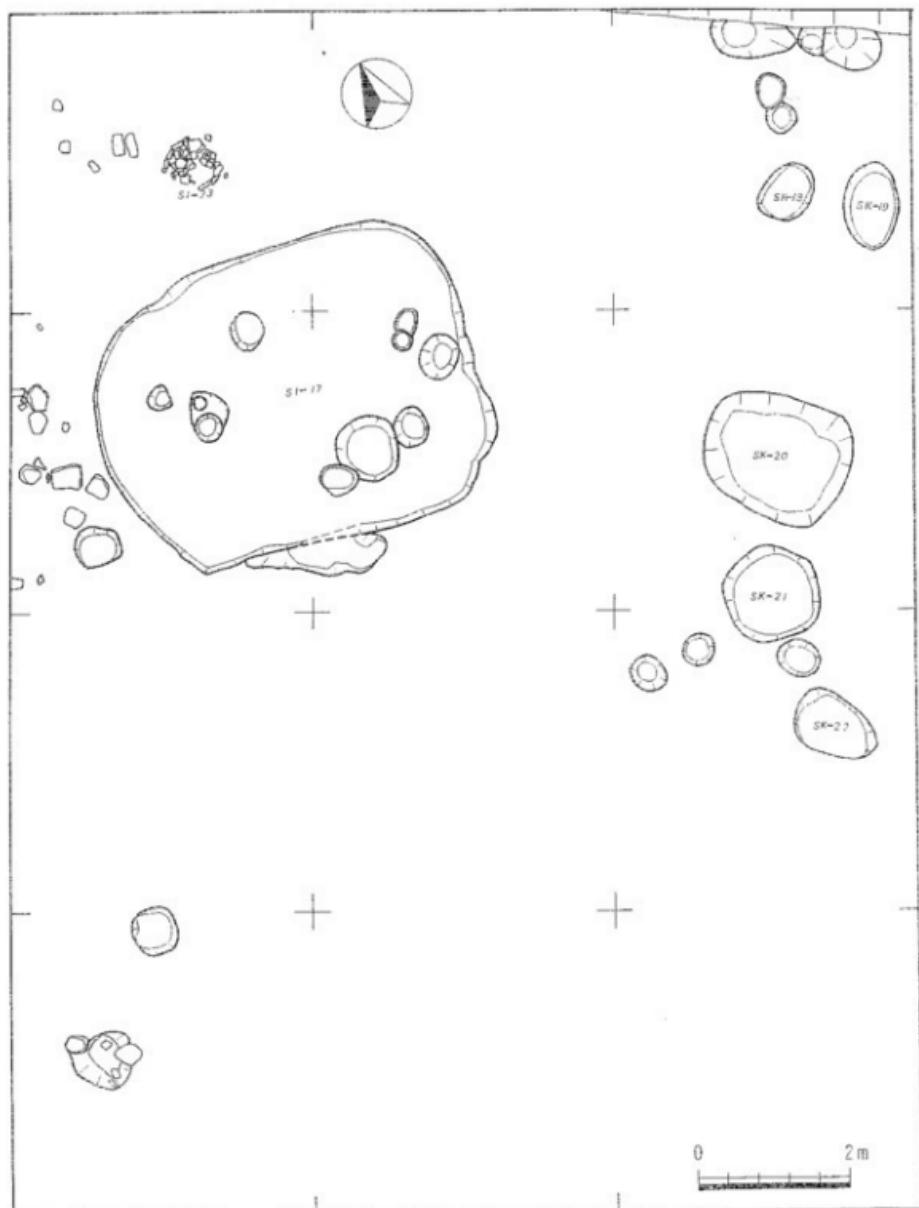
炉の中の埋土の状況は次のとおりである。

- | | | |
|----------|-------------|---------------------------|
| 1. 褐色 | 10 Y R % | 木炭、砂少量含む。 |
| 2. 暗赤褐色 | 5 Y R % | |
| 3. 褐色 | 7.5 Y R % | 砂少量含む。1~2cmの小石少量。やや焼けている。 |
| 4. やや暗褐色 | 7.5 Y R %~% | 礫、小石少量含む。粘性大。ほとんど焼けていない。 |

柱穴 柱穴と思われるものは1個確認された。中でもP₂₅, P₃₀, P₆₀, P₆₂₆cmは20cm以上の深さをもつが、P₁とP₅は浅いものである。しかしP₁を除くと床が一段高くなる内側に接したところにあり、柱穴と見てよいものであろう。

出土遺物（第36図）

出土遺物は数が少ない。地文に縹文を施し、隆起線文及び隣沈文を施した土器片が出土している。石器も使用痕のある剣片2点出土している。



第37図 II 区 全体図

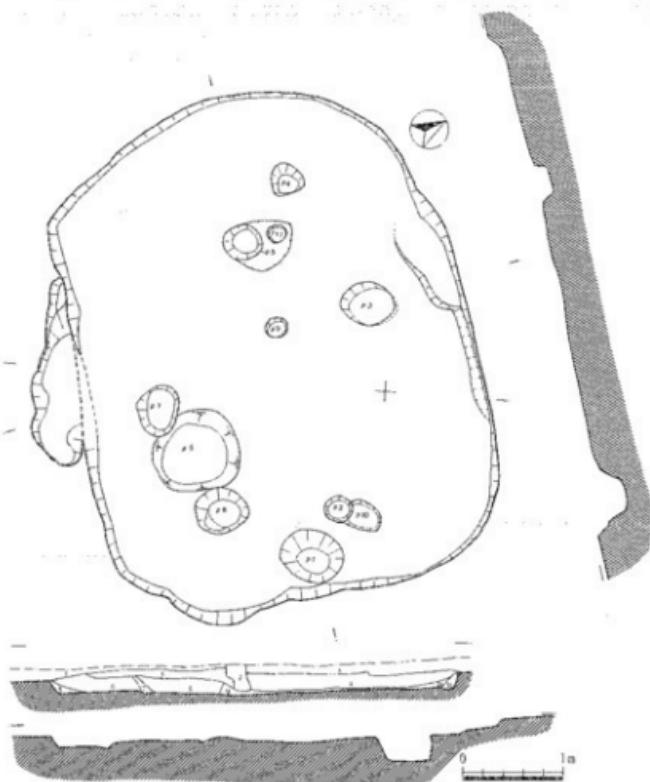
II区について

道路敷の西北にこのバイパス工事に係る民家の移転先があった。そこをII区として発掘調査した。II区は第5図全体圖で見るようN, O区の北側に位置し、台地全体の西北端に位置する。この地は一部表土がブルドーザーで除去されており、表土からの観察はできない所が多い。ここから竪穴住居跡2軒、竪穴遺構（記号はSKを付けた）5基が見られた。

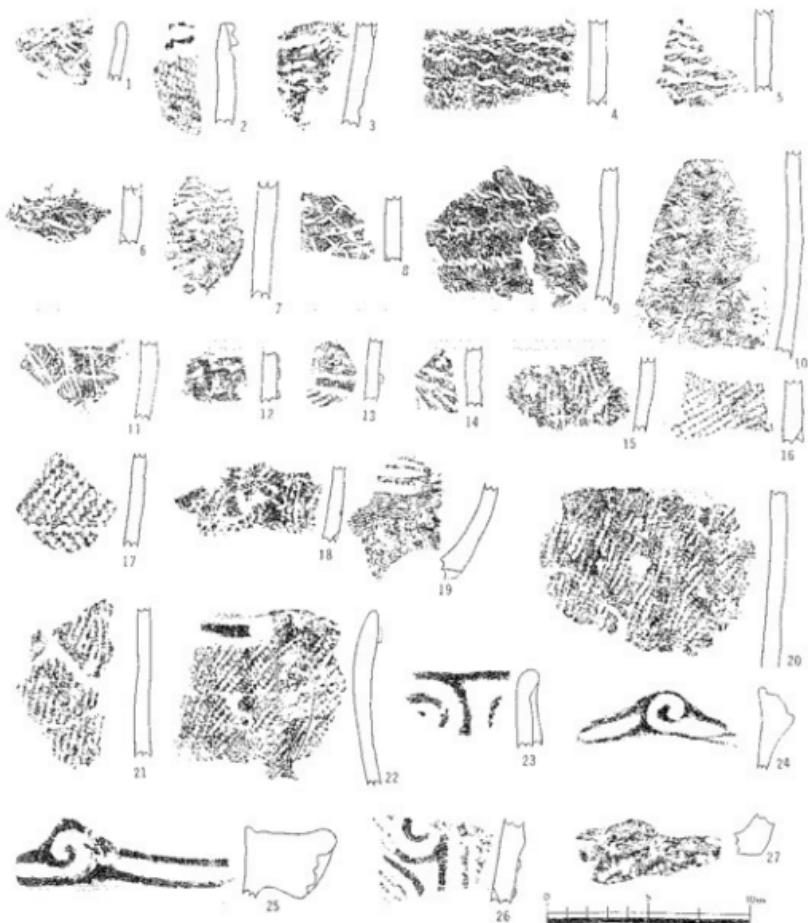
SI-17号竪穴住居跡（第38図）

発見区 II 7, 8, 11, 12グリッドに発見された住居跡である。台地の最北西端に発見された住居跡である。

平面形、規模 隅丸の方形に近い形をなすが、西側の辺が少し張り出す。長径（E-W）



第38図 SI-17号竪穴住居跡



第39図 SI-17出土土器

5.1 m、短径（N-S）4 mで、面積約20m²である。

壁、床、周溝 しっかりした地山を掘り込んで壁も硬くよく残っている。壁の高さは南北略々同じで15cm、西壁が少し傾斜をもって立ちあがる。床面は硬く、略々水平で北側壁より一段高くなっている。南壁中央部は搅乱で不明。周溝らしいものは北壁の中央部から東側に1.1 mにわたって認められる。幅15cm、深さ6cmほどである。

埋土、遺物の出

土状態 遺構の確

認できた面から住

居跡の埋土を南北

に断ち割って観察

した。その結果は

次のとおりである。

1. 黒褐色

10 YR 5%

2. 褐色

7.5 YR 5% 軟

かい。

3. 黒褐色

7.5 YR 5% 硬

い。

4. 黒褐色 7.5 YR 5% 軟かい、木炭混入。

5. 暗褐色 7.5 YR 5% ロームブロック混入。

6. 黒褐色 10 YR 5%

7. にぶい黄褐色 10 YR 5%

8. 黒褐色 10 YR 5% 木炭混入、遺物有り（軟かい）。

9. 暗褐色 7.5 YR 5%

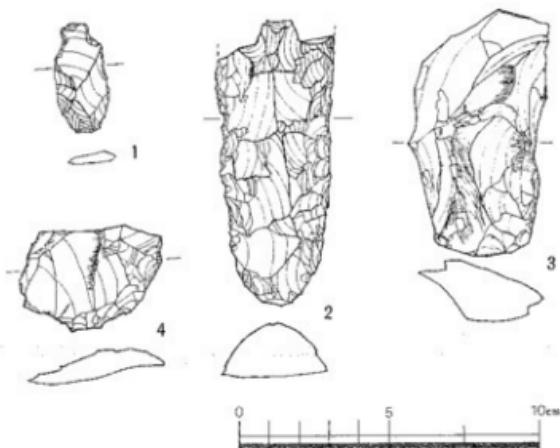
10. にぶい黄褐色 7.5 YR 5%

11. 黒褐色 10 YR 5%

2層、3層までは中期の遺物が出土し、それ以下にはない。6層以下からは縄文時代前期の遺物が出土する。

出土遺物（第39図・40図）

住居跡の埋土から出土した遺物は縄文中期と前期の土器、それに石器である。第39図18以後は中期の遺物で埋土の3層以上から出土したものである。隆沈文で構成された大木2b式の土器である。1～17までは縄文前期の土器で、床面及びそれに近い所から出土したものである。口縁部に隆帯があるもの（2）、頸部以下は綾络文を施すもの（3～7）、不整撲糸文を施すもの（8～10）、結節の羽状縄文を施すもの（17）などがある。これらはいずれも大木2b～3式にかけてのものである。石器は4点ある。第40図2は断面カマボコ状をなす竪状石器であろう。他



第40図 S117出土石器

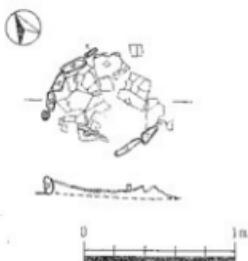
は使用痕のある剝片である。

S I - 23号竪穴住居跡 (第41図)

発見区 II区の12グリッドに発見されたものである。S I - 17号竪穴住居跡の北の黒土層中に発見された。炉跡だけのもので、壁・床等はブルドーザーによってすでに破壊されており、確認できなかった。

炉 石開炉で、中に土器が埋っていた。炉の石は北、南にだけ残っていて東西側にはない。現存するものから推測すると、南北70cm、東西は1m以上の大きさがあったであろう。炉土が炉の中央部に少し認められた。

時期 中期



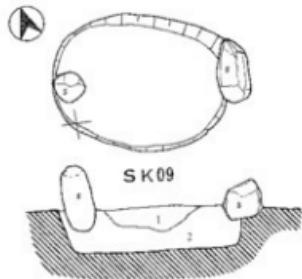
第41図 SI-23号竪穴住居跡

第1表 遺構内出土石器一覧表

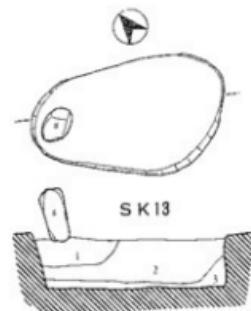
出土地	図-No.	種類	石質	その他	出土地	図-No.	種類	石質	その他
S I 01	8-1	石 篦	頁岩		S I 01	8-16	石 錬	砂岩	
	8-2	石 篚	"			8-17	腐製石斧	安山岩?	
	8-3	石 篚	"			8-18		凝灰岩	
	8-4	石 篚	"						
	8-5	使用痕有	流紋岩			12-1	石 錬	流紋岩	
	8-6	石 篚	頁岩			12-2	"	頁岩	
	8-7	使用痕有	"			12-3	擦器	"	
	8-8	"	"		S I 02	12-4	石 篚	"	
	8-9	"	"			12-5	使用痕有	"	
	8-10	"	流紋岩			12-6	石 篚	"	
	8-11	"	"			12-7	擦石	安山岩	
	8-12	"	頁岩						
	8-13	"	"			17-1	石 篚?	頁岩	
	8-14	"	"		S I 06	17-2	使用痕有	"	
	8-15	"	"			17-3	"	"	

出土地	図一No	種類	石質	その他	出土地	図一No	種類	石質	その他
S I 07	20-1	ポイント?	流紋岩		S I 12	31-1		頁岩	
	20-2	使用痕有	頁岩			31-2		〃	
	20-3	ポイント?	〃			31-3		〃	
	20-4	使用痕有	〃			31-4		〃	
	20-5	〃	〃		S I 15	34-1	ポイント?	頁岩	
	20-6	〃	〃			34-2	使用痕有	〃	
	20-7	〃	〃			34-3	〃	〃	
	20-8	〃	〃			34-4	〃	〃	
	20-9	凹石	砂岩			34-5	〃	〃	
	20-10	〃	〃			34-6	〃	〃	
	20-11	〃	玄武岩?			34-7	擦石		
	20-12	円錐状石製品	凝灰岩?			34-8	〃		
S I 10		石鏡				40-1	使用痕有	頁岩	
S I 11	28-1	石鏡	頁岩		II区 S I 17	40-2	石鏡	〃	
	28-2	ポイント?	流紋岩?			40-3	使用痕有	〃	
	28-3	〃	頁岩			40-4	〃	〃	
	28-4	石鏡	〃						
	28-5	石鏡	〃						
	28-6	使用痕有	〃?						
	28-7	〃	流紋岩						
	28-8	〃	頁岩						
	28-9	ポイント?	〃						
	28-10	使用痕有	〃						
	28-11	〃	〃						
	28-12	〃	〃						
	28-13	凹石	玄武岩?						
	28-14	擦石	安山岩						
	28-15	〃	〃						

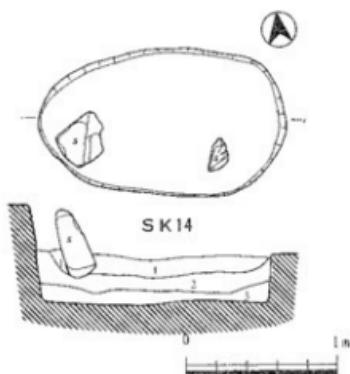
2. 土壌その他



1 暗褐色 (10YR 3/4)	2層に比してややしまっている。 0.5~1cm大の炭化物を含む。
2 褐色 (10YR 3/4)	赤色微粒子、0.5~1cm大の炭化物を含む。



1 暗褐色 (7.5YR 3/4)	粘性強。炭化物含まず。
2 褐色 (7.5YR 3/4)	粘性弱。軟かい土。炭化物を少量含む。
3 橄暗褐色 (7.5YR 3/4)	粒子の細かい硬くしまった土。 粘性ややあり。炭化物を少量含む。



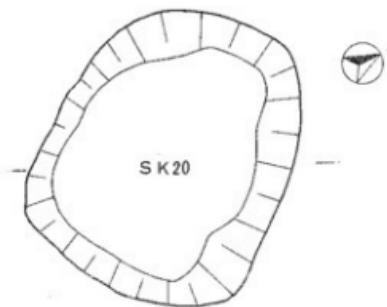
1 黒褐色 (7.5YR 3/4)	黒色土が斑点状に分布する軟かい土。 炭化物を少量含む。
2 褐色 (7.5YR 3/4)	やや明色。礫を少數含むしまった土。 炭化物を少量含む。
3 橄暗褐色 (7.5YR 3/4)	粒子の細かい硬くしまった土。 粘性ややあり。炭化物を少量含む。

第42図 SK09・13・14土壌

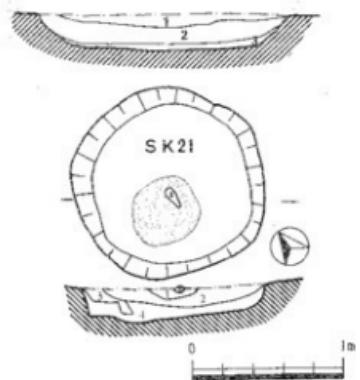
第09号 土塙		検出地点	I区 N13	主軸方位	N72° W
法量	長軸1.31m, 短軸0.91m, 最深の深さ0.30m				
形態	ほぼ楕円形で、断面はU字状を呈する。両側に立てたように石を配する。				
遺物出土状況	遺物は出土しなかったが、本來の遺構検出面である第Ⅳ層上面からは縄文時代中期の遺物が出土した。				
時期	縄文時代中期中葉のものと思われる。		挿図番号	第42図	
備考	土色が似かよっており、第Ⅴ層上面にてプランが明確になる状態であったため、かなり下面まで掘り下げてしまった。本來の上面は、おそらく西側の石がかかる、約30cm上だったものと思われる。 (同様のことがSK13・14についても言える。)				

第13号 土塙		検出地点	I区 N10・14	主軸方位	N35° W
法量	長軸1.29m, 短軸0.79m, 最深の深さ0.37m				
形態	平面は不規則円形で、断面は逆台形を呈する。西側に立った状態の石がある。				
遺物出土状況	SK09-14と同様遺物は出土しなかったが本來の遺構確認面である第Ⅳ層上面からは縄文時代中期の遺物が出土した。				
時期	縄文時代中期中葉のものと思われる。		挿図番号	第42図	

第14号 土塙		検出地点	I区 N14	主軸方位	N80° W
法量	長軸1.65m, 短軸0.98m, 最深の深さ0.63m				
形態	ほぼ楕円形で、断面は逆台形を呈する。土塙両端に立った状態の石を配する。				
遺物出土状況	SK09・13と同様、遺物は出土しなかったが、本來の遺構確認面である第Ⅳ層上面からは縄文時代中期の遺物が出土した。				
時期	縄文時代中期中葉のものと思われる。		挿図番号	第42図	

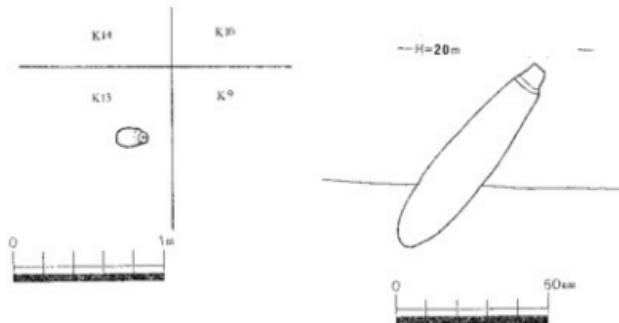


1 褐 7.5YR 1/2	砂質
2 黒褐 7.5YR 3/4	粘性の強い土。
3 暗褐 7.5YR 4/5	粘性の強い土。



1 燒 土	木炭含む。
2 褐 色 10YR 4/5	粘質
3 褐 色 10YR 1/2	…部2層に比してやわらかい。
4 暗褐 色 10YR 4/5	ローム混じり（かたい）

第43図 SK 20・21土塙



第44図 石棒出土地及び出土状態

第20号 土塁		検出地点	II区 3	主軸方位	N 33° W		
法量	長軸1.96m, 短軸1.59m, 最深の深さ0.23m						
形態	不整格円形を呈するやや大形の浅い土塁である。		挿図番号	第43図			
遺物出土状況							
遺物							
時期				図版番号	図版		
備考							

第21号 土塁		検出地点	II区 3	主軸方位	円形		
法量	長軸1.27m, 短軸1.25m, 最深の深さ0.22m						
形態	ほぼ円形を呈する浅い土塁である。		挿図番号	第43図			
遺物出土状況							
遺物							
時期				図版番号	図版		
備考	中央やや南西部に埴土があり、石を伴っていた。						

石棒 (第44図 図版16)

K 13グリッドの北東コーナーから発見された。石棒の上場のレベルは19.94 mである。この確認された面は、図版16で見るよう土器がかたまって出土した面で顔を出したものである。この石棒に伴う遺構の有無を確かめたが、それは認められなかった。石棒を掘り下げる結果、第44図のように傾斜（東側へ35°傾く）をもち、立った状態で発見された。石棒を立てるための掘り方も確認されなかった。遺跡のある台地は西側が高く、東側が低いことから、石棒は当初垂直に立っていたものが土砂の自然の動きで傾斜したものではないかと推測される。石棒は全体をきれいに丸く整形し、頭部を一段細くし、頂部は凹んでいる。長さは73.5cmである。

第2節 その他の遺物

土器 (第45図~57図 図版28~36)

前節で紹介した以外に、遺構外から多くの縄文土器が図示した。縄文土器は前期・中期のもので、後者のものが多い。それらの遺物を各区ごとにわけて図示したものが第45図~第57図までのものである。

各地区から出土した遺物を見ると、器形は深鉢形が最も多い。口縁部がキャリバー状をなすもの、少し内湾するもの、少し外反しながら胴部から口縁部まで直線的に立上がるもの、外反するものなどがある。完全に近いものはS I-07から出土した第45図5のものがある。波状口縁をなし内湾する。文様は隆沈文からなり、波状口縁の頂部に渦巻文を施し、胴部は2本の隆沈文からなり、中に渦巻文を施す。渦巻文は全て時計回りである。地文に縄文がある。このように地文に縄文があり、その上に隆沈文で文様が構成される深鉢形の土器が主体をなす。渦巻文は右・左巻きのものがある。

本遺跡の中期の土器を文様表現技法と施文の順序から大別すると、次のようになる。

(地文)

$$\left\{ \begin{array}{l} 1. \text{無文} \\ 2. \text{縄文 (L R, R L)} \\ 3. \text{撚糸文 (L, R)} \\ 4. \text{櫛目状工具による条線文} \end{array} \right\} + \left\{ \begin{array}{l} A. \text{隆起文} \\ B. \text{隆沈文} \\ C. \text{沈線文} \end{array} \right\} + \left\{ \begin{array}{l} 1. \text{縄文} \\ 2. \text{刺突文} \end{array} \right\}$$

この中で $2+B$ というものが圧倒的に多いことは前述したとおりである。次に $2+A$, $2+C$, $3+B$, $4+C$ という土器は少ない。51図26のように隆沈文の上に刺突文のあるものもある。

前期の土器はM, N II区に多く出土し、不整撚糸文が主体をなし、大木2b式である。

三角形土製品 (第58図~60図38) 38点の三角形土製品を発見。形は両側に耳状の突出部をもつもの、1, 3, 6, 7, 9, 15, 16, 上側につくもの、8, 14, 24, 脇方につくもの、22, 23、唯三角形をなすものがある。耳のつくものは外にゆるく張り出し、つかないもの及びつかない部分は内に凹む線をなす。断面はゆるい弧状をなし、下端部が「く」の字に曲る。正面に粘土紐を貼り付け、その上に刺突文を施したもの、その文様が渦巻、Y字などをなすもの、粘土紐を上端だけに貼り付けたもの、16, V字状に貼り付けたものなどがあり、これらはきれいに整形されている。

2, 7の左側が欠けており、その部分にアスファルトが付着し、補修した形跡を認めることができ。この用途は不明であるが、欠けている部分に共通性が認められる。右肩が欠けてい

るもの、左肩が欠けているもの、下端が欠けているものと大別でき、完全なものが少ない点にも特徴がある。これらは土偶の特性と共に通する点が多く、その用途を考える大きな要素となるであろう。

剣状土製品 (第60図39~40) 三点発見されている。いずれも欠けたもので、頭部に貫孔がある。41は先端部である。

石器 (第62~85図 図版37~43)

石鎌 (第62図) 12点発見されている。基部が手になるものと凹むものとがある。

石匙 (第63図 1~4) 4点である。繩文の遺跡にしては数が少ない。いずれも縦長のものである。

石錐 (第63図 5~37) 刃部が細く長いもの、鋭角に作り出したものとがある。いずれも剥片を利用して刃部だけつくり出したものである。

石簾 (第64~67図) 両面加工のもの、断面がカマボコ形をなす片面加工のものとがある。

ポイント (第68図) 先端が尖るもので両面加工、片面加工のものがある。

搔器 (第69図) 剥片の縁部に加工を施したものである。

その他の石器 (第70~78図) 剥片に使用痕の認められるもの。

磨製石斧 (第79図296~301)

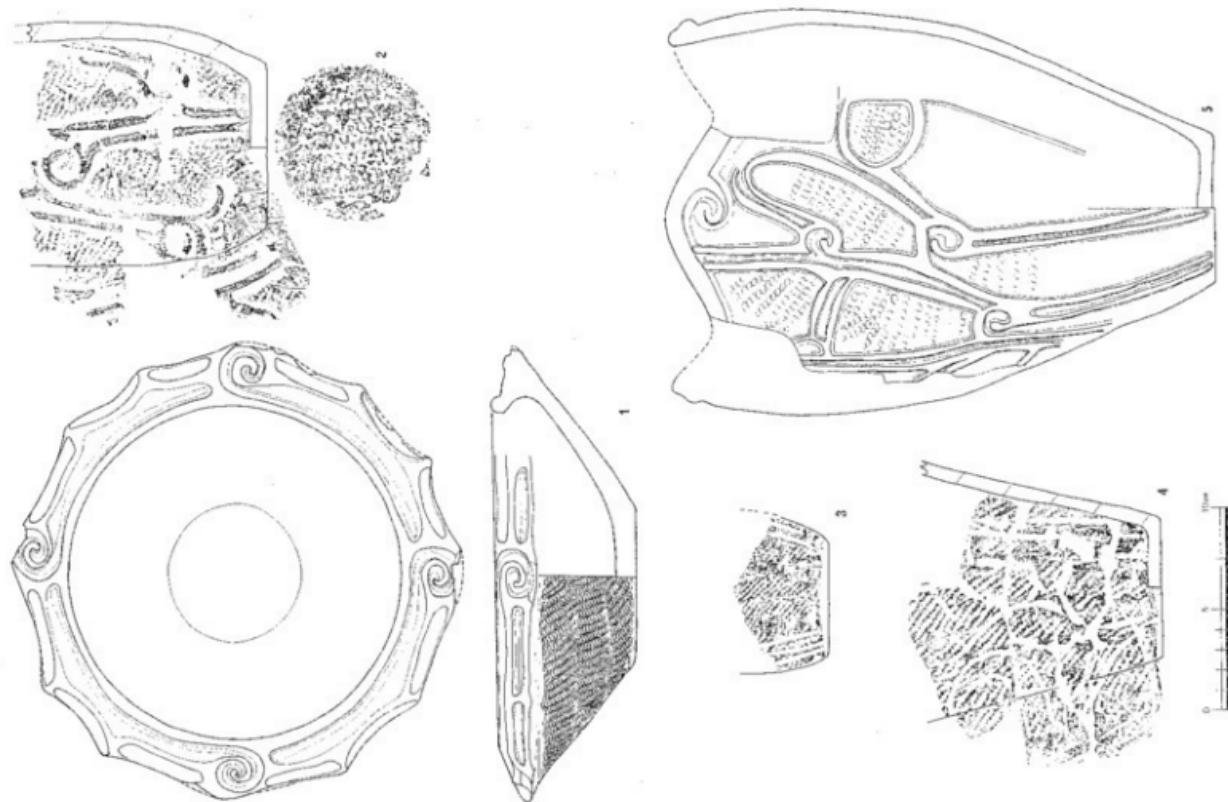
石錐 (第79図302~304)

凹石 (第80図)

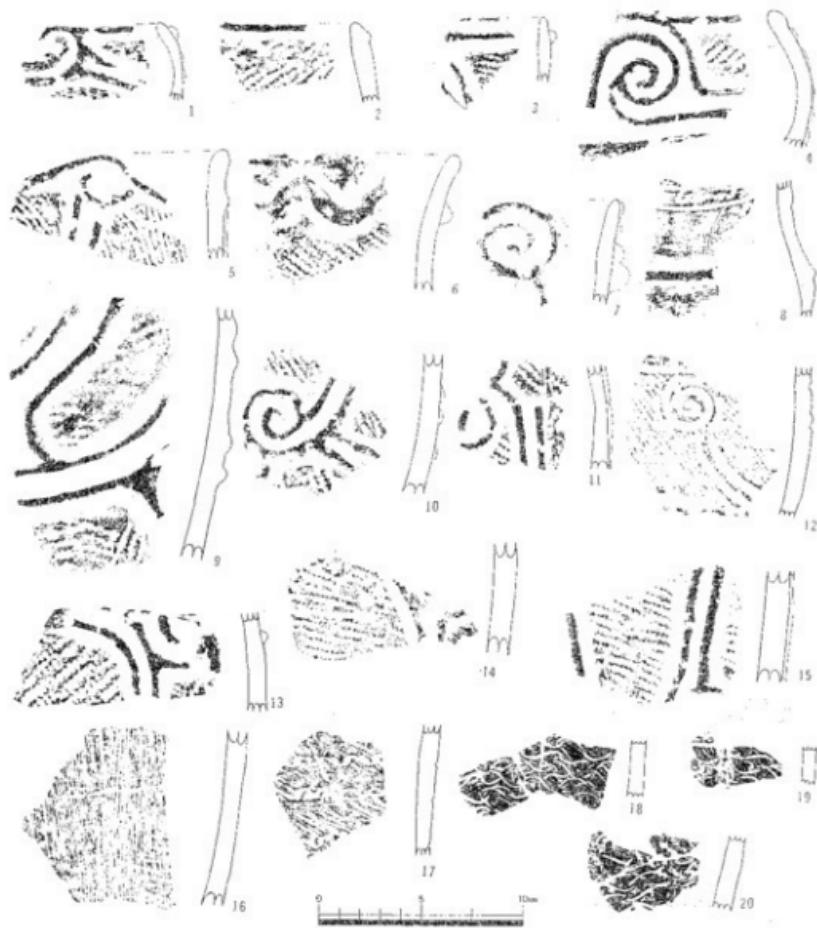
石皿、敲石 (第81図)

II区 (第82~85図) II区からは石鎌、石匙、石簾、ポイント、使用痕のある剥片、それに石錐などがあり、第85図65のように線刻のあるものもある。第84図47は旧石器時代のナイフ形石器を思わせるものである。

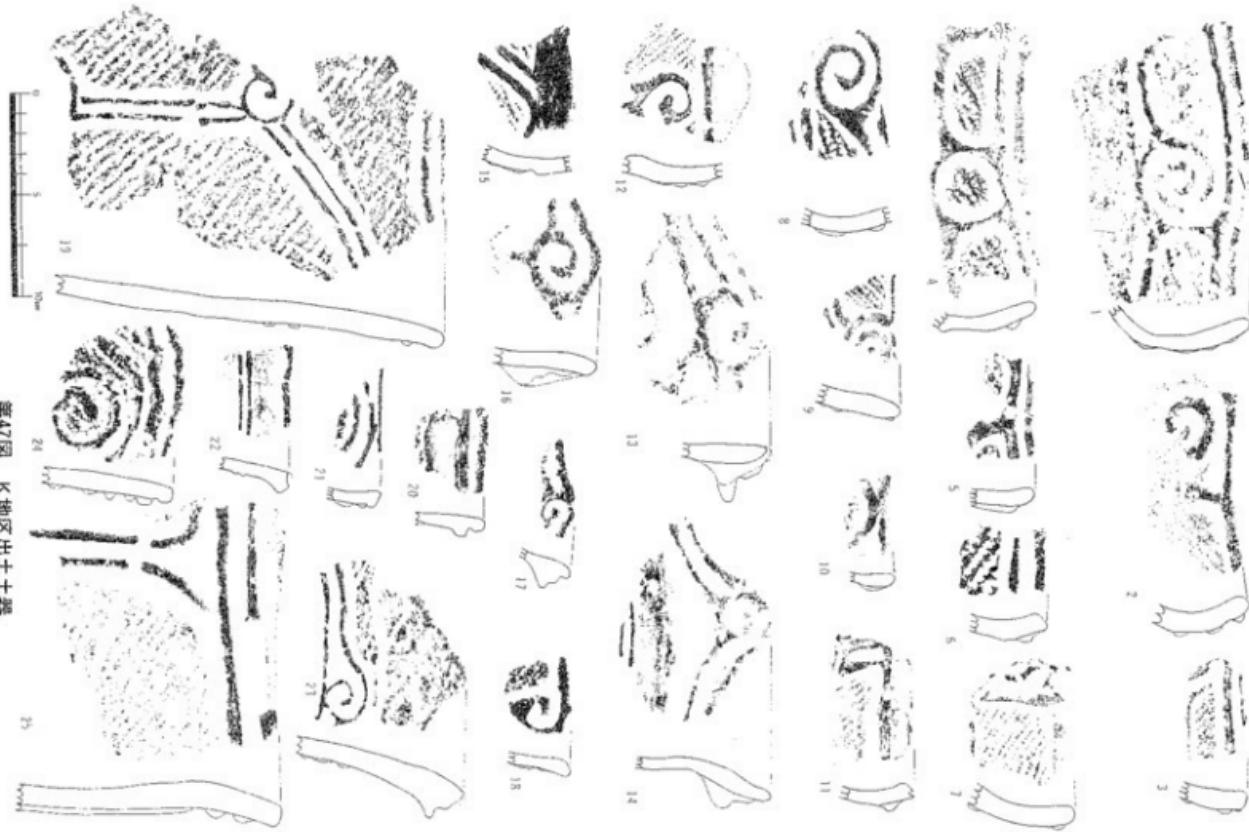
注。土器文様の用語は「宮城県文化財調査報告書第52集、上深沢遺跡、東北縦貫自動車道遺跡調査報告書1」P.352 の文様表現技法によった。



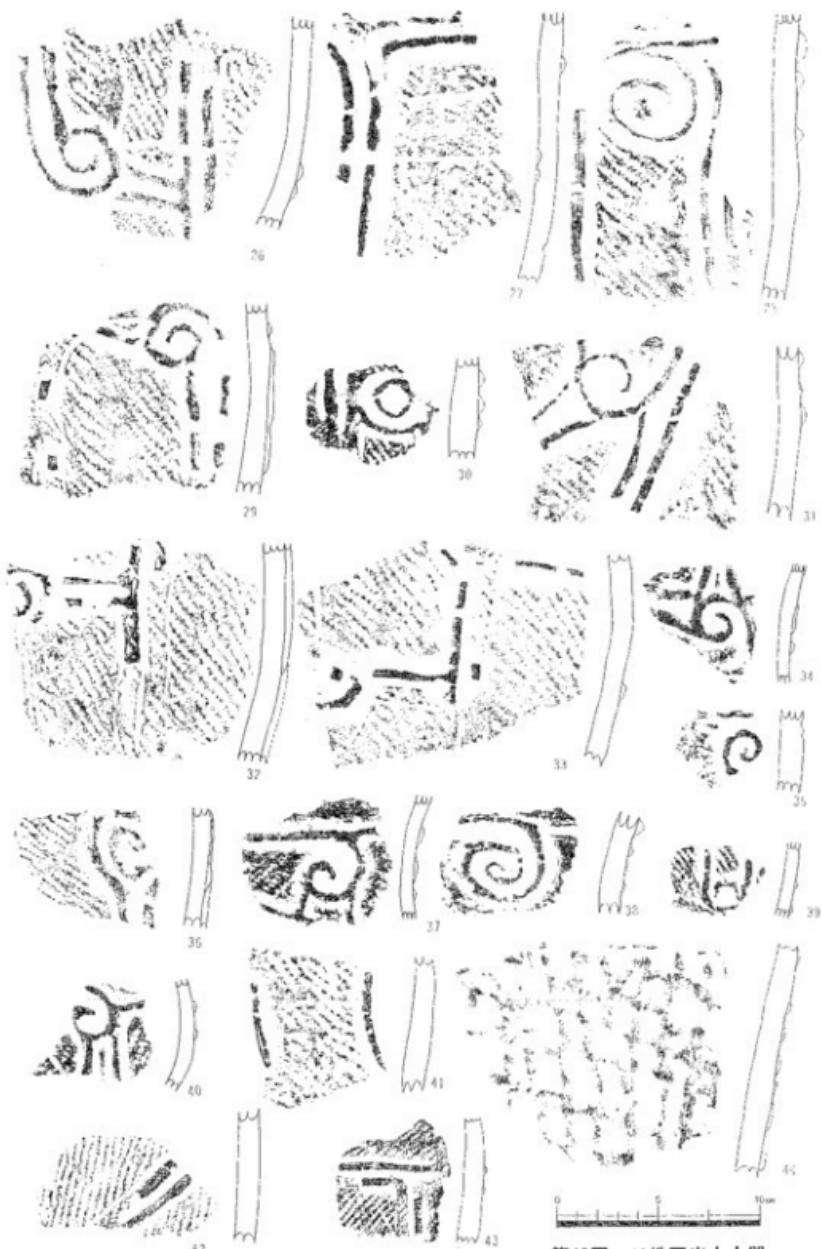
第45圖 土器実測図



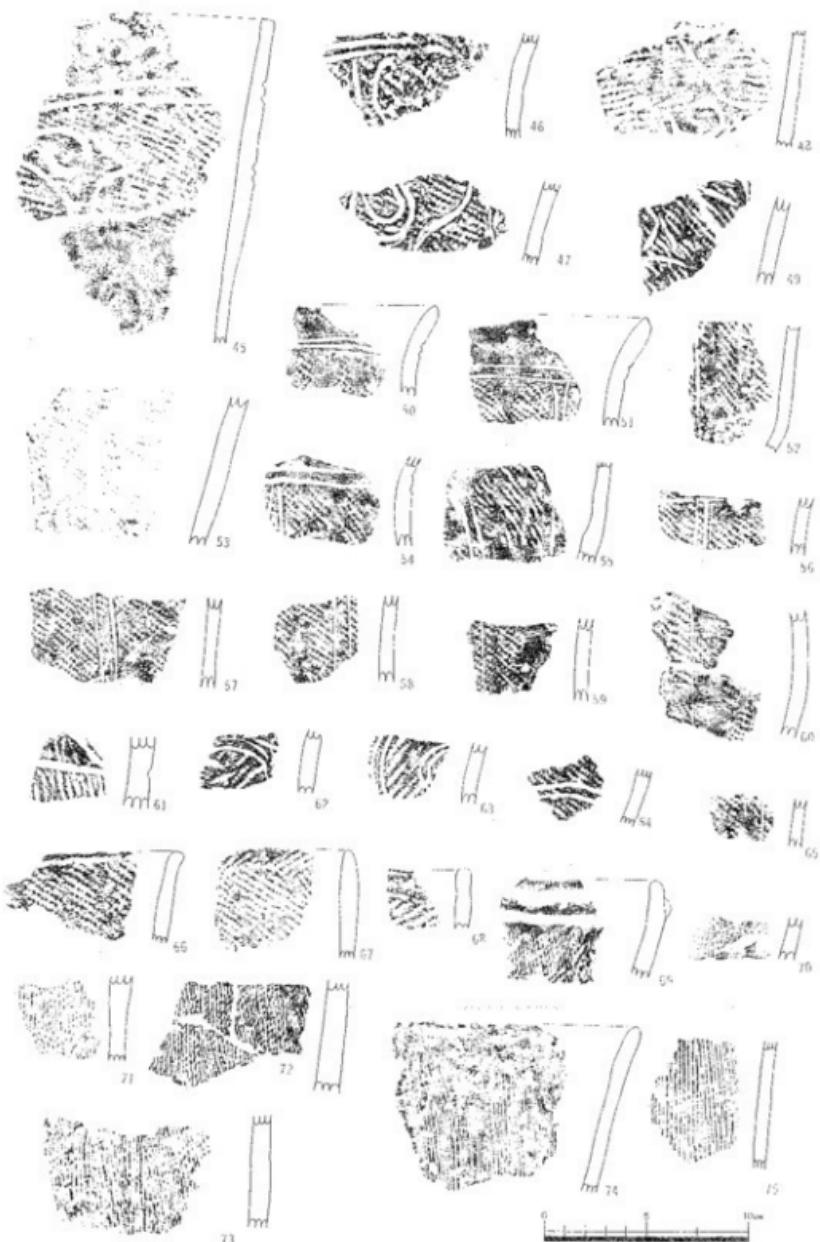
第46図 J地区出土土器



第47図 K地区出土土器



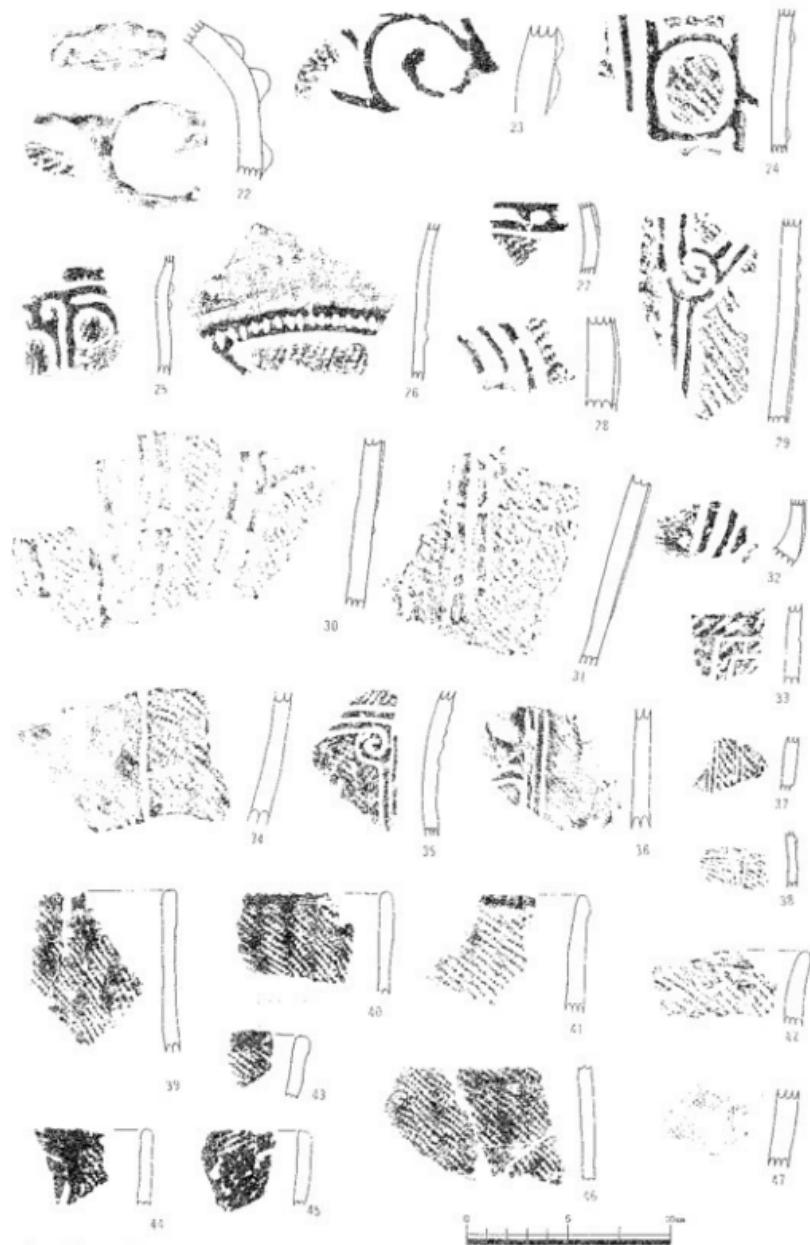
第48図 K地区出土土器



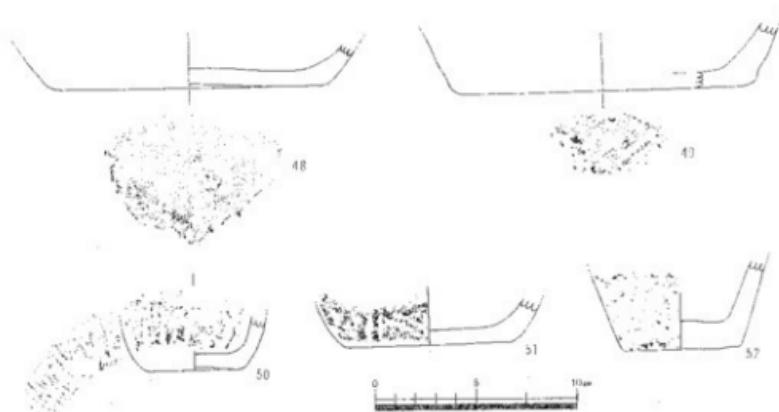
第49図 K地区出土土器

第50图 K地区出土土器

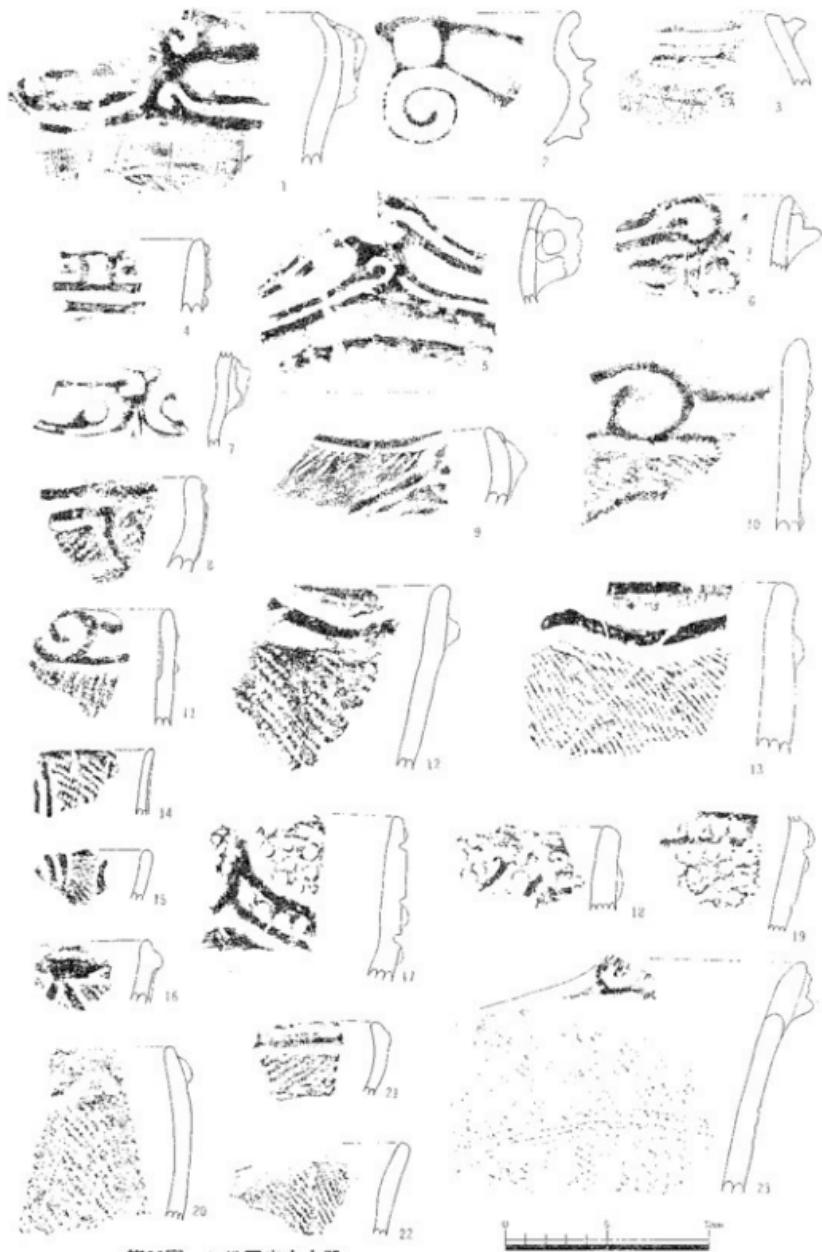




第51図 K地区出土土器

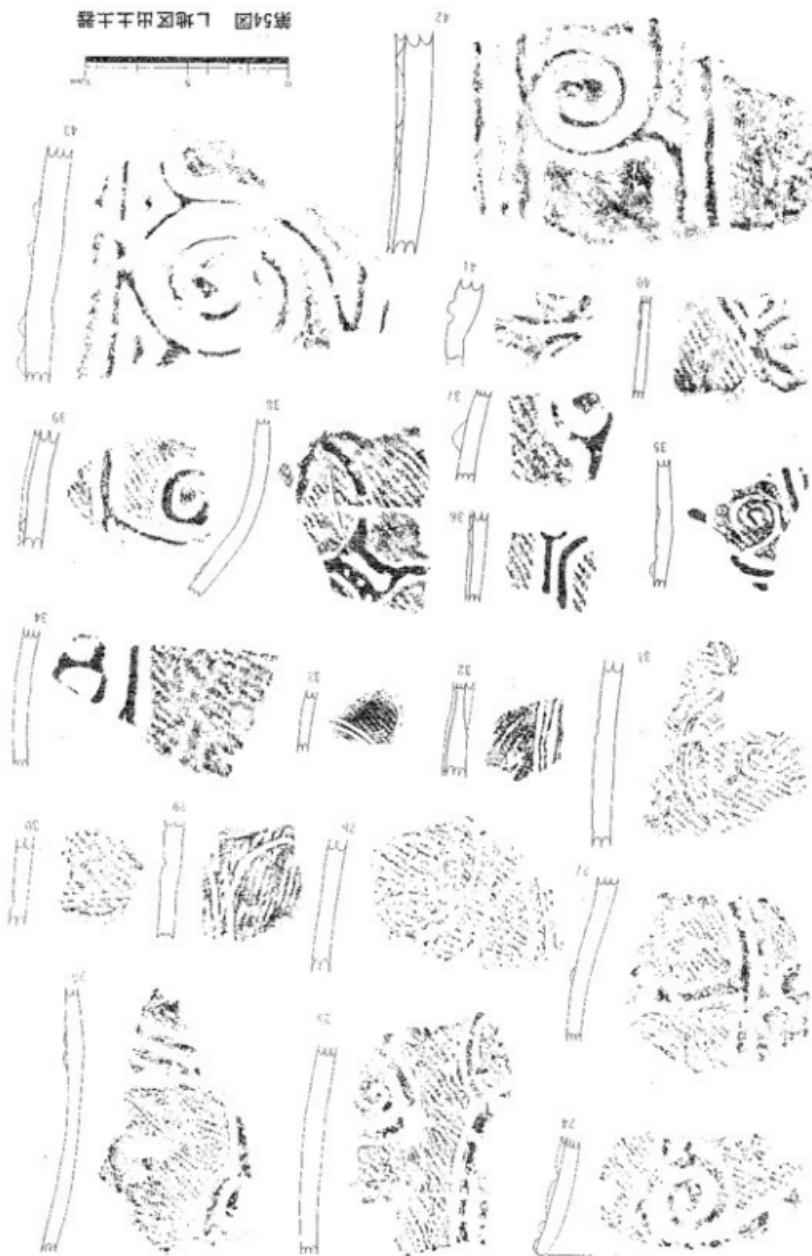


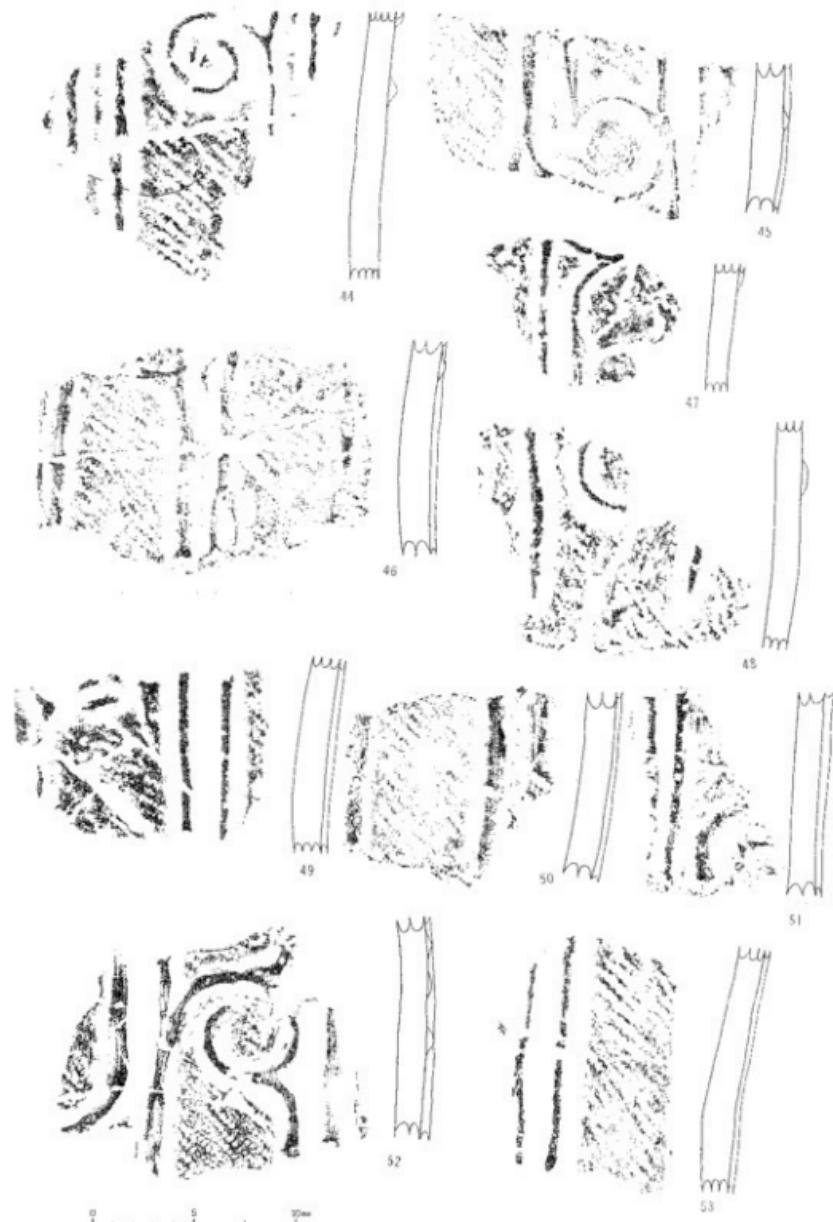
第52図 K地区出土土器



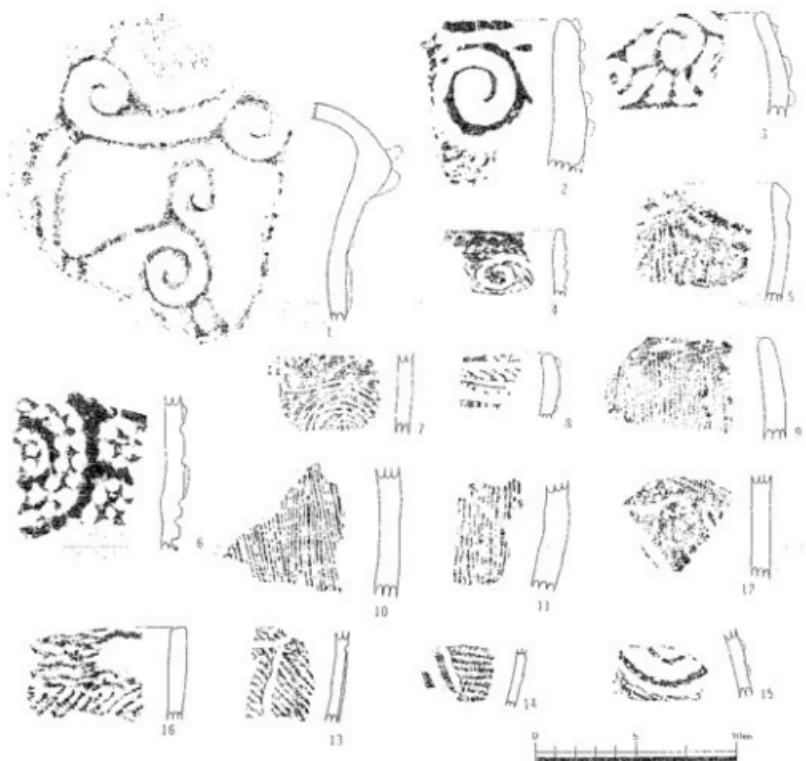
第53図 L地区出土土器

第54图 乙地区出土土器

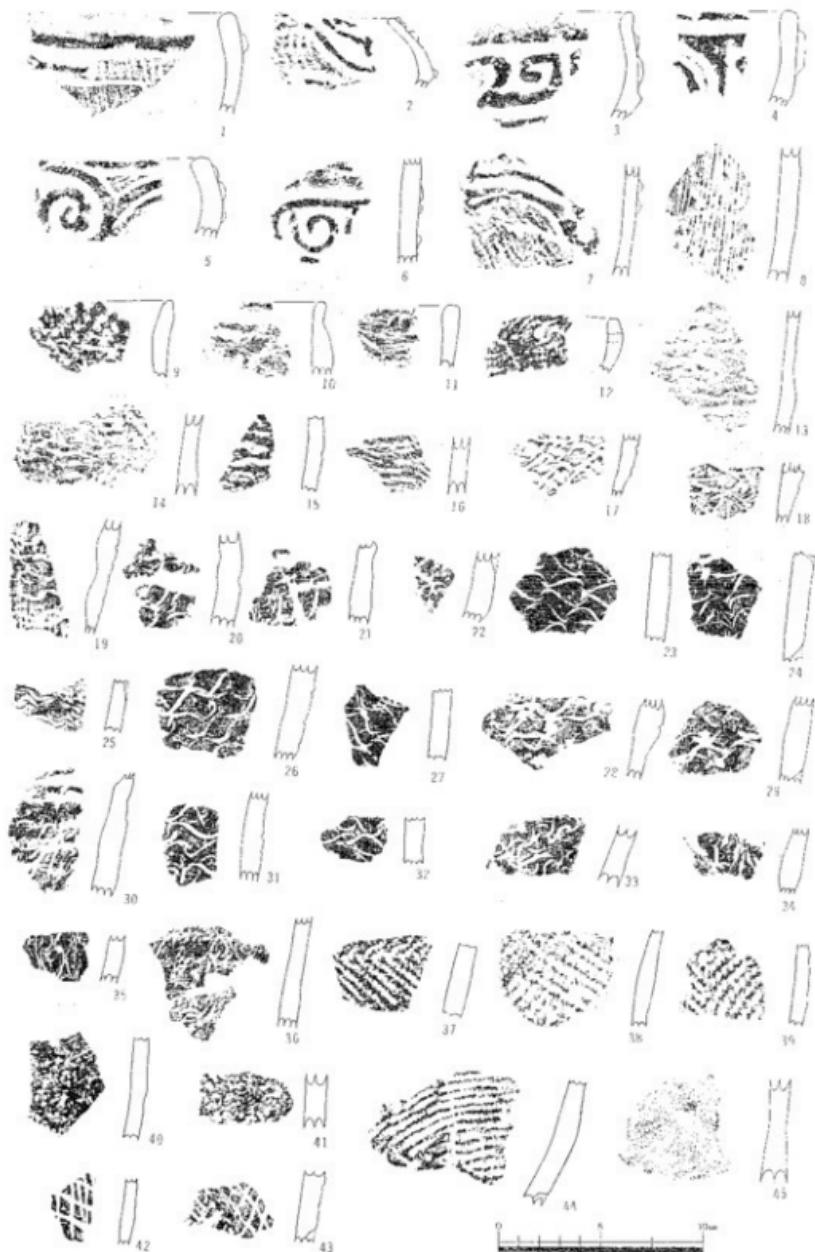




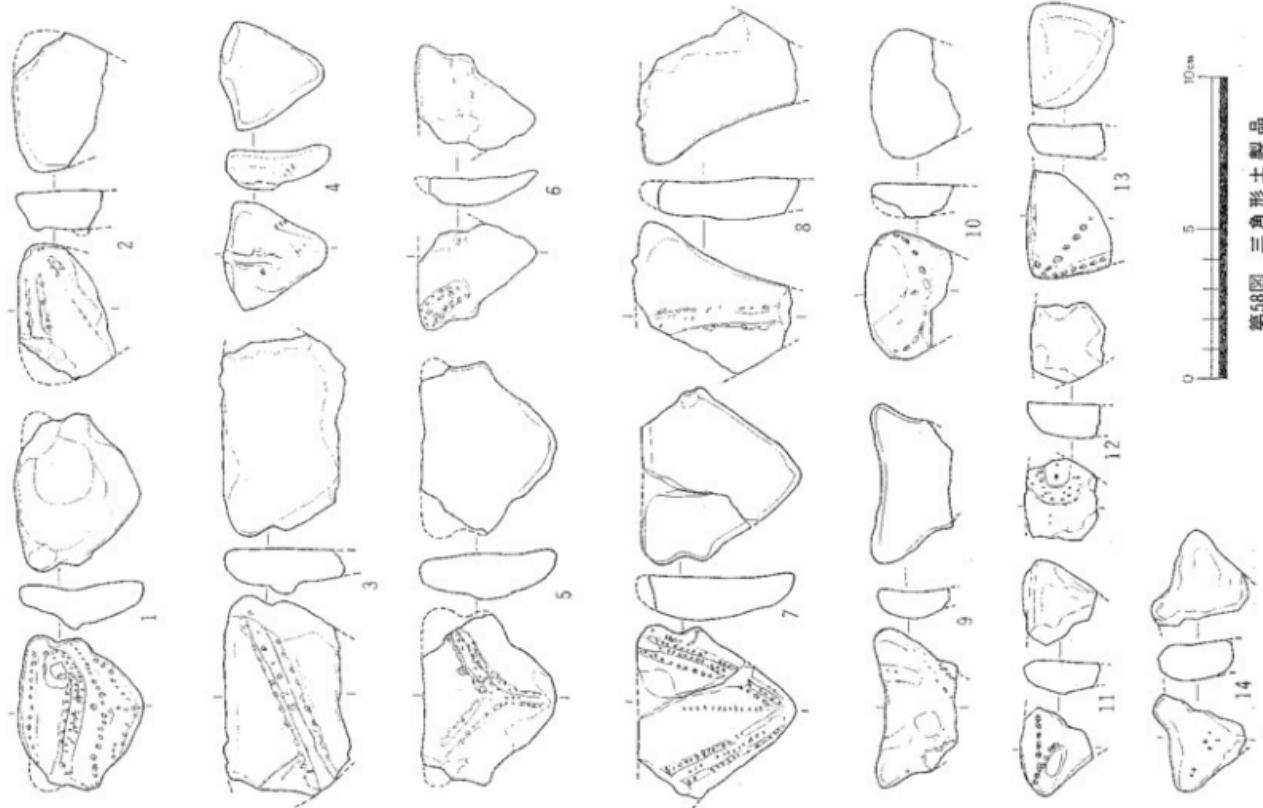
第55図 L地区出土土器



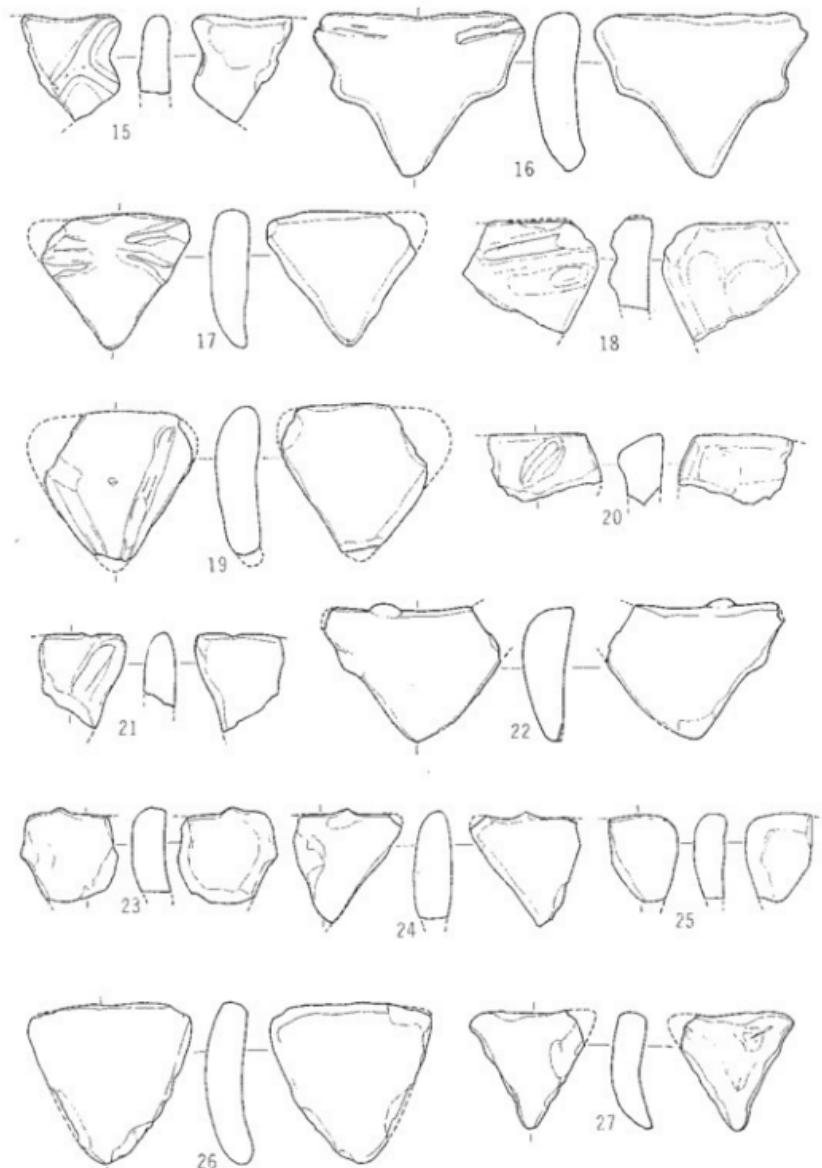
第56図 M地区出土土器



第57図 N地区出土土器



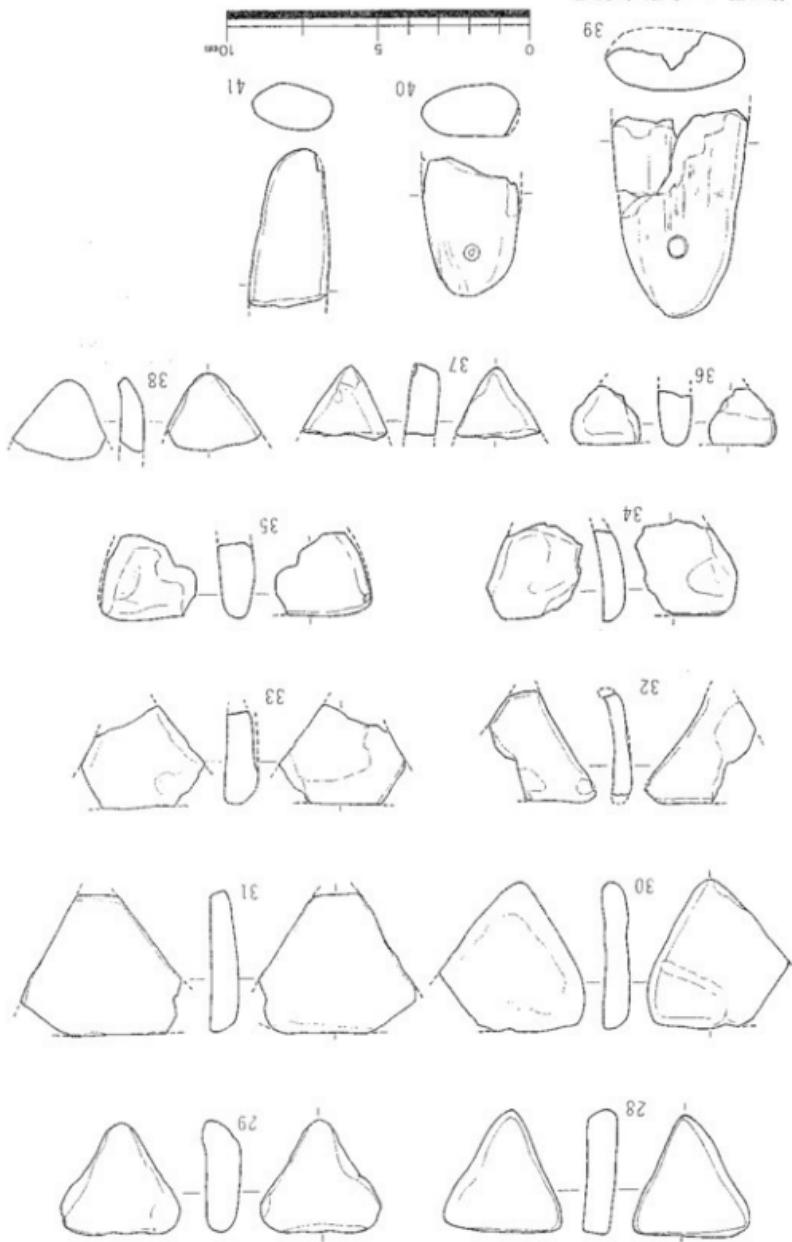
第58圖 三角形土製品



第59圖 三角形土製品

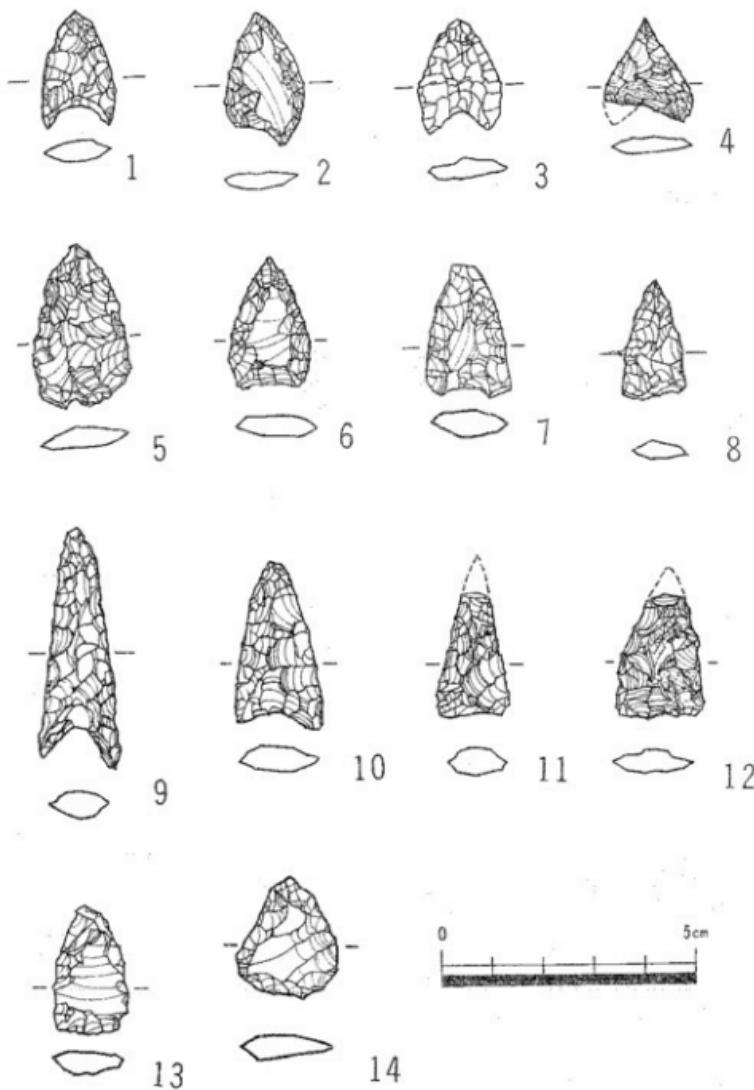


第60図 三鳥形土器品

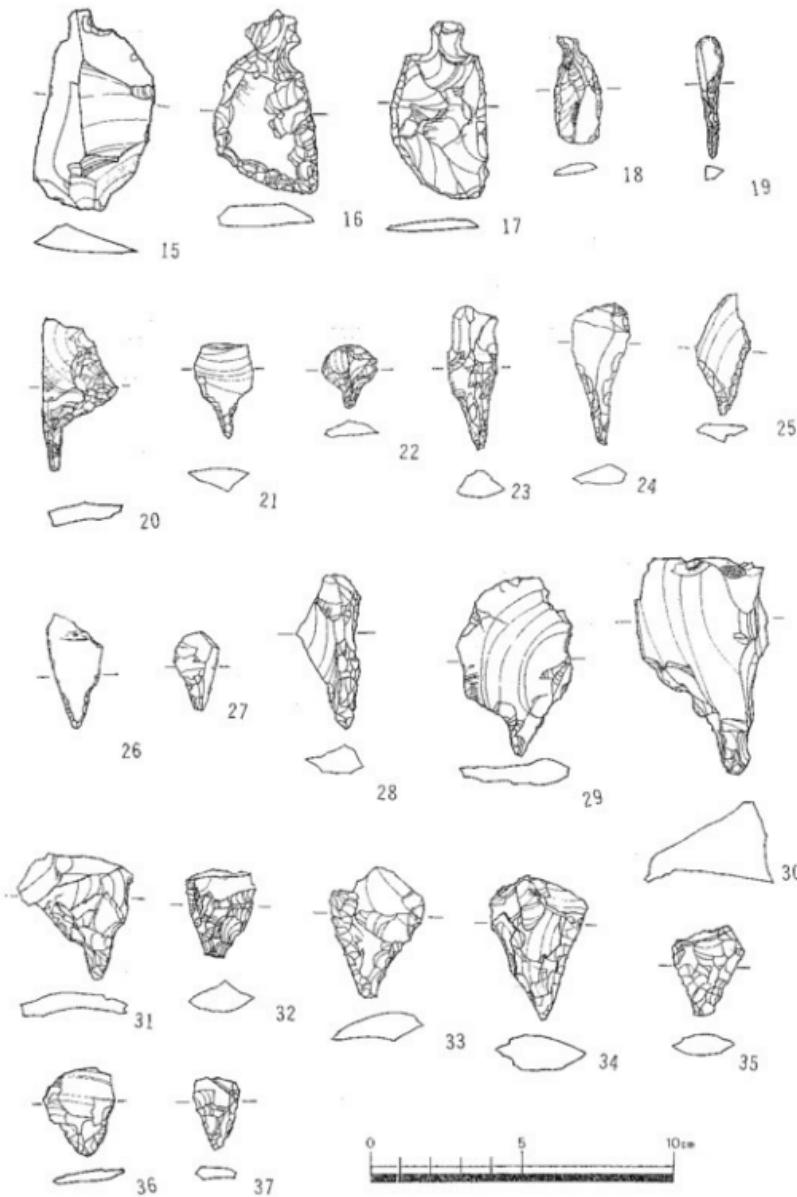




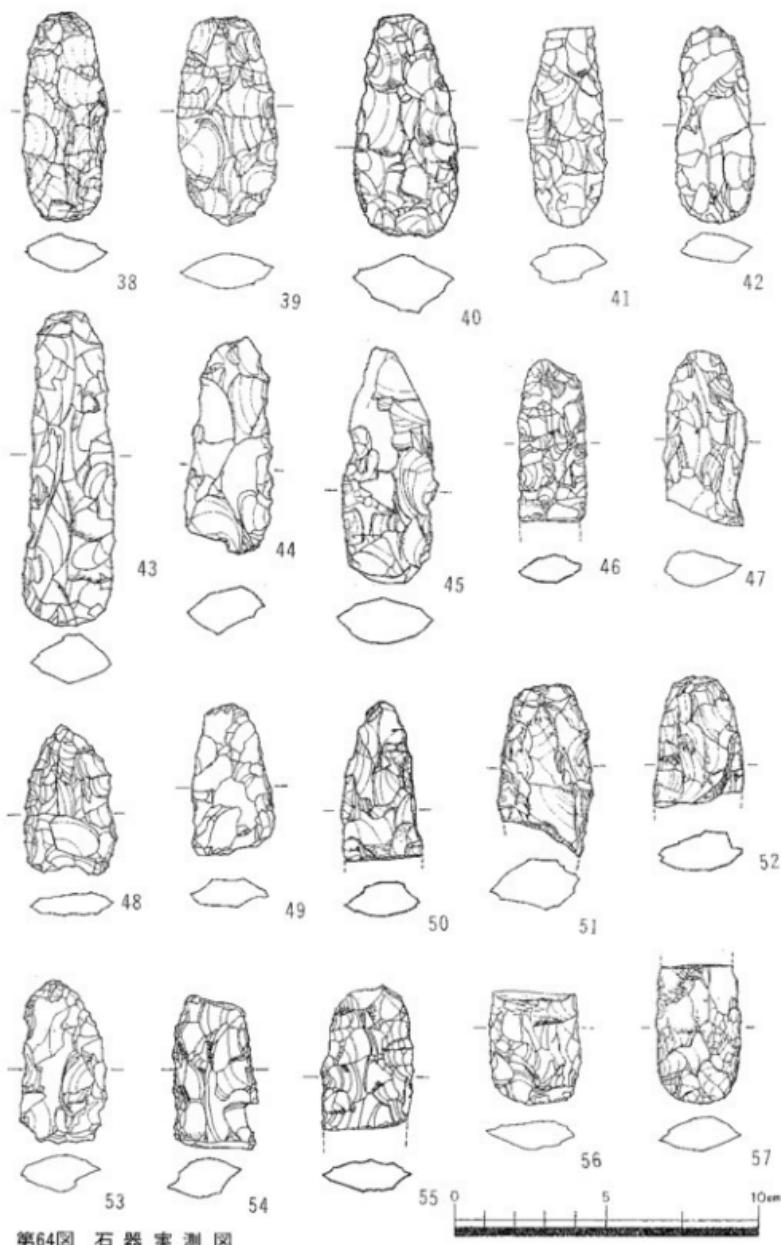
第61図 底部土器拓本



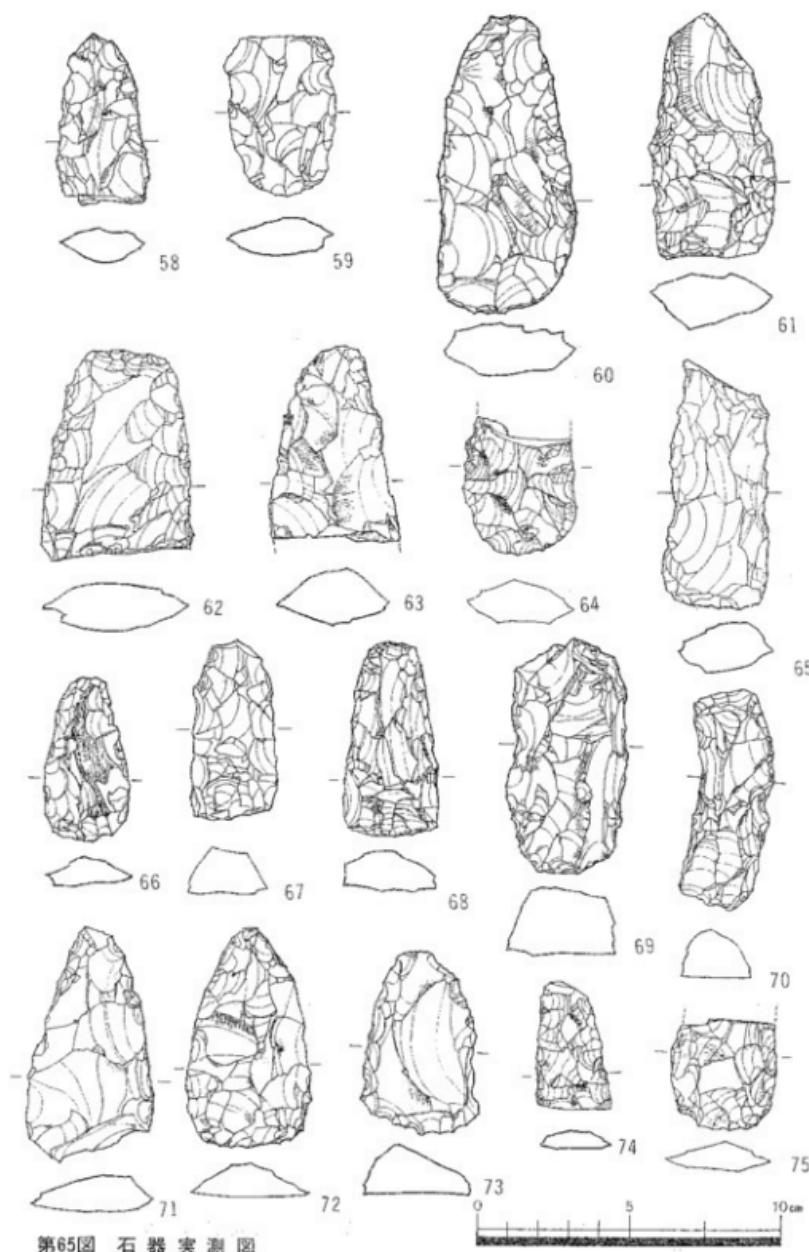
第62図 石器実測図



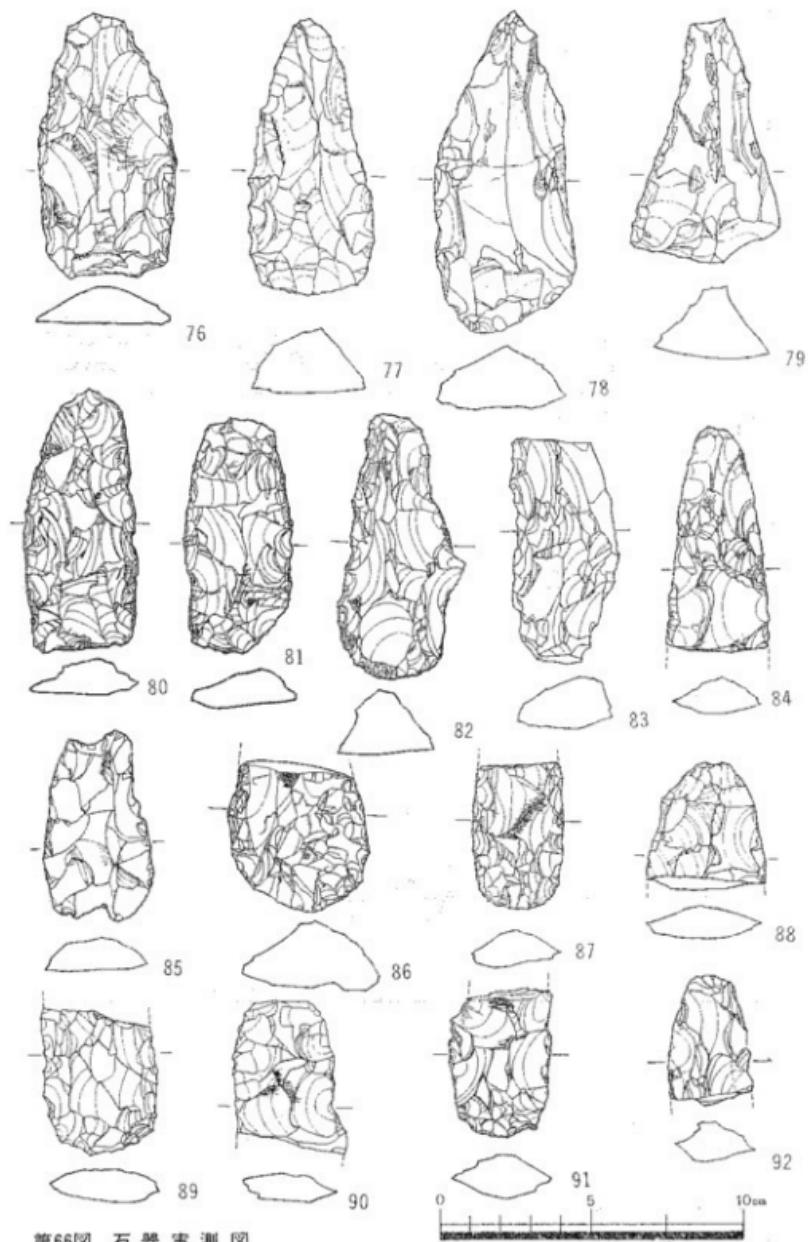
第63図 石器実測図



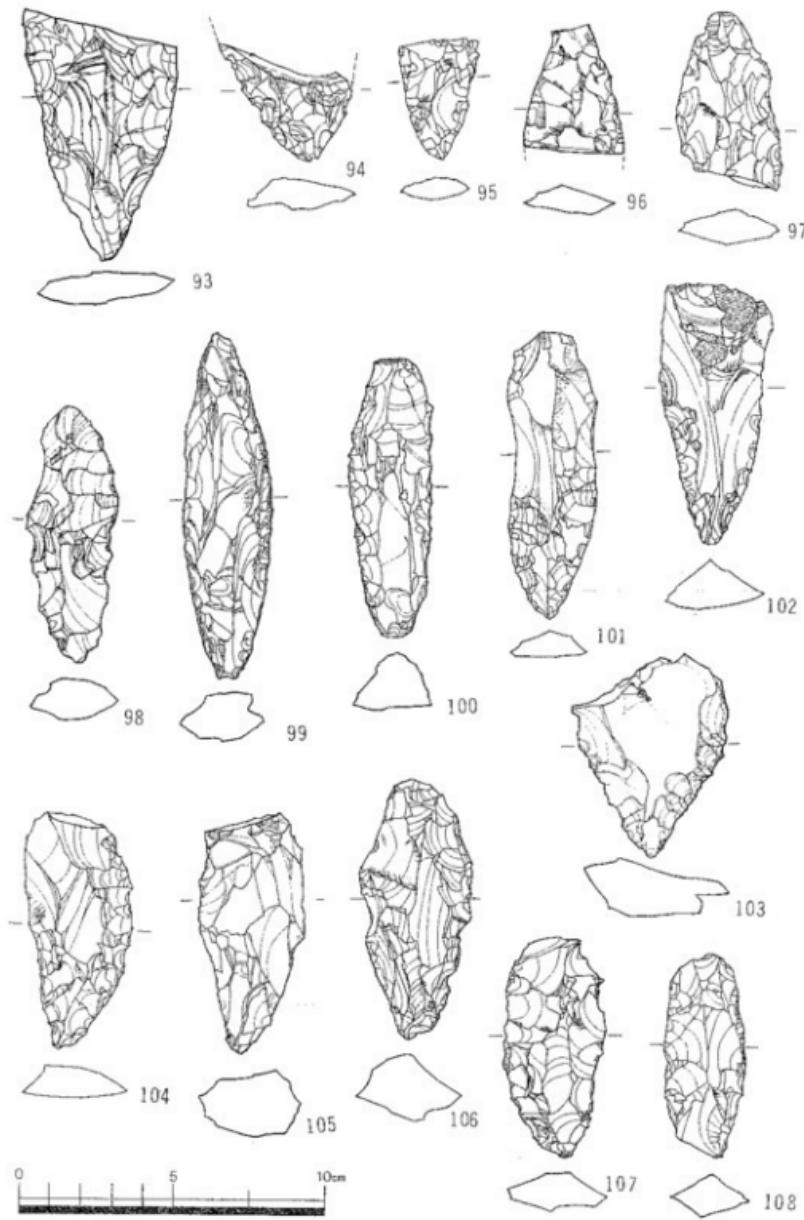
第64図 石器 実測 図



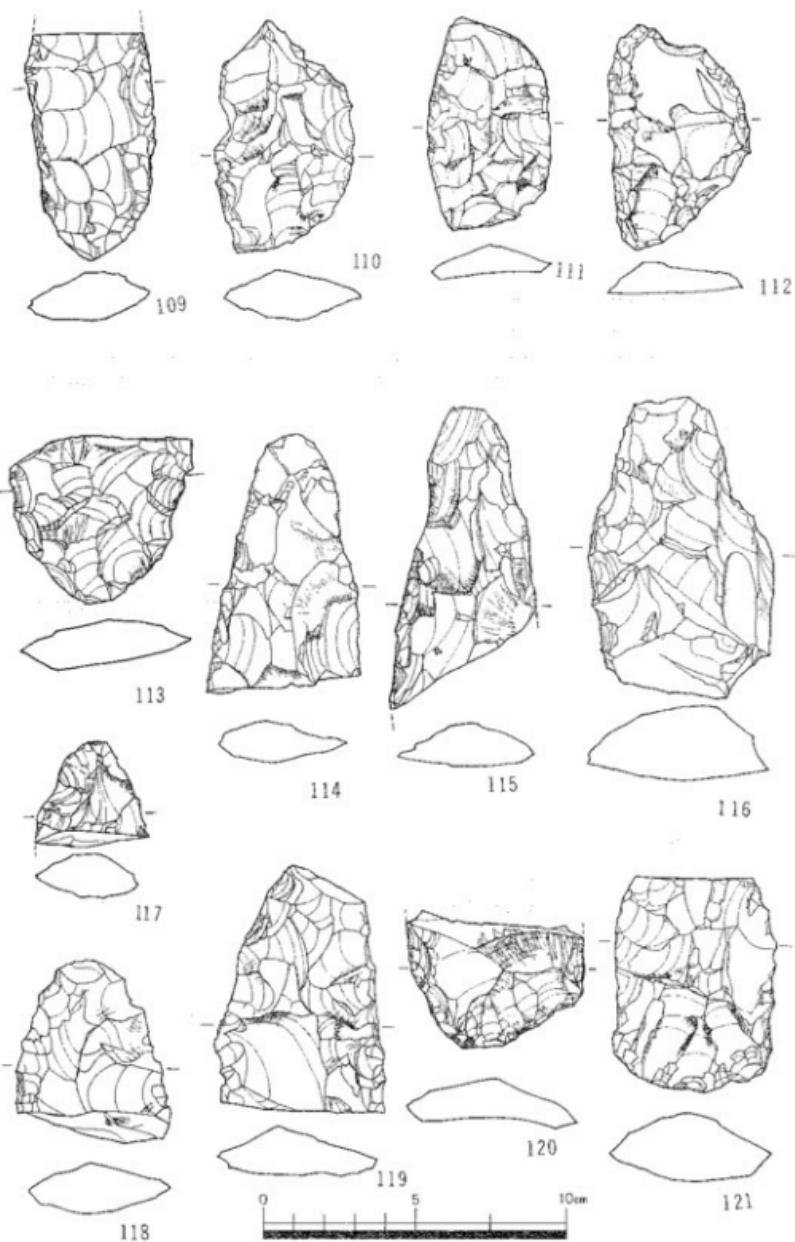
第65図 石器実測図



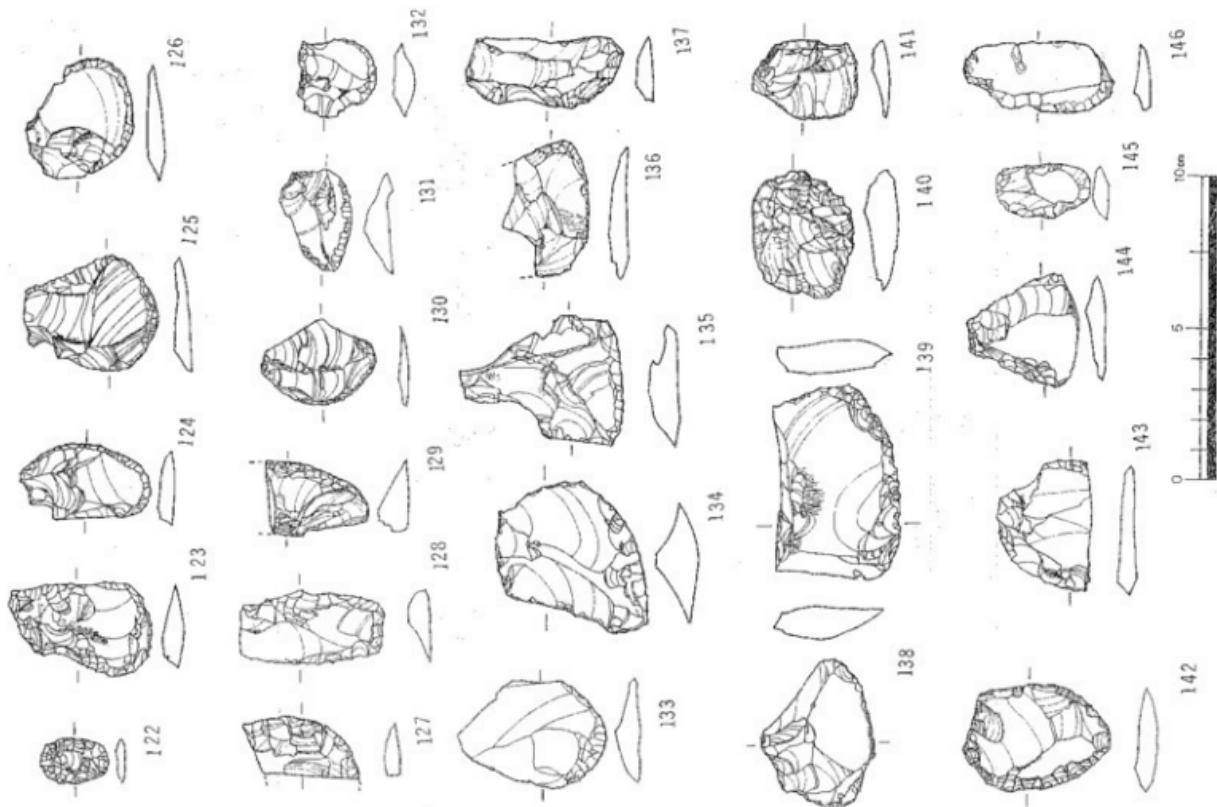
第66図 石器実測図



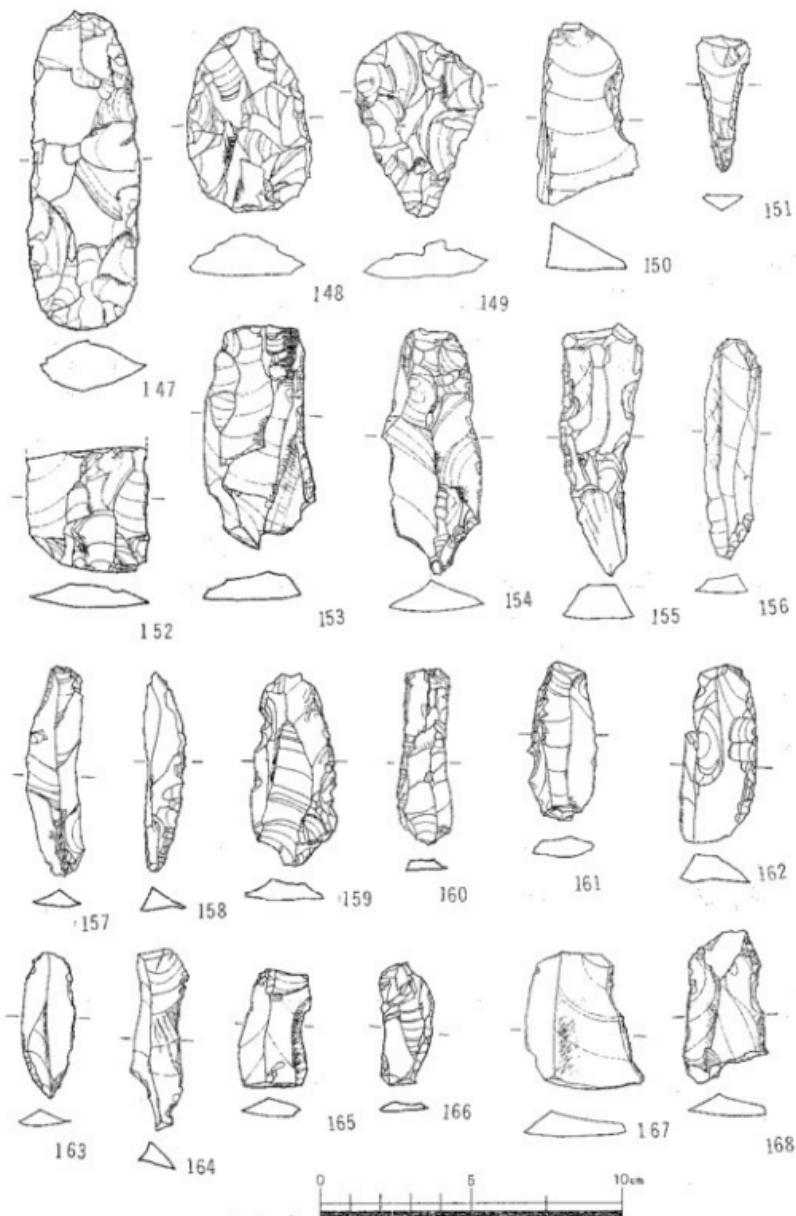
第67図 石器実測図



第68図 石器実測図



第69圖 石器実測図



第70図 石器実測図



第71図 石器 実測図

第72圖 石器實測圖

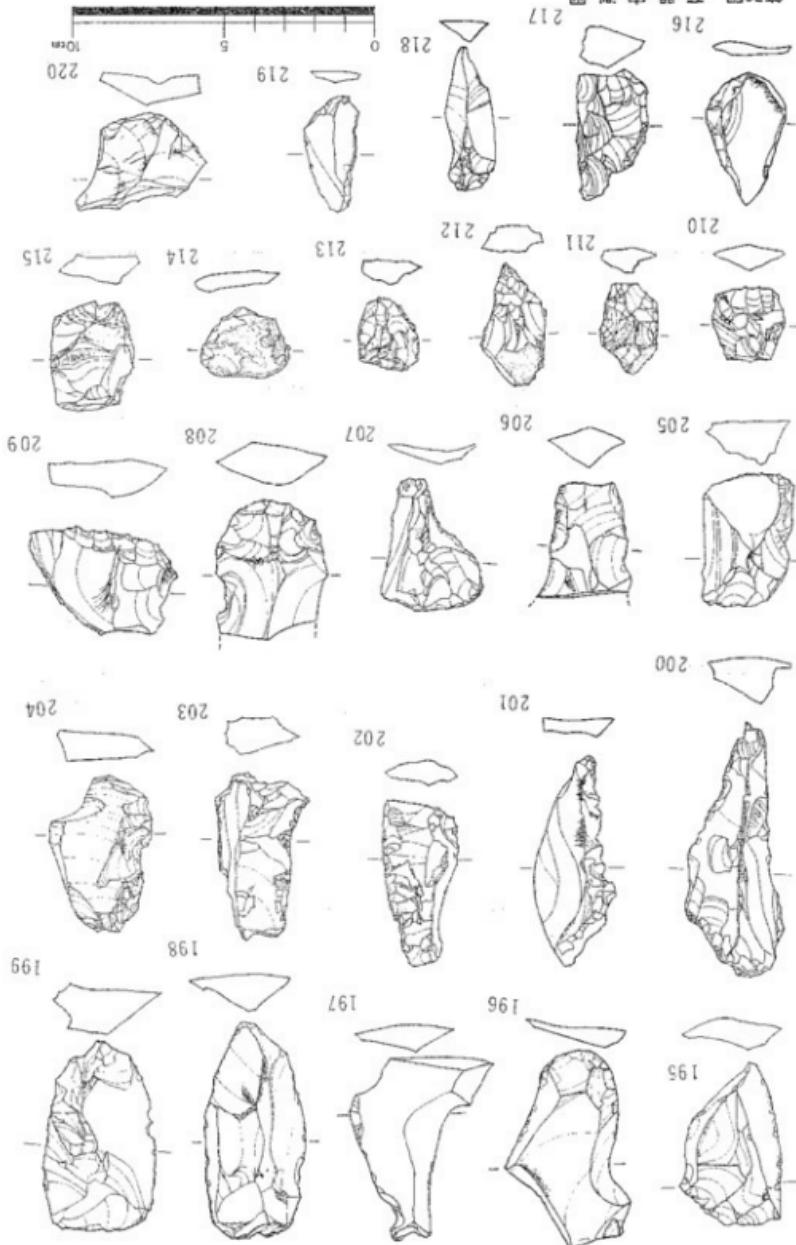
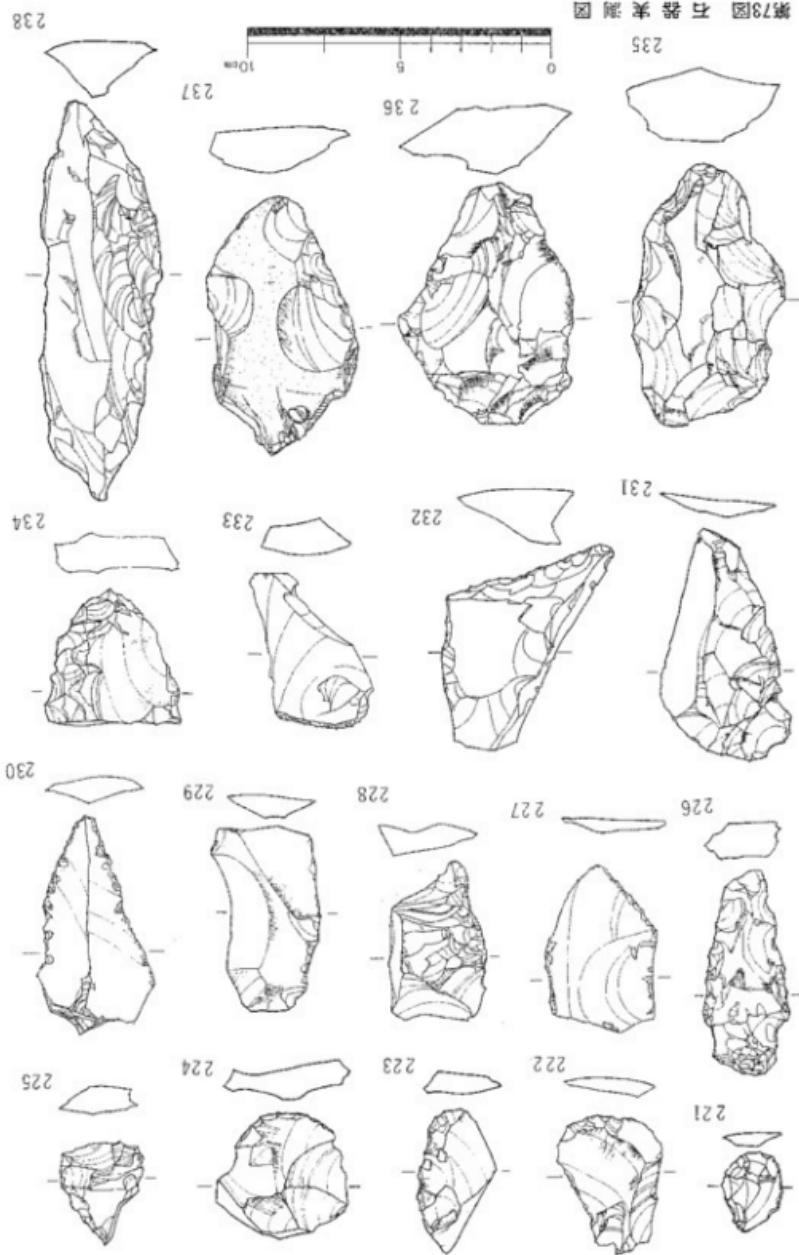
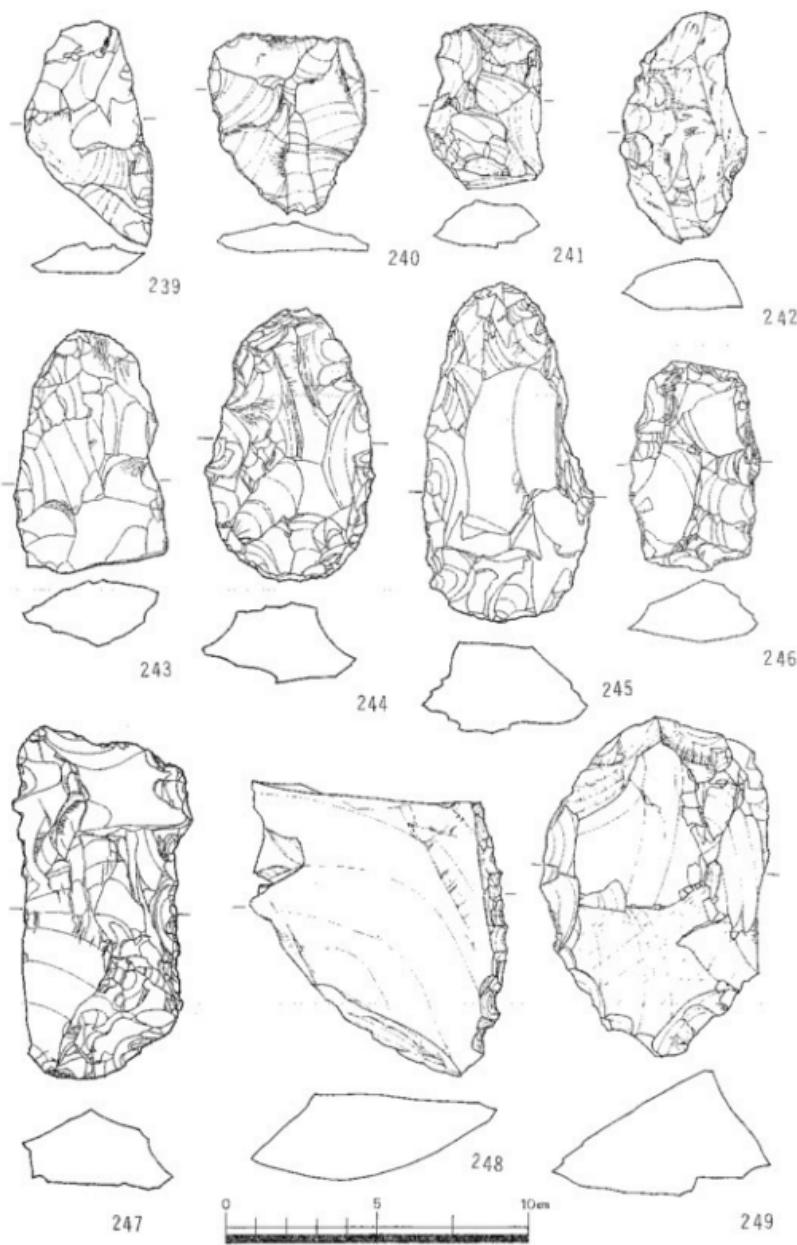
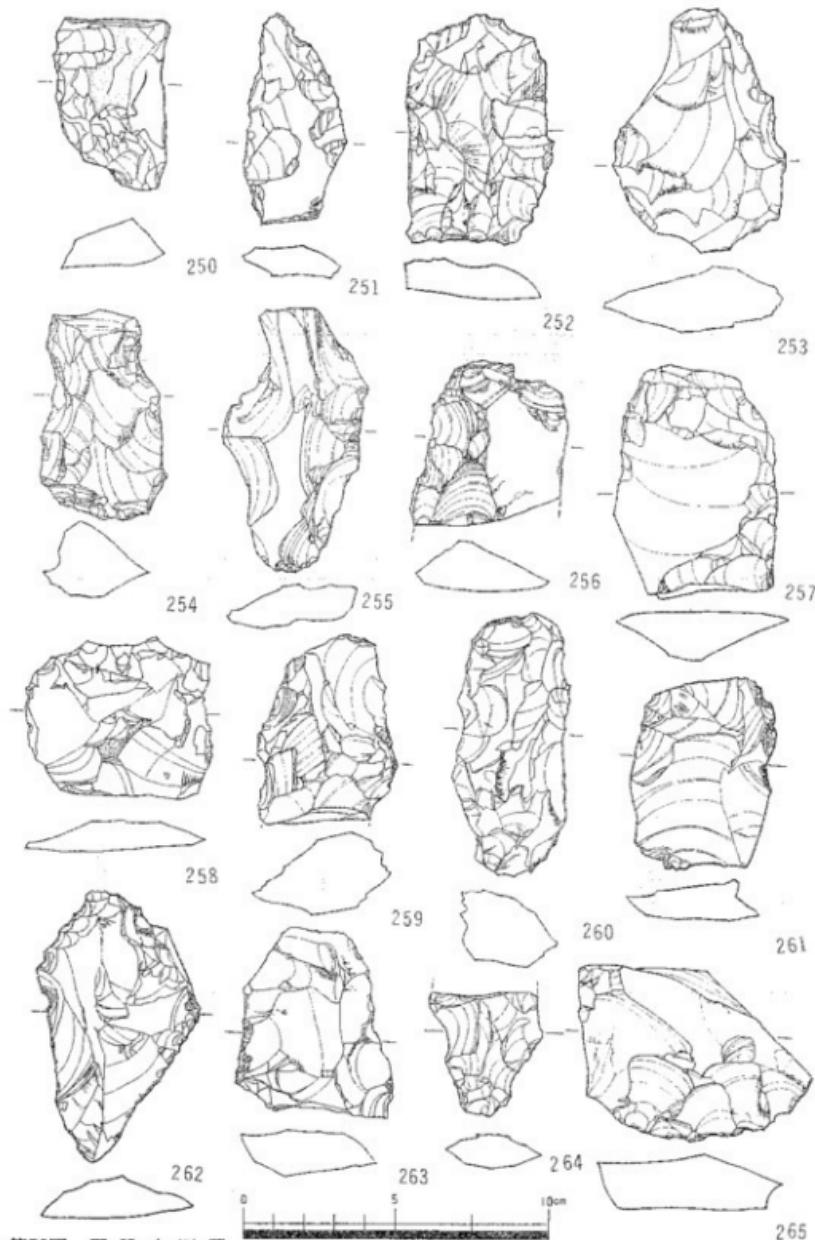


圖73 石器實測圖

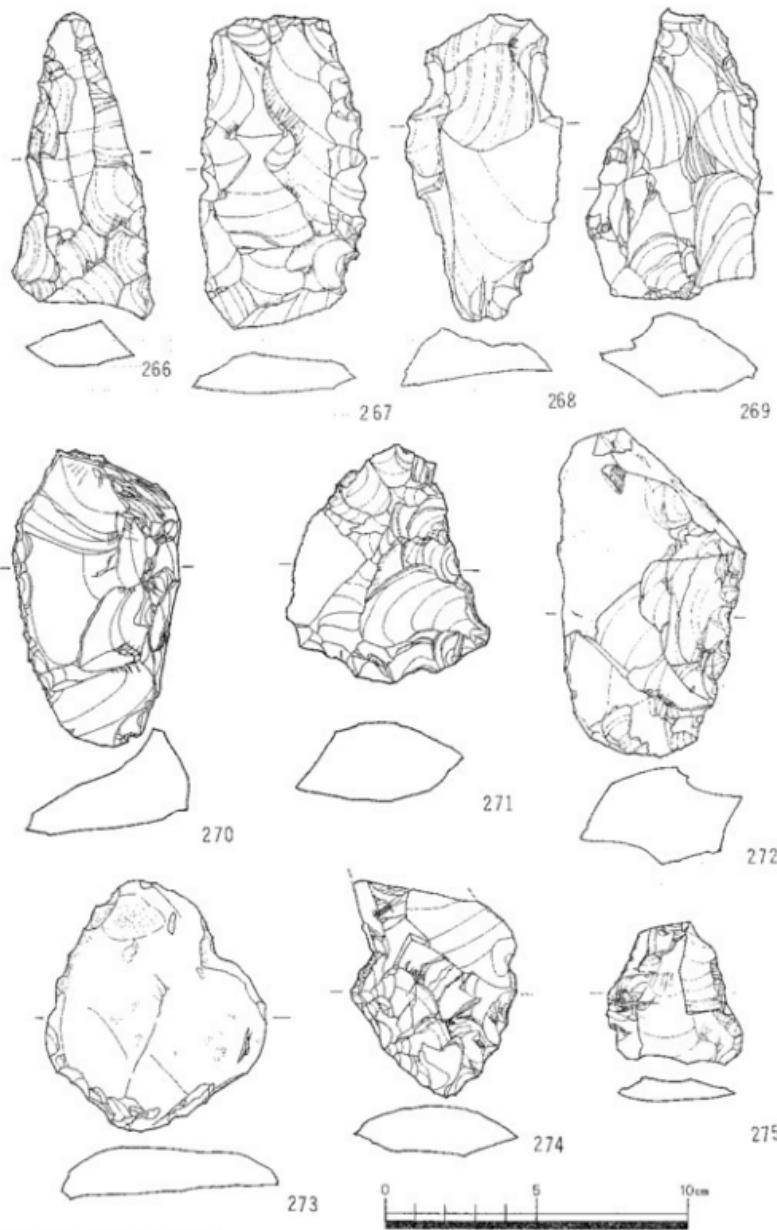




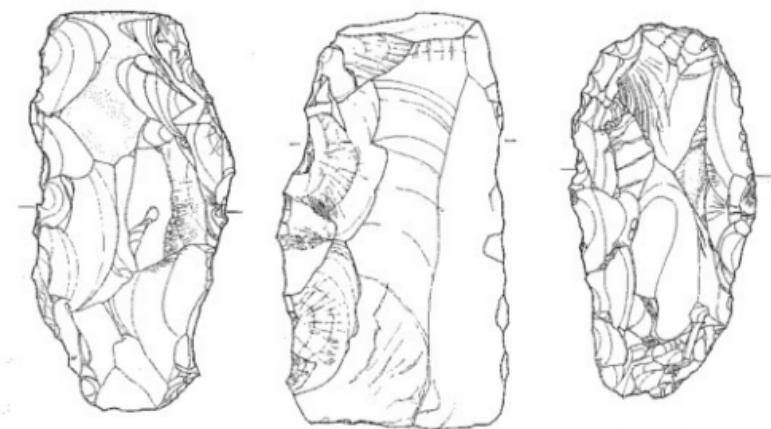
第74図 石器実測図



第75図 石器実測図



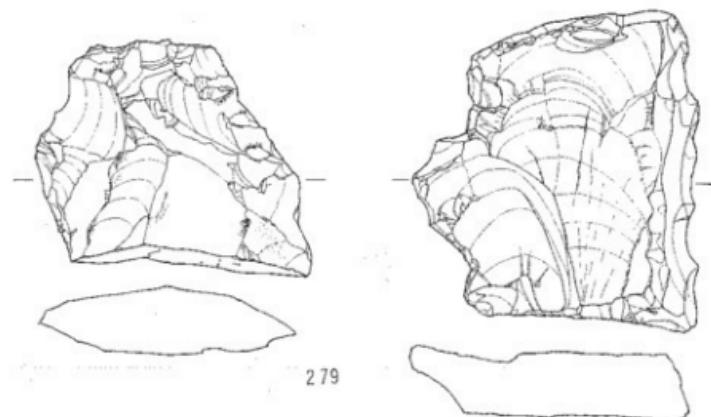
第76図 石器実測図



276

277

278

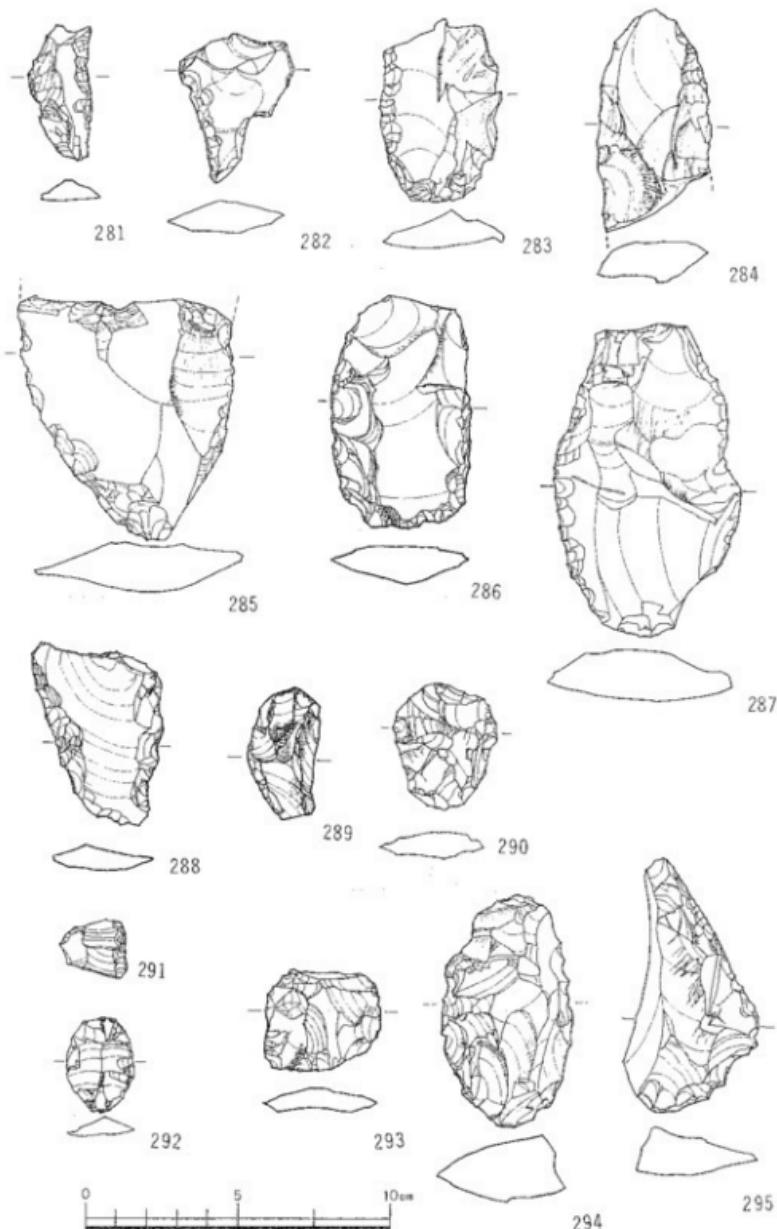


279

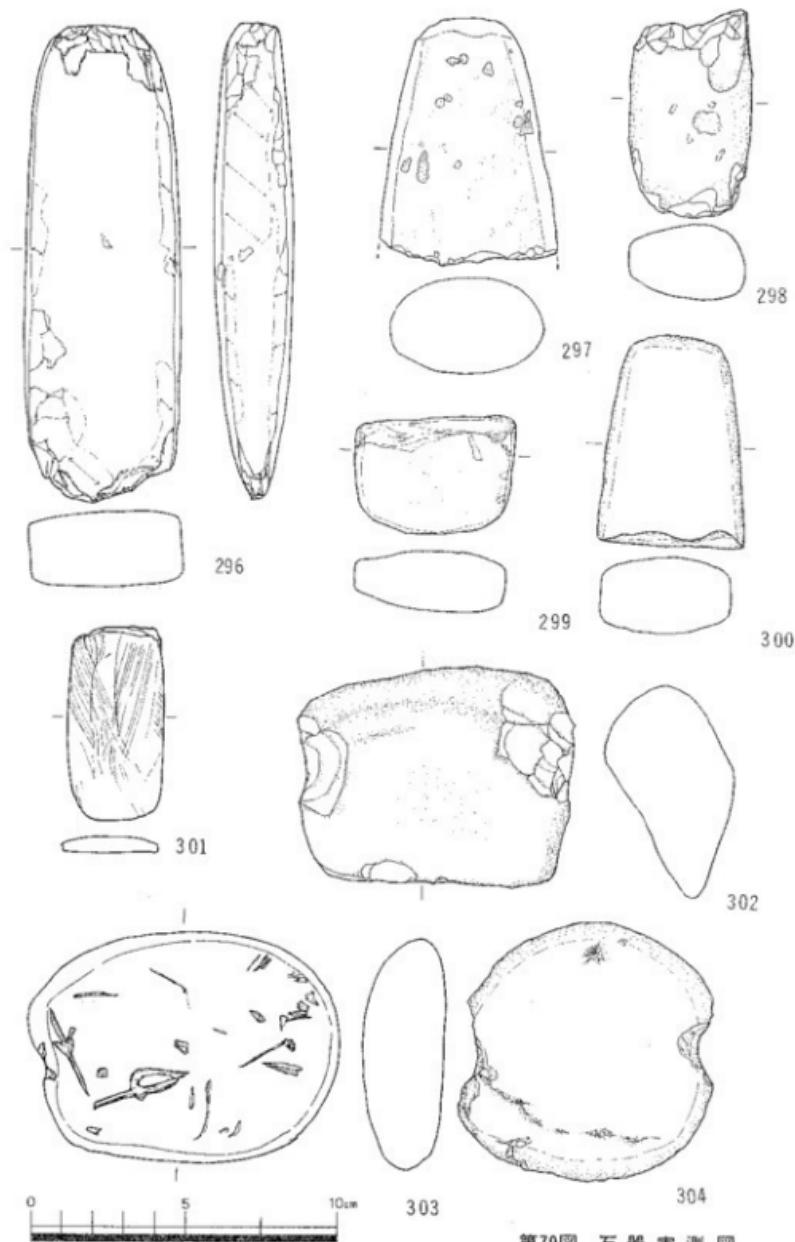
280



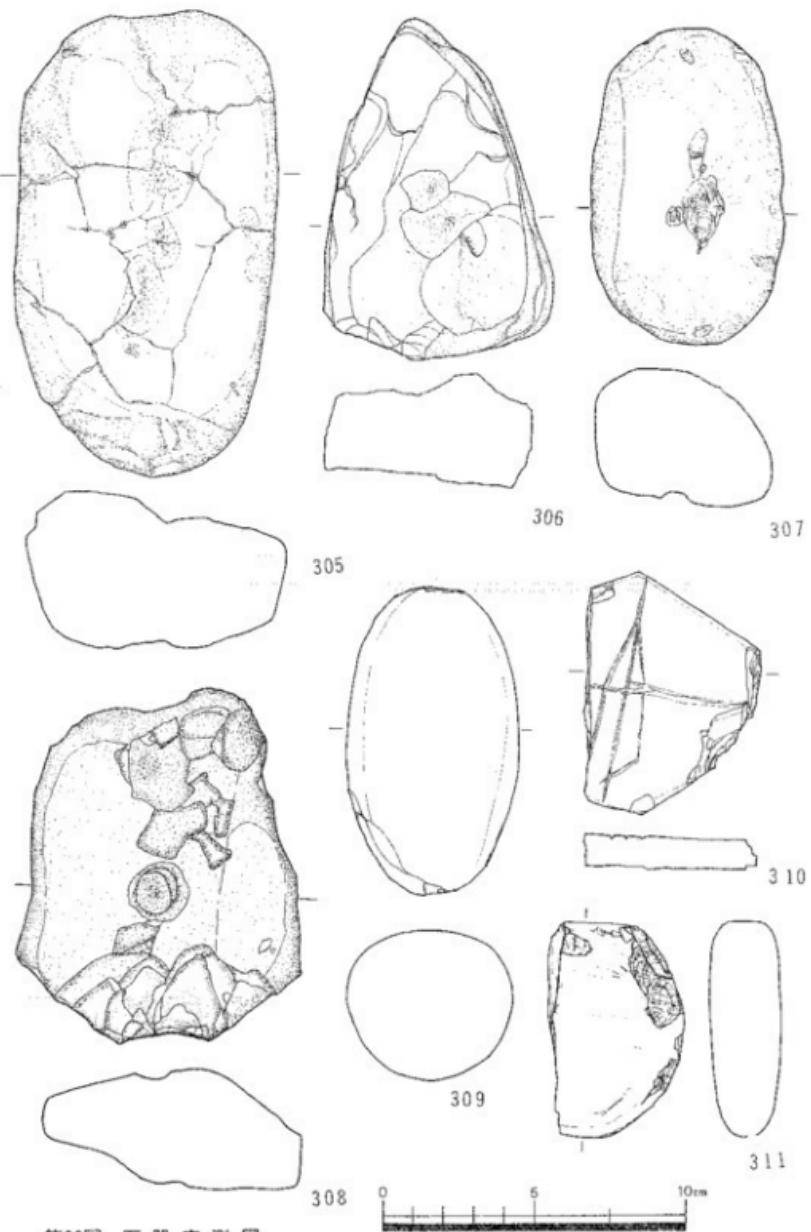
第77図 石器実測図



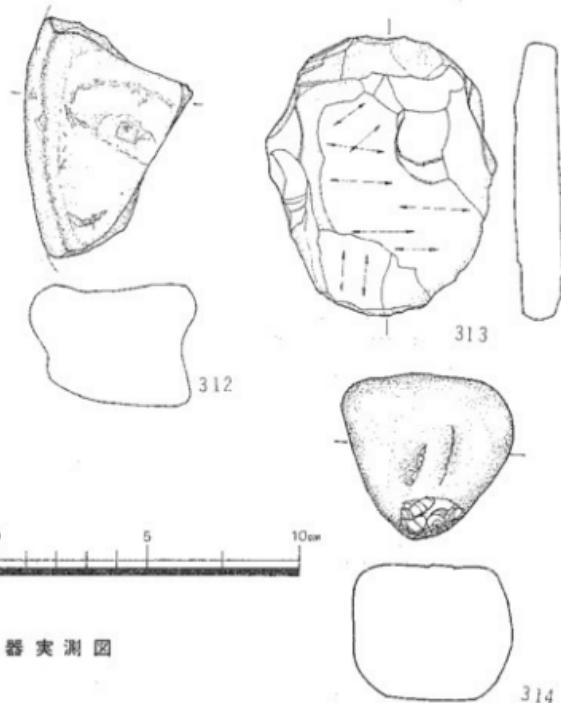
第78図 石器 実測図



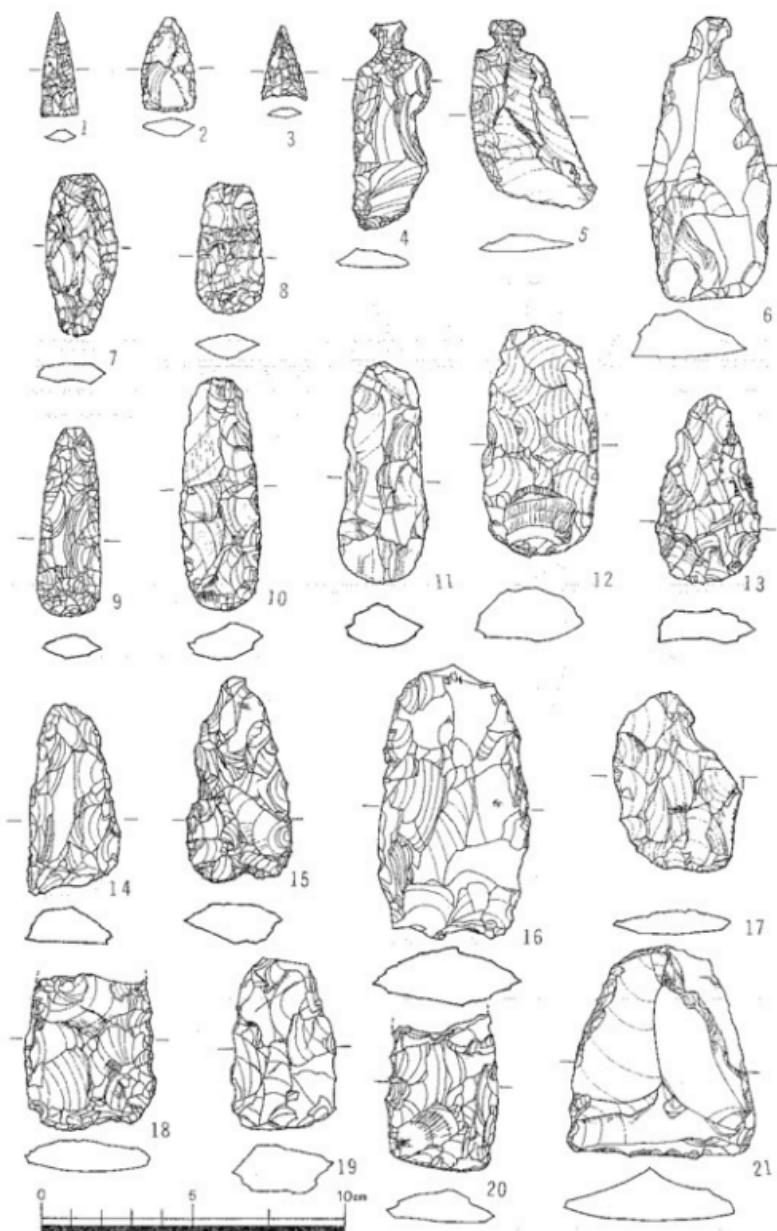
第79図 石器実測図



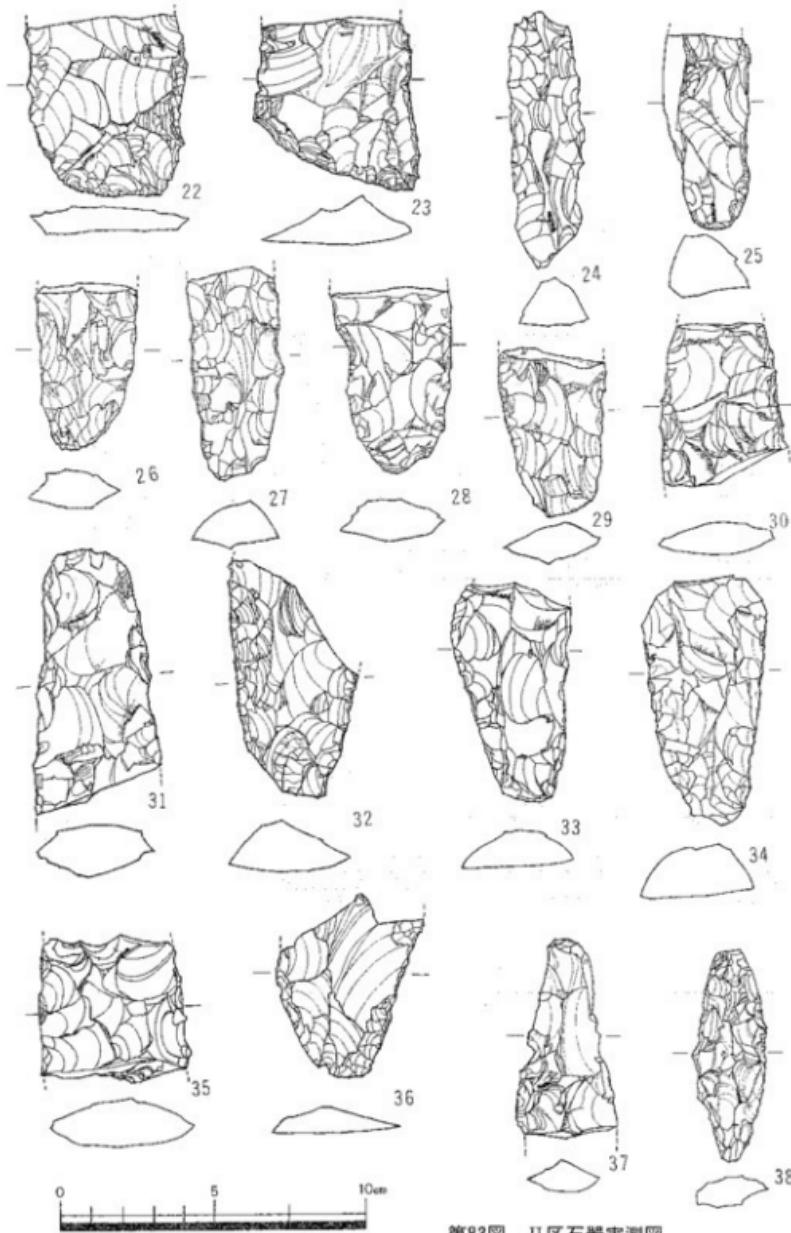
第80図 石器実測図



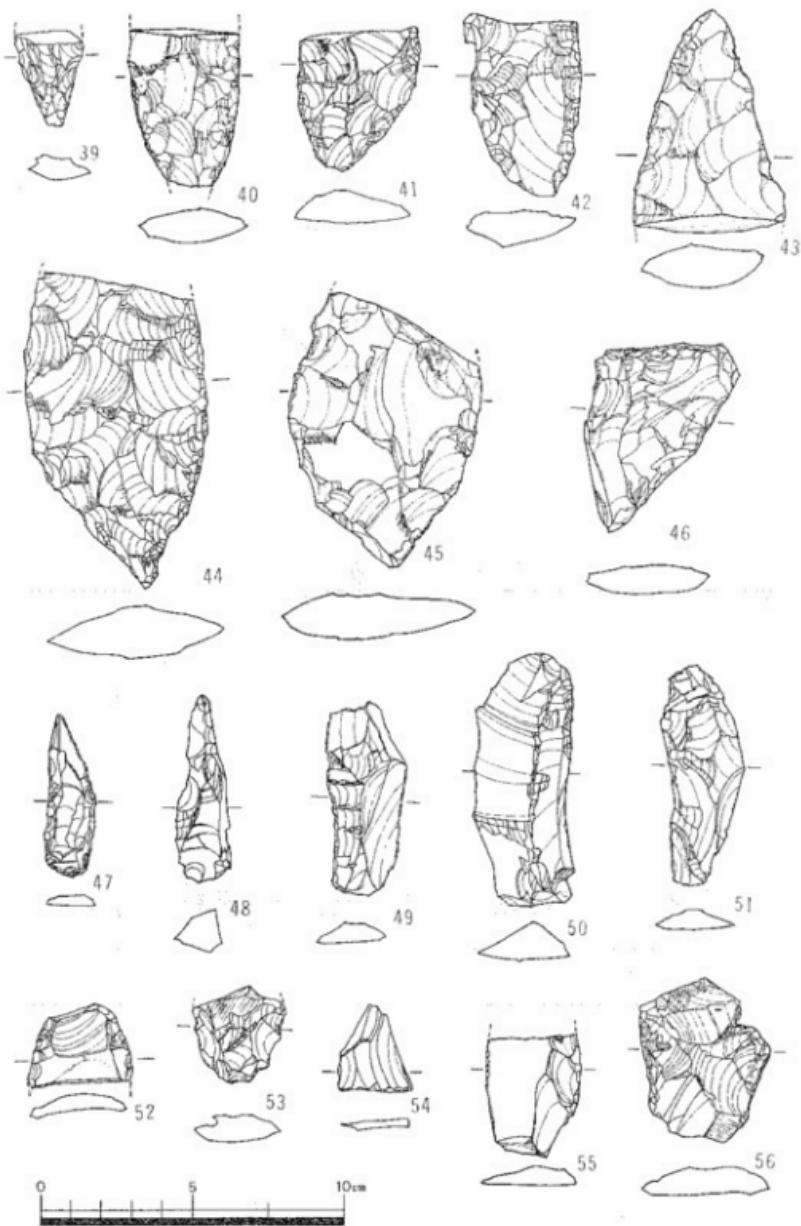
第81図 石器 実測図



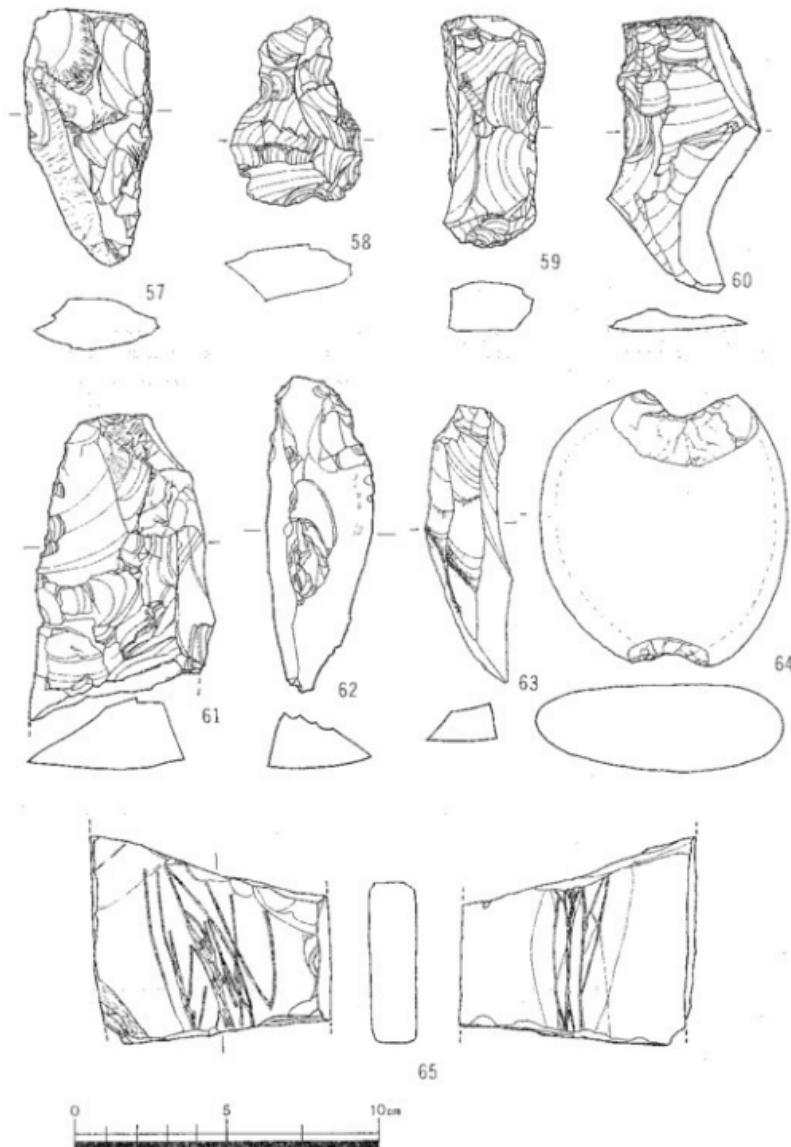
第82図 II区石器実測図



第83図 II区石器実測図



第84図 II区石器実測図



第85図 II区石器実測図

第2表 II 地区出土石器一覧表

出土地	団-No	種類	石質	その他	出土地	団-No	種類	石質	その他
3 II	82-1	石 錐	真岩		4 II	83-34	使用痕有	真岩	
S I 17	82-2	"	"		8 II	83-35	"	"	
S I 17	82-3	"	"		15 III	83-36	"	"	
10 II	82-4	石 鏽	"		8 II	83-37	"	"	
2 III	82-5	"	"		3 II	83-38	"	"	
8 II	82-6	"	真岩?		表 採	84-39	ポイント?	"	
4 III	82-7	石 鏽	真岩?		4 III	84-40	"	"	
3 II	82-8	"	真岩		10 III	84-41	"	"	
4 III	82-9	"	"		2 III	84-42	"	"	
4 III	82-10	"	"		3 II	84-43	"	"	
2 II	82-11	"	流紋岩		7 II	84-44	"	"	
10 III	82-12	"	真岩		3 II	84-45	使用痕有	"	
13 II	82-13	"	"		S I 17	84-46	"	"	
S I 17	82-14	"	"		9 II	84-47	"	"	
12 III	82-15	"	"		13 II	84-48	"	"	
10 IV	82-16	"	"		2 III	84-49	"	"	
3 II	82-17	"	"		4 II	84-50	石 刃(有)	"	
2 III	82-18	"	"		4 III	84-51	使用痕有	"	
8 II	82-19	"	流紋岩		8 II	84-52	"	"	
8 II	82-20	"	真岩		2 III	84-53	"	"	
7 II	82-21	"	"		4 III	84-54	"	"	
7 II	83-22	"	"		4 III	84-55	"	"	
7 II	83-23	"	"		4 III	84-56	"	"	
13 II	83-24	使用痕有	"		S I 17	85-57	"		
13 II	83-25	"	"		7 II	85-58	"	真岩	
7 II	83-26	"	"		表 採	85-59	"	"	
3 III	83-27	"	"		7 II	85-60	"	"	
13 II	83-28	"	"		8 II	85-61	石 刃(有)		
S I 17	83-29	"	"		4 III	85-62	使用痕有		
4 II	83-30	"	"		2 III	85-63	"	真岩	
3 II	83-31	"	"		8 II	85-64	石 鋸		
3 II	83-32	"	"		15 III	85-65		真岩	
7 II	83-33	"	"						

第3章 ま と め

才の神遺跡は秋田県南部の日本海岸に近い地域に位置する。縄文時代のこの地域は所謂大木様式土器と円筒土器様式とか接触する地域にあたる。しかも日本海沿岸では円筒土器様式の土器群が南下し、この時期の遺跡では円筒土器を出土する遺跡が多い。才の神遺跡は直線距離にして日本海岸から9kmのところにあり、しかも芋川沿いにあるにもかかわらず、円筒土器様式の土器が全く発見されず、大木様式の土器だけ出土したこと一つの特徴がある。

今度の発掘調査では竪穴住居跡12軒発見された。その内訳は前期（大木2b式）のもの1軒、中期（大木8b式）のもの11軒である。秋田県の南部で前期の竪穴住居跡は初めてのものでありその意義は大きい。中期の住居跡のあり方は、この時期の他の遺跡の例と同様に何回か建替えていることがわかった。中16mの中で、これだけの竪穴住居跡が発見された結果から推測すると、遺跡全体は広く、竪穴住居跡も相当数埋設していることが予想される。土塙は8基発見されたが、SK-09、SK-13、SK-14は立石を伴っており、その形態などから墓と考えてよい。土塙の中から時期を決定づける遺物は無いが、確認面などから考えると中期のもの、すなわち竪穴住居跡と同一時期のものと考えてよいであろう。そしてこの位置が集落を形成する地域より西側にあり、しかも高いところに位置していることは注目してよいであろう。

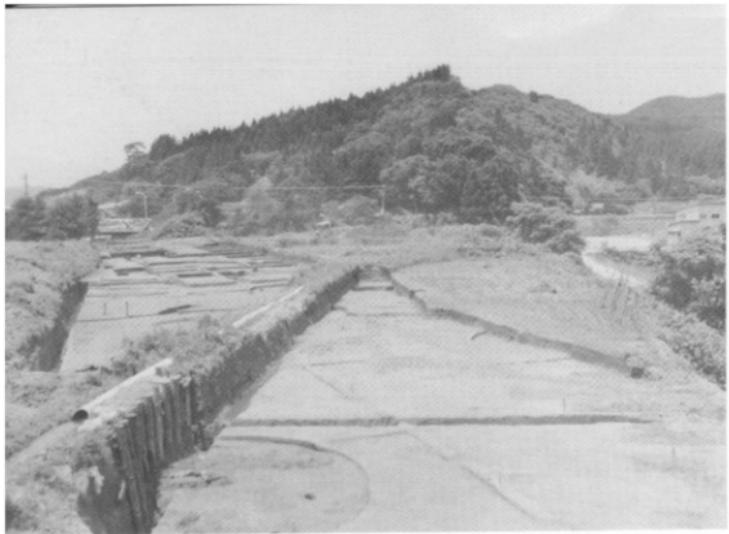
出土土器を見る限りにおいては大木8b式土器が主体で、詳細に見ても2型式ほどの時間差しか認められない。とすると縄文時代中期中葉のかなり時期の限定された集落跡と考えられる。一般的な土器・石器はもちろん、石棒・石皿・三角形土製品・劍状土製品など、その種類と量の多いこと、図版だけに示して解説しなかったが、石核及び石片が集中して出土した地点を3ヶ所確認しており、石器の製造もおこなわれていたことが推測される。加えて過去に発見された石棒などを加えて総合的に判断すると、才の神遺跡はこの地域の縄文時代中期に中心的な役割をはたした遺跡と考えてよいであろう。

縄文時代前期の大木2b式期に初めて人が住みつき、その後しばらく使用されず、縄文時代中期の大木8b式期に集落が営まれたのである。

遺跡の中心地は残っており、遺跡の保護のあり方と今後の調査についても注目され、期待される遺跡である。

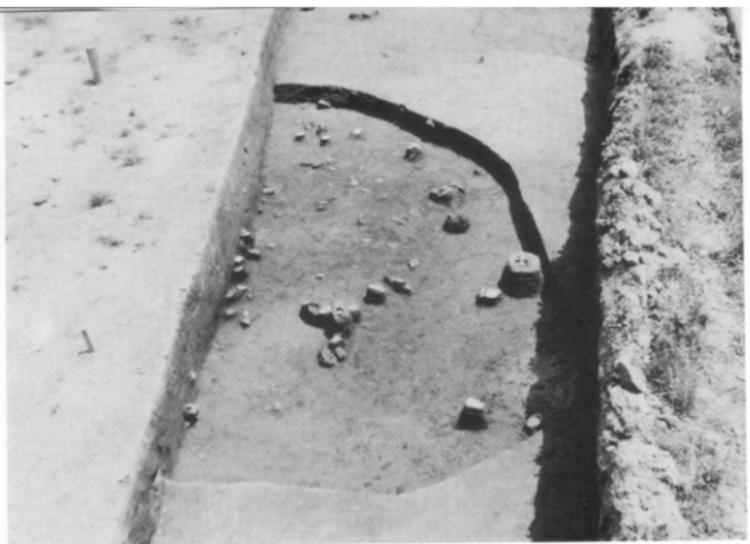


図版 1 上 遺跡遠景（東▶西）
下 発掘区全景（西▶東）

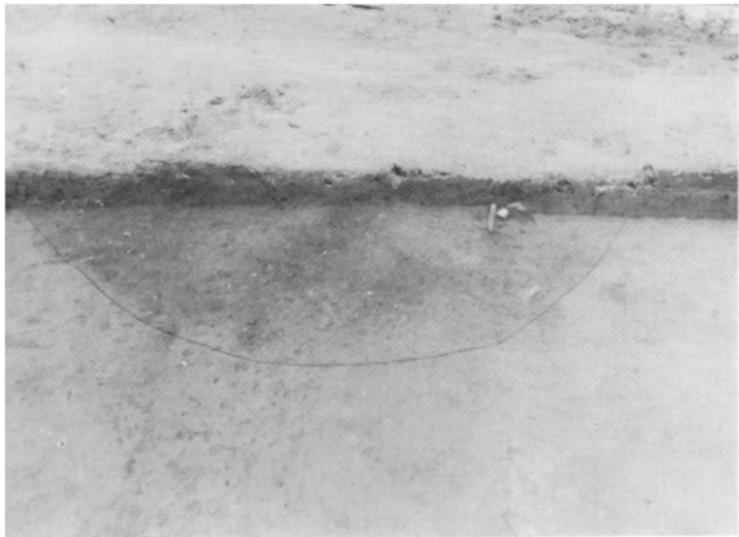


図版2 上 発掘区全景（東▶西）

下 発掘区全景（南▶北）



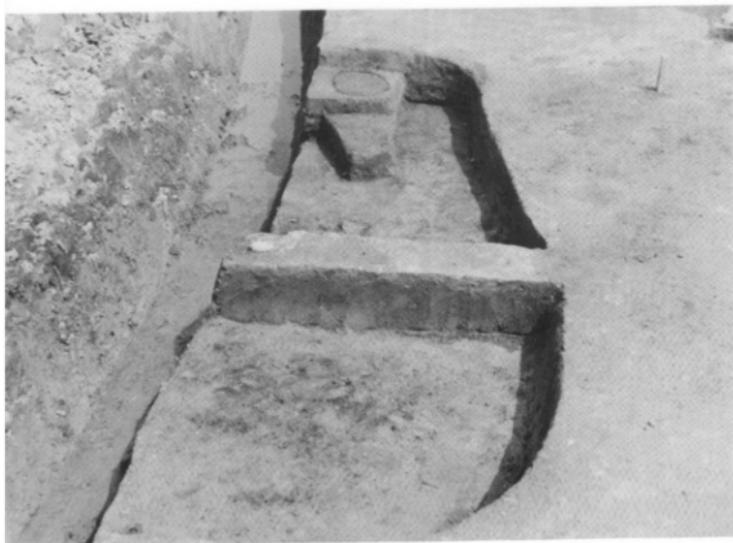
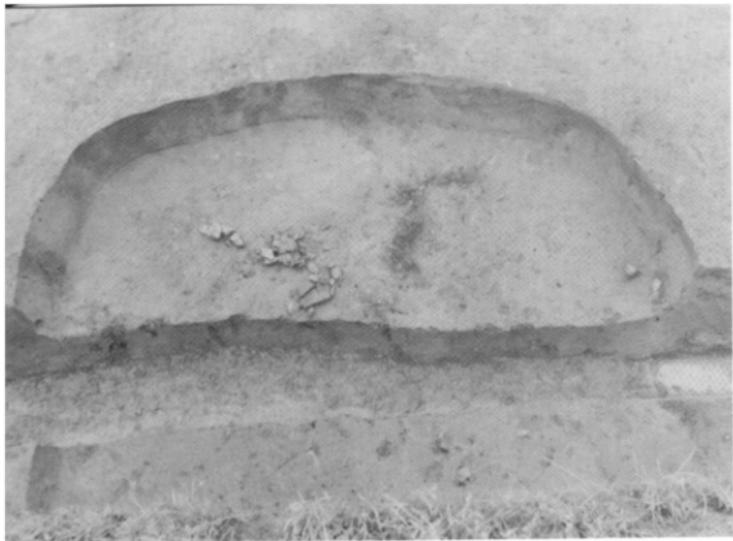
图版 3 SI 01 坚穴住居跡



圖版 4 SI 02 堅穴住居跡



圖版 5 SI 03 壓穴住居跡



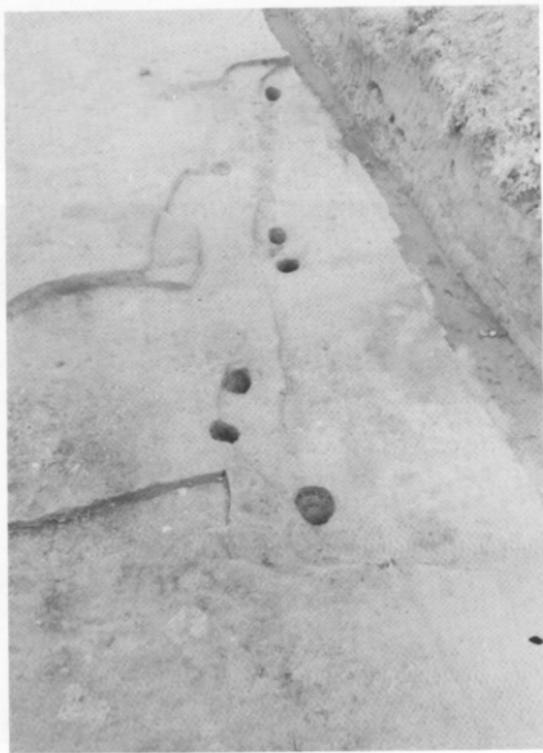
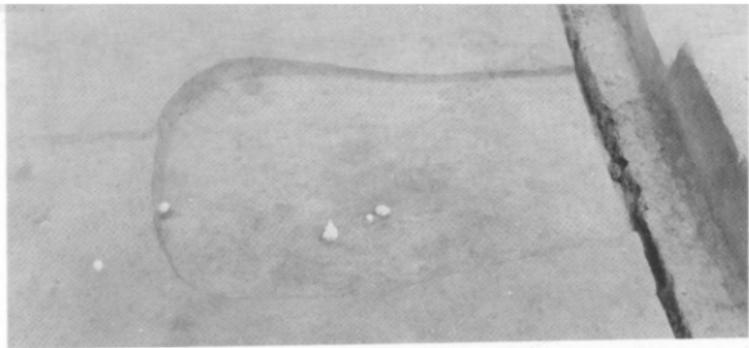
圖版 6 SI 06 穹穴住居跡



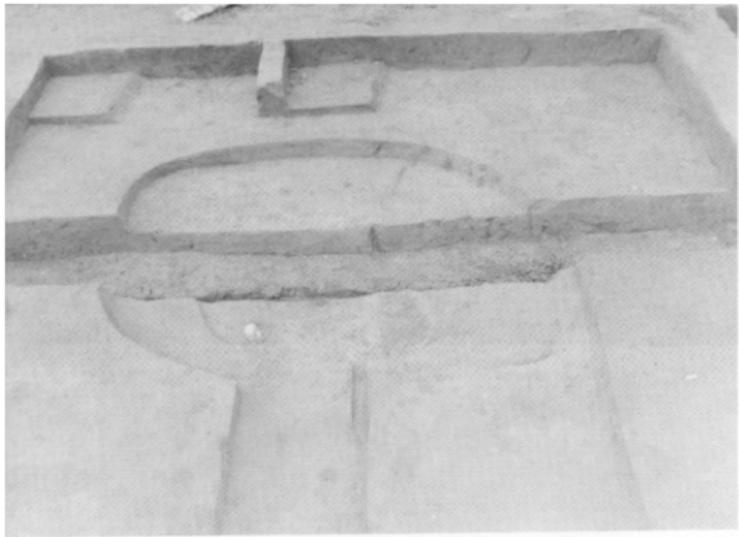
圖版 7 SI 07 堅穴住居跡



圖版 8 S1 10 壓穴住居跡

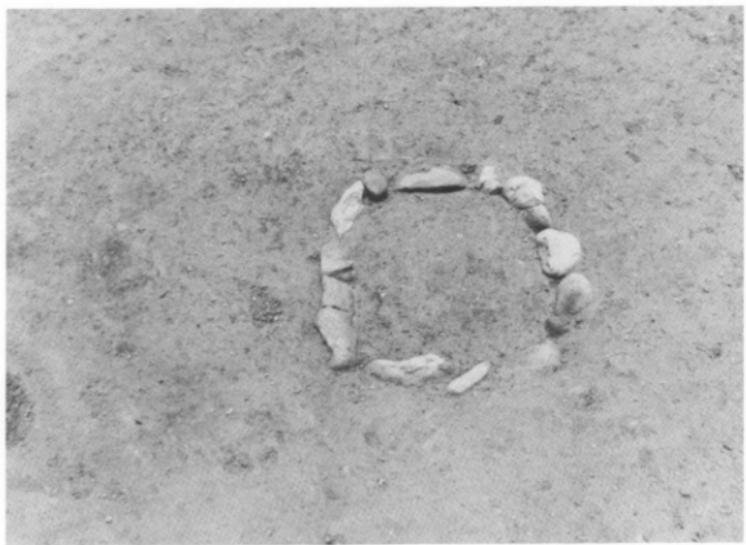
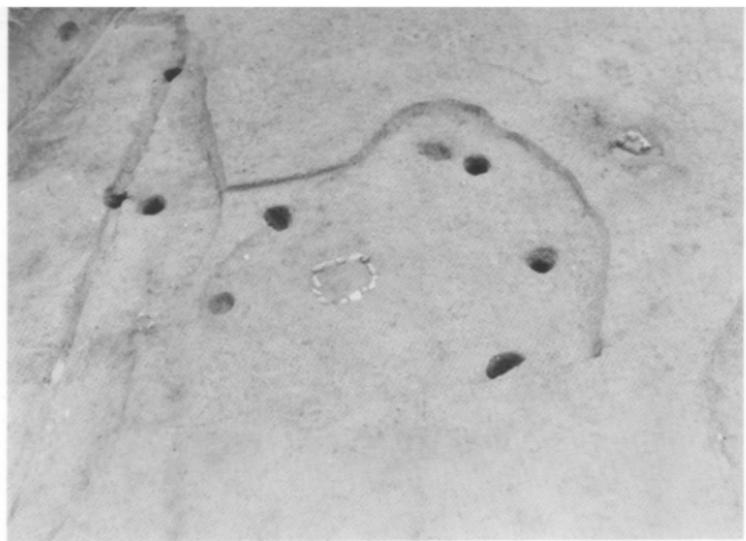


図版9 上 SI 08 竪穴住居跡
下 SI 11 竪穴住居跡

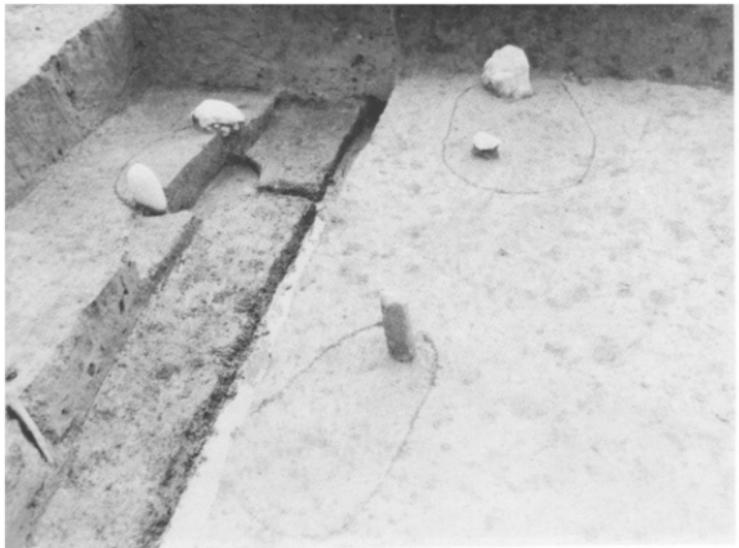


圖版10 上 SI 12 壓穴住居跡

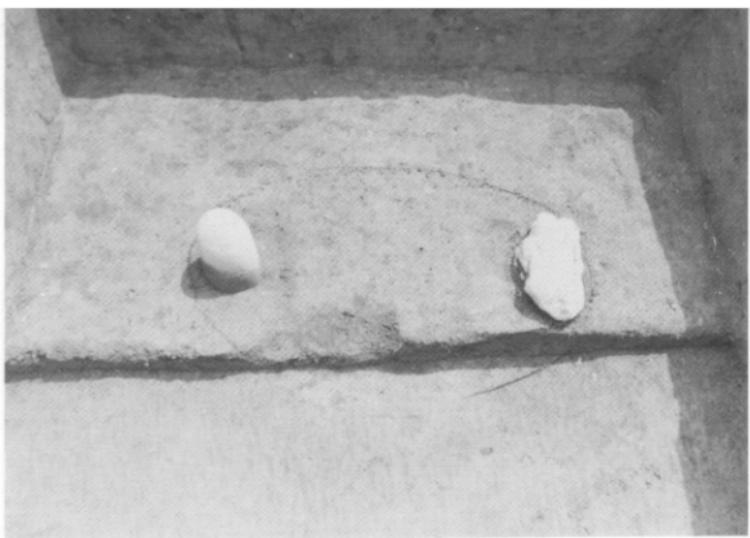
下 SI 15 壓穴住居跡



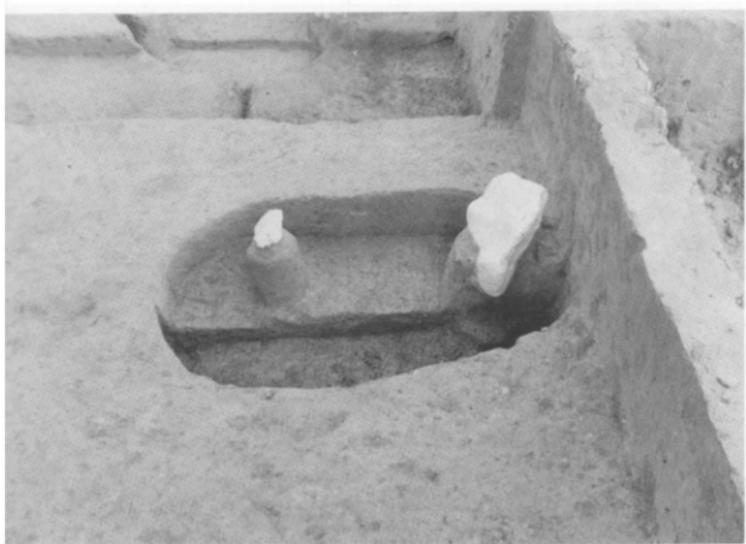
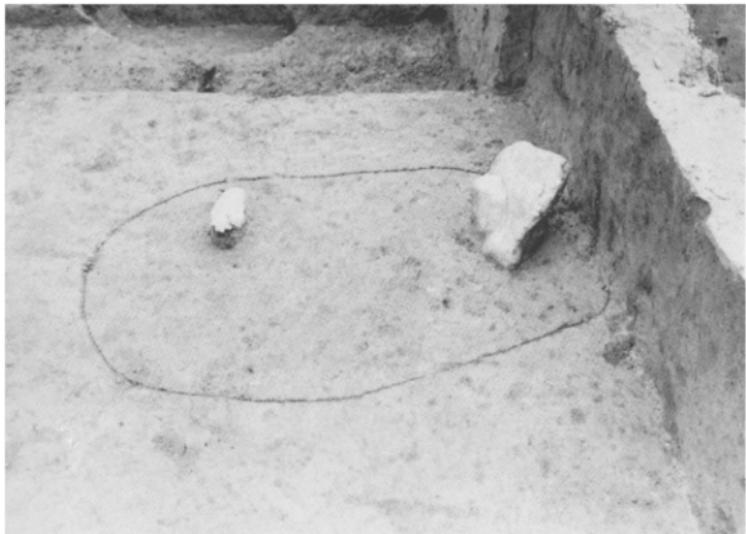
圖版11 SI 16 穹穴住居跡



圖版12 SK 09・13・14 土 塚



図版13 SK 09 土 塚



图版14 SK 14 土 坡

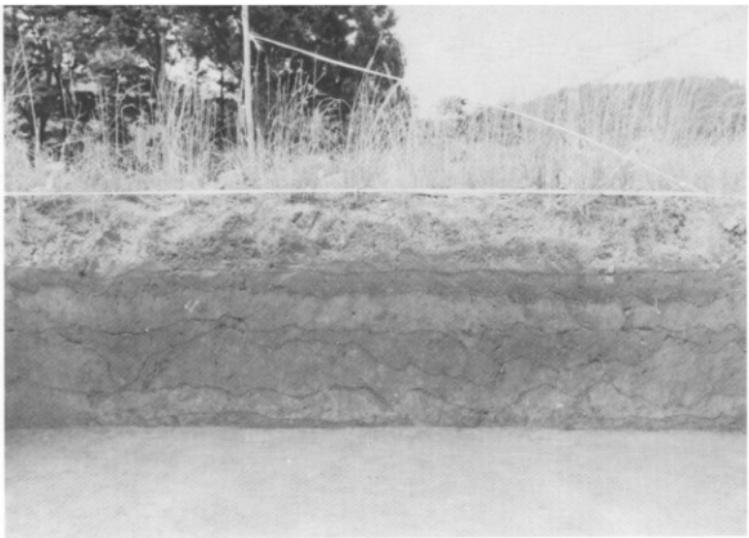


図版15 SK 13 土 塚



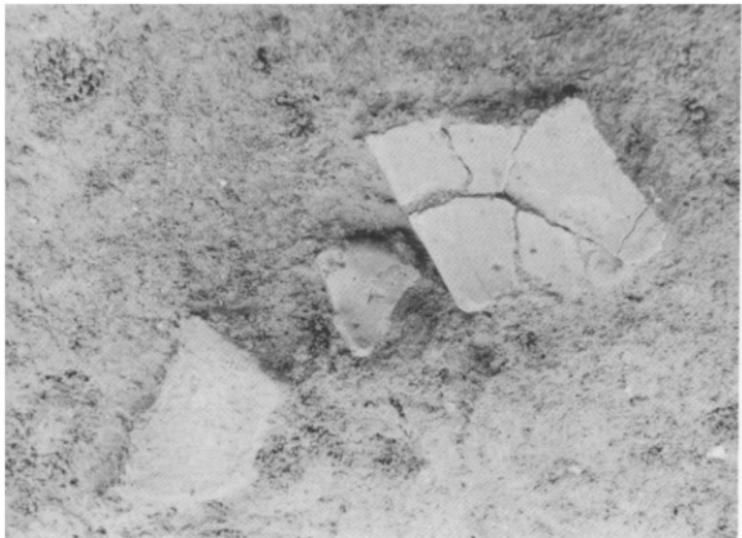
圖版16 上 土器・石棒出土狀況

下 石棒出土狀況



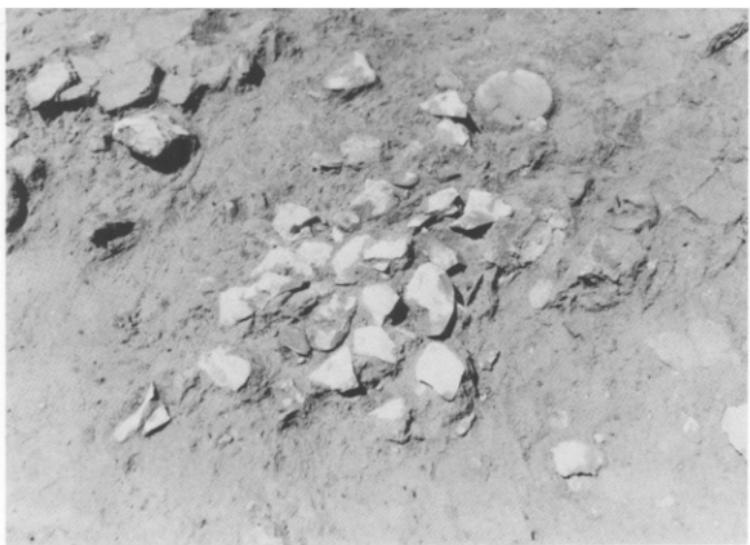
図版17 上 地層図(南▶北)

下 地層図(西▶東)

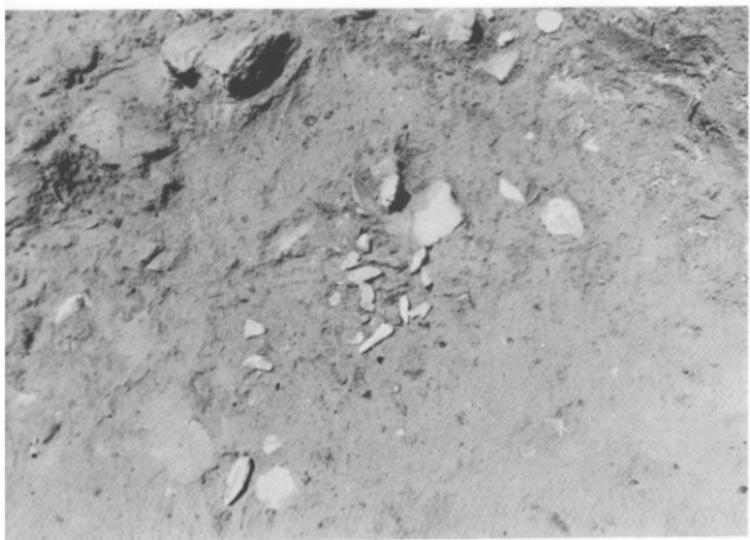


圖版18 上 三角形土製品出土狀況

下 土器出土狀況



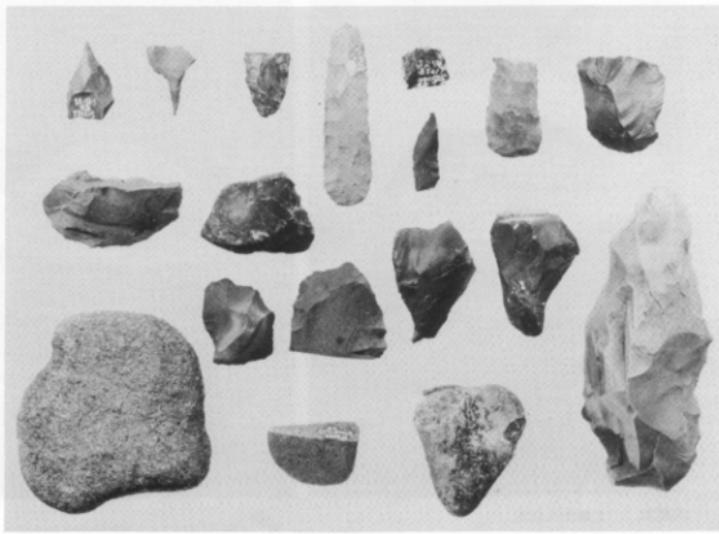
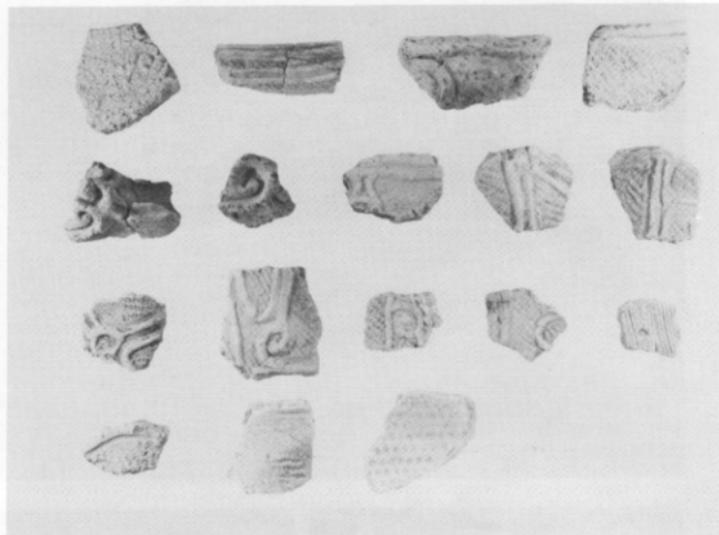
圖版19 石核・石片出土狀況



图版20 石核·石片出土状况



圖版21 土器出土狀況

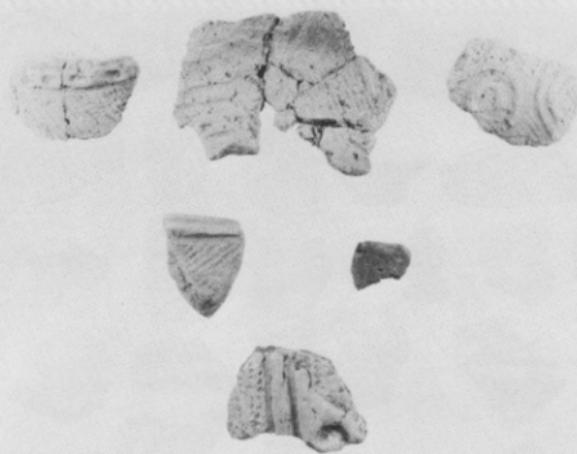


图版22 上 SI 01 出土土器

下 SI 01 出土石器

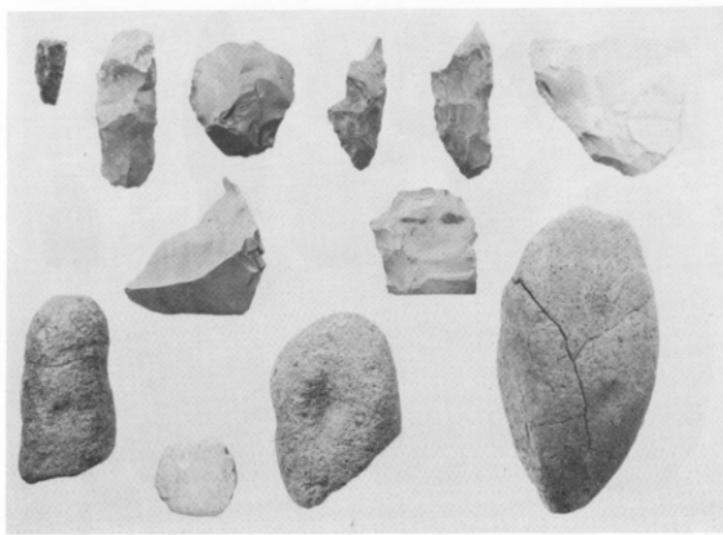
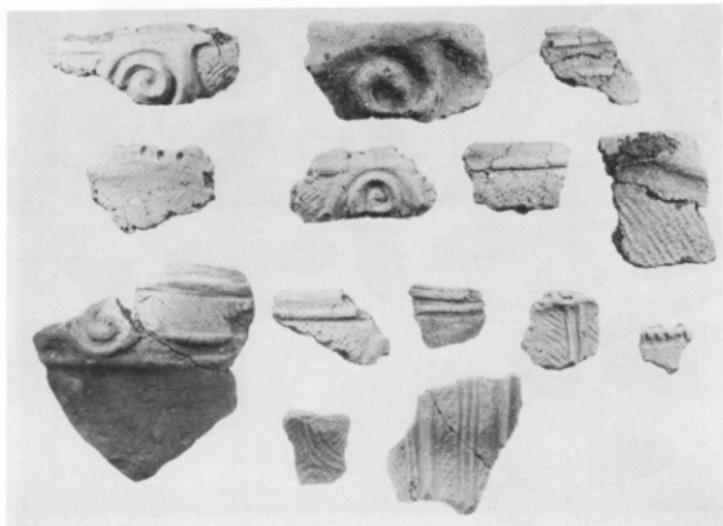


图版23 SI 02 出土土器

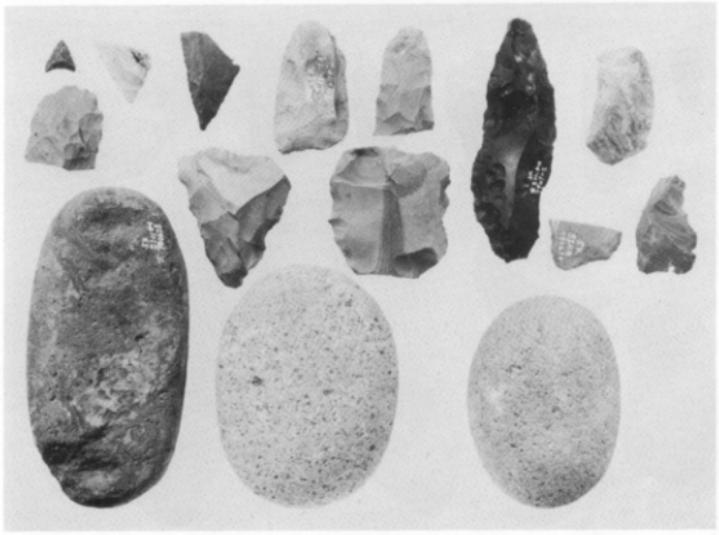


图版24 SI 03 出土土器

SI 06 出土土器



圖版25 上 SI 07 出土土器
下 SI 07 出土石器



图版26 上 SI 11 出土土器
下 SI 11 出土石器

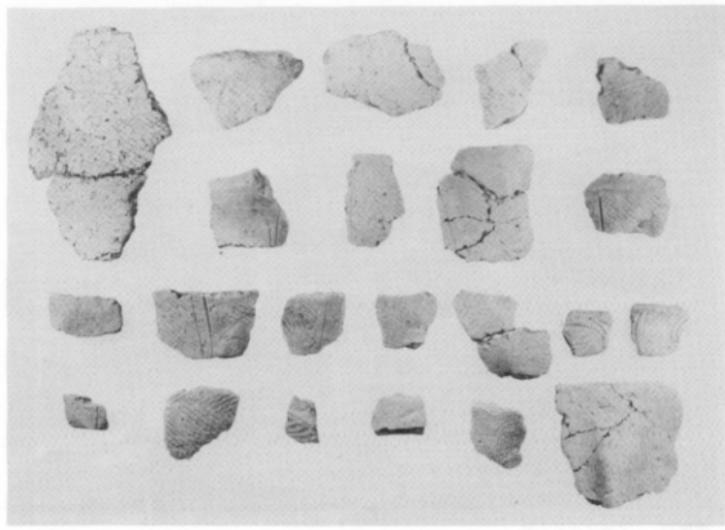


圖版27 上 SI 15 出土土器
下 SI 15 出土石器

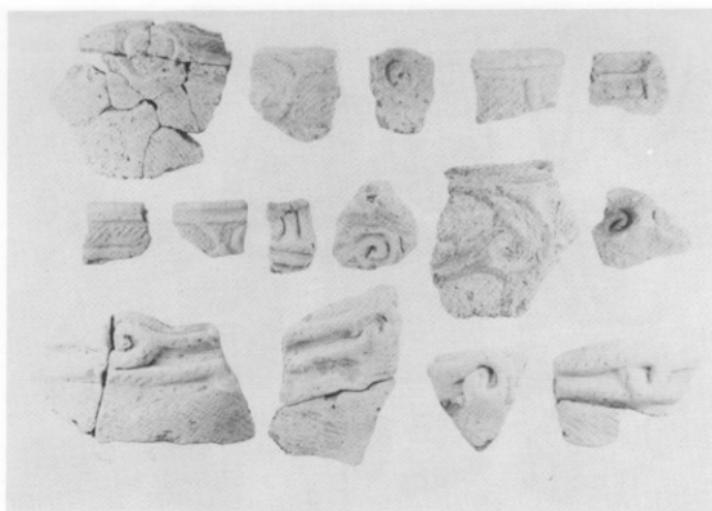


圖版18 上 三角形土製品出土狀況

下 土器出土狀況

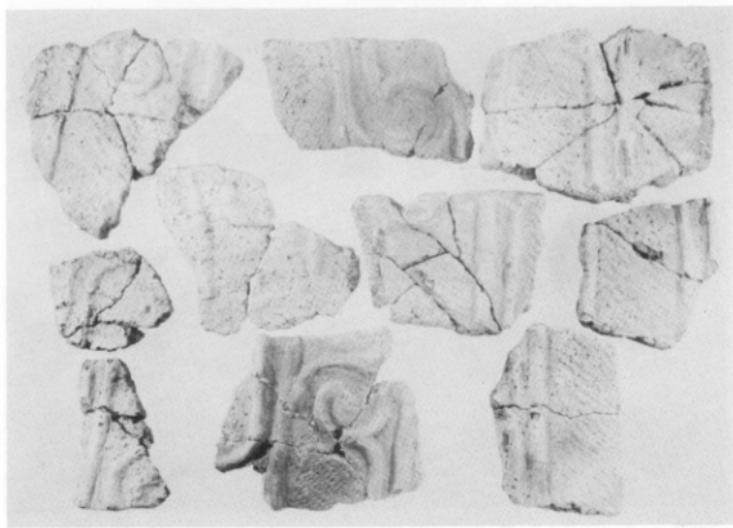
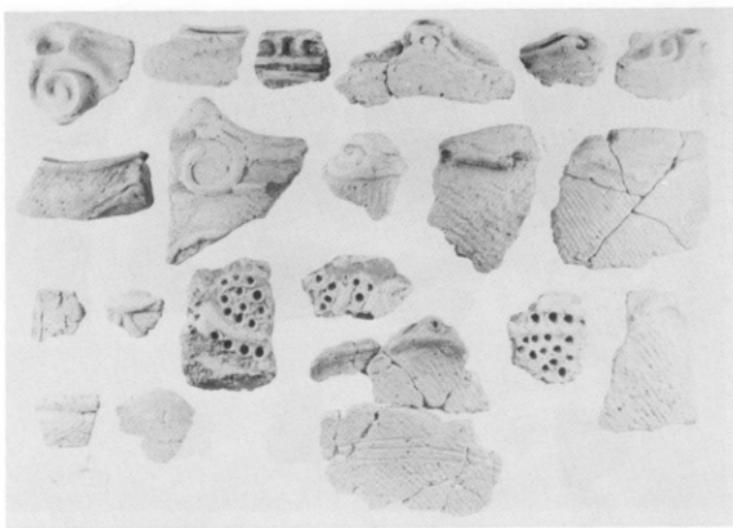


图版29 K地区出土土器



图版30 K地区出土土器

整理：王春霞 摄影：王春霞

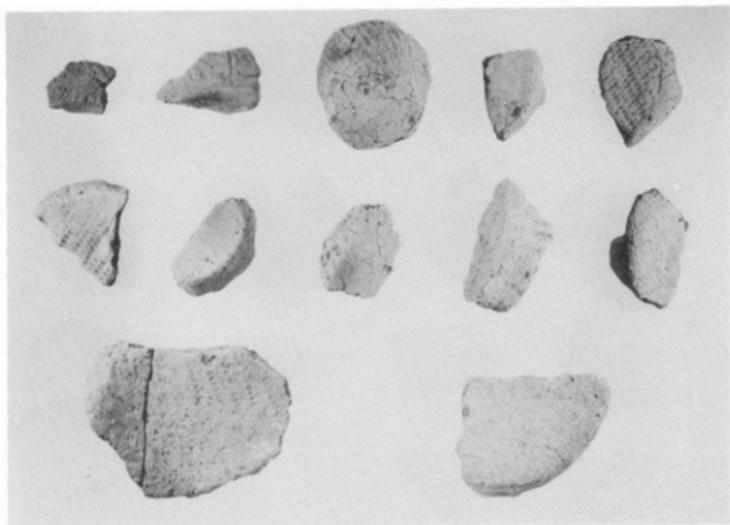


图版31 L地区出土土器

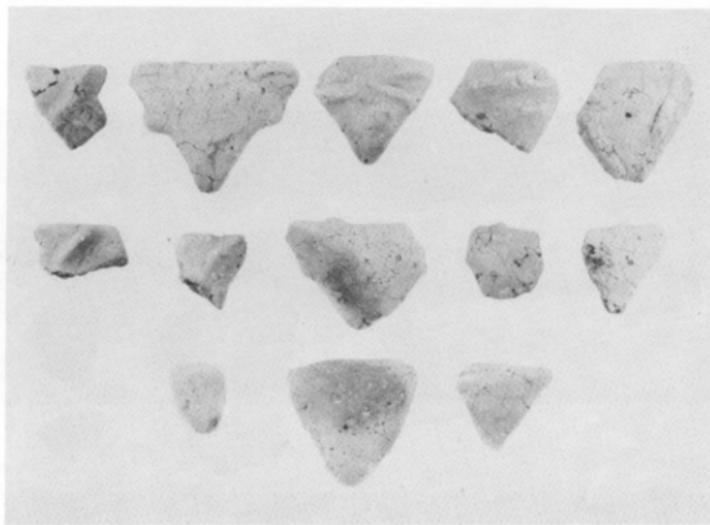


图版32 上 M地区出土土器

下 N地区出土土器



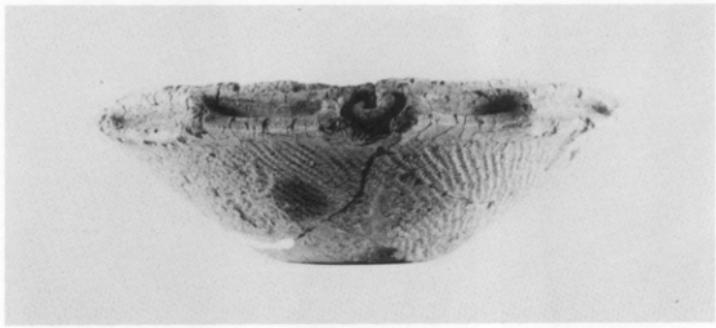
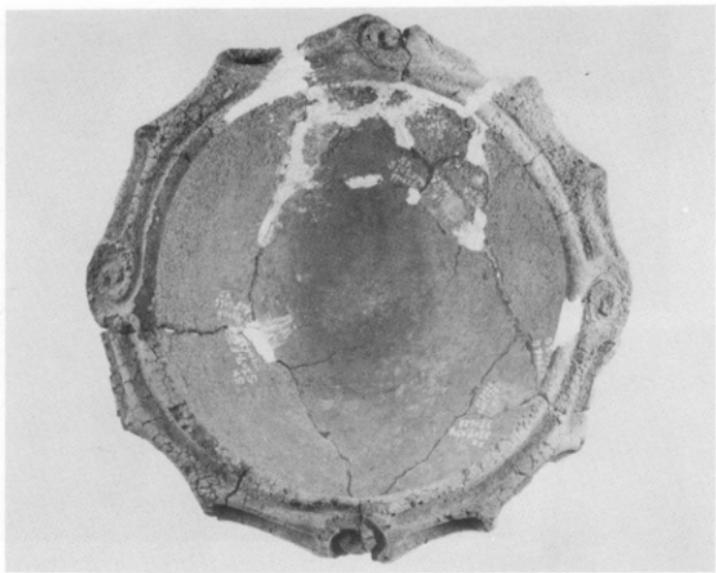
圖版33 上 土器底部
下 昭和43年11月出土石棒



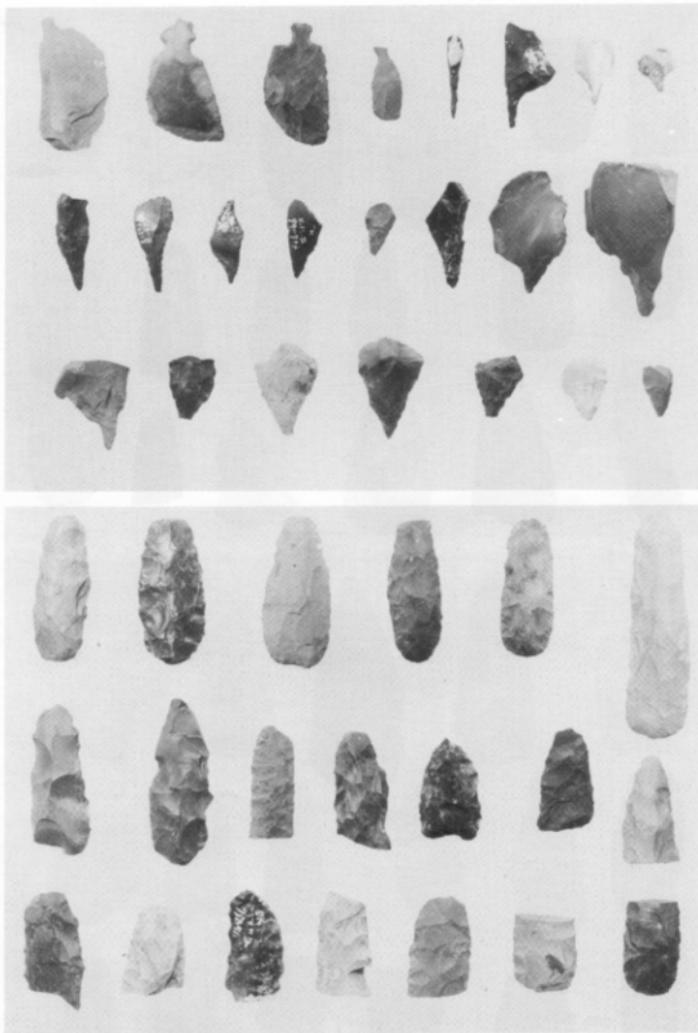
圖版34 三角土製品



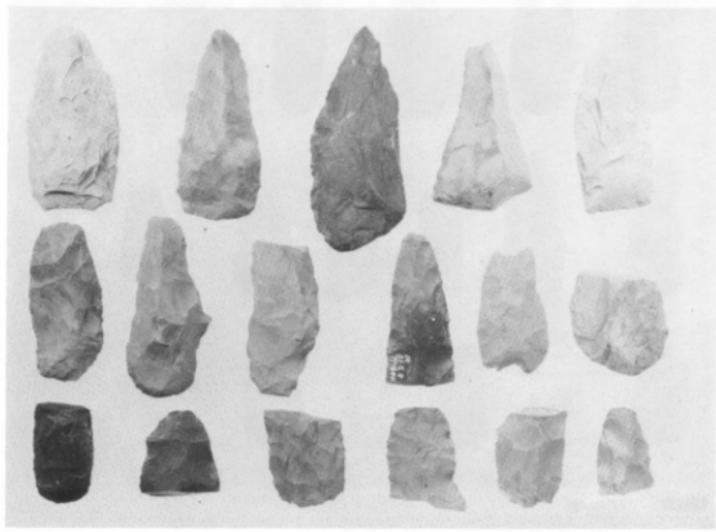
圖版35 上 三角土製品他
下 石 棒



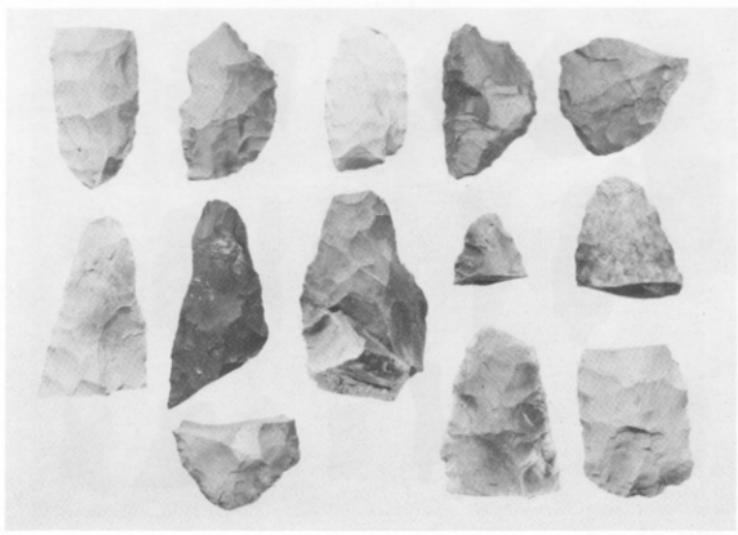
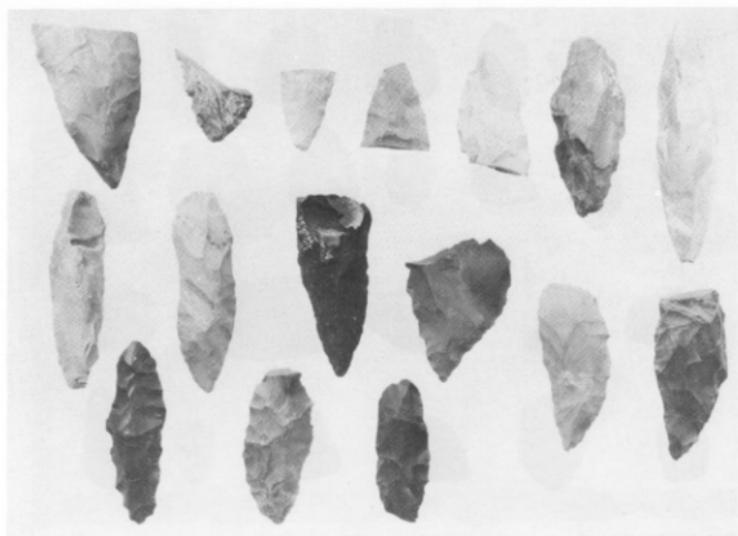
図版36 土 器



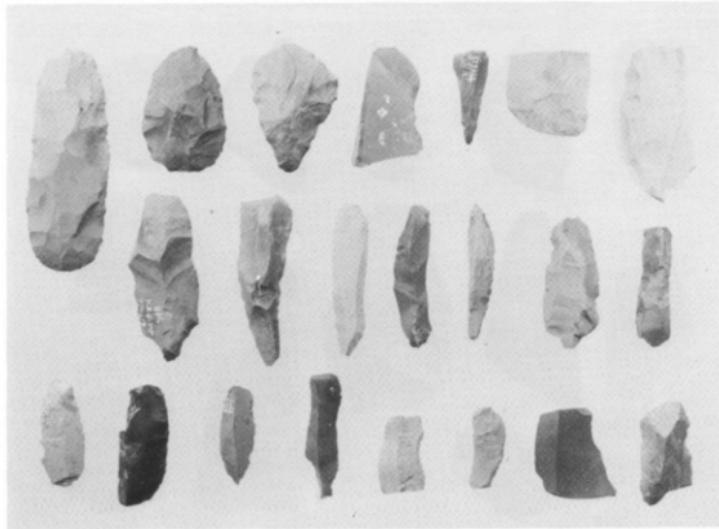
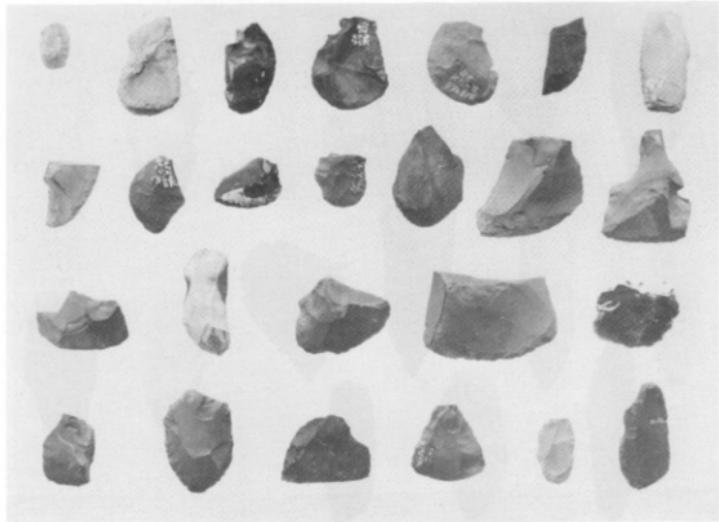
図版37 石器



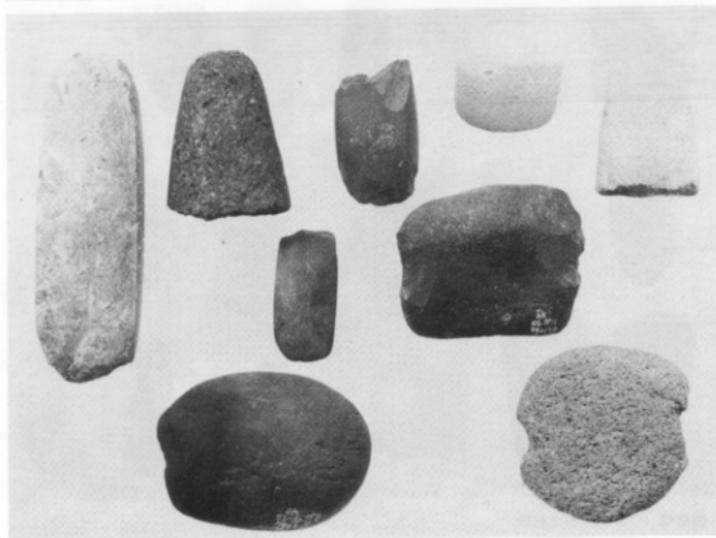
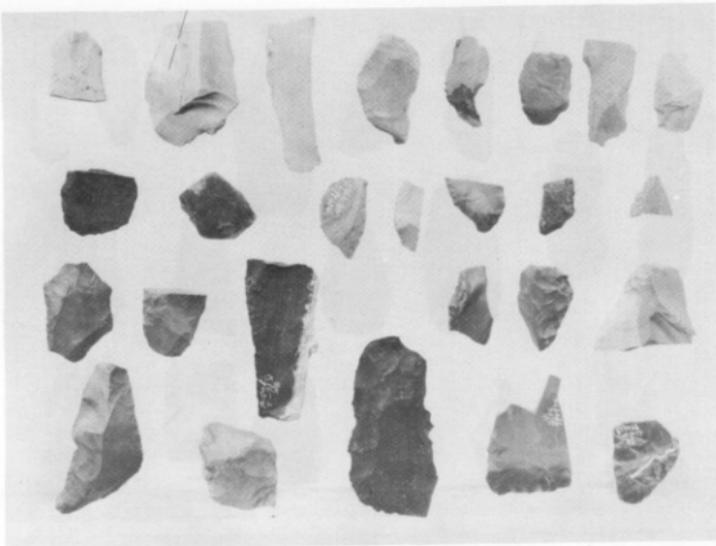
圖版38 石 器



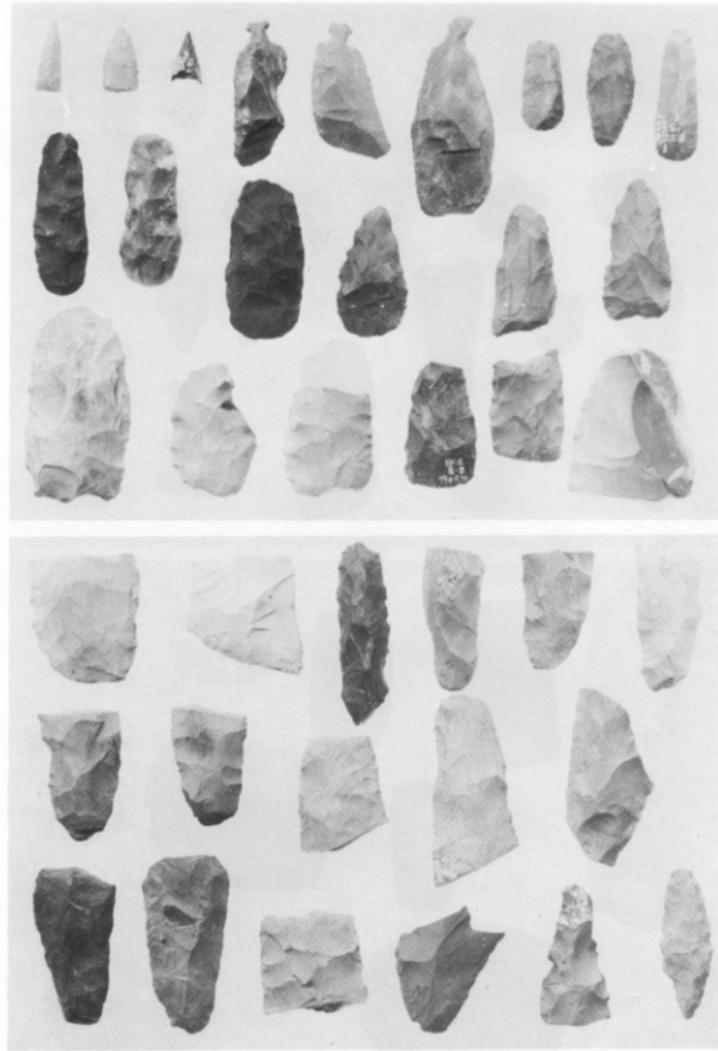
圖版39 石 器



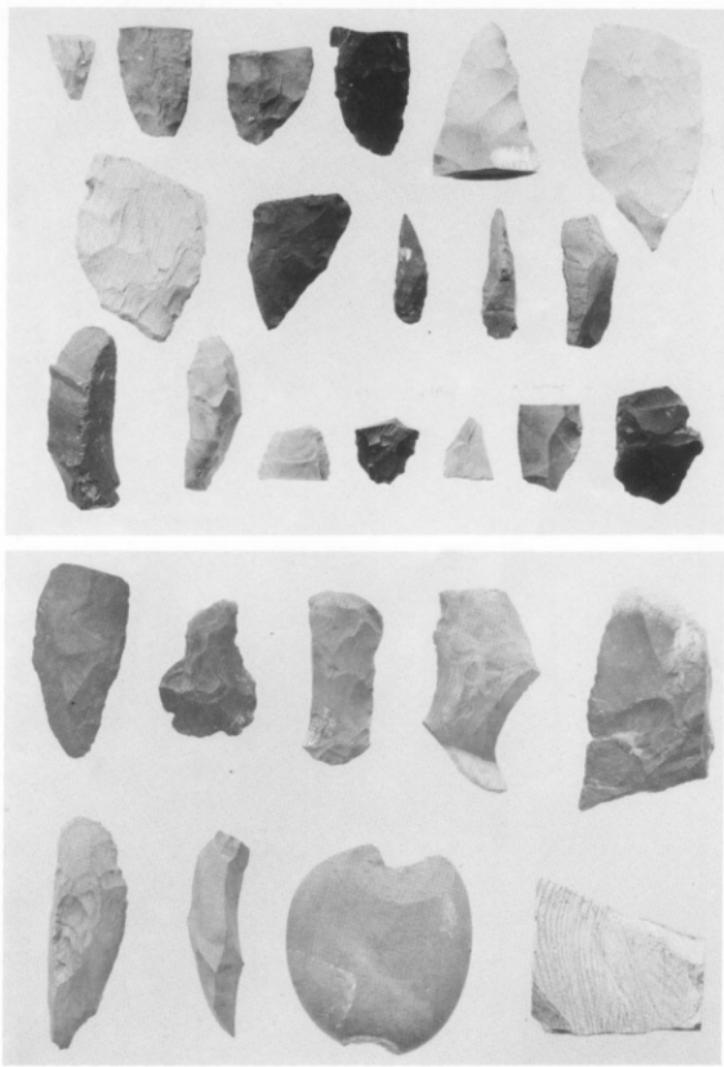
图版40 石器



図版41 石 器



图版42 II 地区出土石器



图版43 II地区出土石器